

等への販賣は最慎重に扱ひ之等の先への貨賣は細大洩さず當該店主任の完全なる認諾を受けたる後に之を爲す事とし、自己の獨斷にて假令小額と雖も任意貸付を爲さざる事に致度し。即ち販賣は本店金物部鋼材係の指示を受くるも、代金回収は各店主任に於て一切の責任を負はされ居る事に付此點誤解なく嚴重に扱はれ度し。

販賣價格及納期

販賣價格及納期は現地在庫品と雖も鋼材組合支部幹事の許可を得て見積受註を爲し先物は本店金物部鋼材係と連絡をとり賣先に對し迷惑の及ばざる様致度し。

第三項 日滿商事と滿洲鋼材組合

前項に於ては昭和十一年における原田組金物部關係の諸組合を瞥見することにより、統制方式に移行しつゝある業界の動向を見たのであるが、昭和十二年（康德四年）に至つて此の基本趨向は更に強化せられた。いまこれを鐵鋼部門に見るに、その需給の不平衡と、異常なる價格騰貴とは、産業開發五ヶ年計畫に支障を生ずるに至つたので滿洲國政府は同年八月廿一日「鐵鋼及鋼材ノ配給管理並ニ價格統制ニ關スル件」を發令し、日滿商事はこれを基礎法

規として鐵鋼配給の全面的統制を擔當することゝなつた。

鋼材不足の緩和ならびに價格統制を目的とする方策として滿洲國政府は同年八月十九日に勅令第二百五十一號を公布して、「輸入税則中ノ稅則第五百五十五號ニ掲グル物品ノ中特ニ滿洲國ニ於テ不足ヲ告グル棒鋼形鋼ニ就キ可及的日滿商事が一元的ニ輸入」することを規定し輸入税を免除したのである。即ち日滿商事は日鐵よりの優先的配給と滿洲國內メーカーとの製品を一元的に販賣し、その統制販賣價格を立山貨車乘に基準を置いて、日鐵建値（輕軌條については日本レール建値）に據る事とし、日鐵よりの輸入運賃、手数料その他の諸經費を考慮して輸入税が免除となつた。また滿洲國內メーカー生産品の買上價格は、製造原價等を基準として適正價格が定められ、その販賣價格との差額をもつて平衡資金に充當されたのである。

周知の如く日滿商事は昭和十一年（康德三年）十一月に、南滿洲鐵道株式會社商事部、滿洲炭礦株式會社營業部並に撫順炭販賣株式會社の業務を繼承し、日滿商事株式會社法に準據した特殊會社として設立せられ、その事業は

1、鐵鋼類及び石炭の販賣、輸出及び輸入

- 2、前號以外の重要生産資材の賣買、輸出及び輸入
- 3、前二號に附帶する事業

を爲すを目的としてゐる。而してこの目的を達成するためには鐵鋼類、非鐵金屬、石炭、骸炭、化學工業製品類、鑽石類、鑛油類の配給を行つてゐるが、鑛油類を除く各品目に關しては法令又は滿洲國政府の訓令に基づいて、滿洲國內の一元的配給に當ると共に輸出入の統制をも行ふことになつた。

前記康徳四年八月二十一日付訓令（産業部訓令第五十七號）に基き、日滿商事は、訓令の定むる統制品種である棒鋼、形鋼、軌條、薄鋼板、ボルトリベット軌條附屬品及び銑鐵等今まで統制の權能を賦與されるに至つたので、指定問屋として合名會社原田組を始め、伊藤信廣商店、大阪鋼材、畑中商店、大信洋行、進和商會、鳥羽洋行の七社を、また丸鋼のみを取扱ふ指定問屋を準組合員として天野、村信、政記、の三社を糾合して、滿洲鋼材組合が組織されたのである。その概要を示せば

- 一、名稱 滿洲鋼材組合
- 一、組合員（前出）

一、目的 共同買付、共同ストツク

一、連帶無限責任

1、賣價の嚴守、2、思惑嚴禁、3、海外流出防止

一、出資金 五〇萬圓—一〇〇萬圓

一、數量割宛 過去七ヶ年の実績により、進和商會・大信洋行で五〇%、他の五〇%を、原田組・伊藤信廣商店・大阪鋼材・畑中商店・鳥羽洋行で持ち、丸鋼は八店に配分する。

一、取扱範圍 本組合の取扱は軍、滿鐵、滿洲國官廳、昭和製鋼所大口特殊關係先は除外、品目は平浪會取扱以外全部に亘る

といふが如きカルテル的組織の下に、根本的な販賣統制方策が樹立され、組合員にして若し統制を紊すものがあれば取引停止の制裁を受ける規約によつて、嚴正な價格維持が實施されたのである。

康徳五年四月には鐵鋼類統制法が公布され

一、鐵不足の一般的情勢に依り配給を統制して消費の合理的調整を圖ること

二、全般的鐵價暴騰の波が滿洲へ波及することを防止し滿洲國內に於ける鐵價を調整すること

等の諸點が強化された。

鐵鋼類統制對象は、同法第一條に規定するところの鐵鋼類と、四月一日産業部令第二十號を以て公布された指定品種とに區別される。即ち第一條には

本法ニ於テ鐵鋼類ト稱スルハ銑鐵、鋼塊、ブルーム、ピレット、スラブ、シートバー、チンバー、スケルフ、線材、棒鋼、形鋼、鋼板、鋼管、軌條、フィツシユ・プレート、ボールド、ナット、ワツシャール、リヅエツト、スパイク、線索、釘、線、鋳力板、鑄鐵品及屑鐵ヲ謂フ。

前項ノ鋼板、鋼管、線索及釘ハ亞鉛鍍セルモノヲ含ム

指定品種は

銑鐵、鋼塊、ブルーム、ピレット、スラブ、シートバー、チンバー、スケルフ、線材、棒鋼、形鋼、鋼板、鋼管、軌條、フィツシユプレート、鋳力板（特殊鋼を含まず）

から成つてゐる。

而してこれらの鐵鋼類は日滿商事の手を通じなければ日滿間の移動は不可能となり、八月には鋼材輸入免稅種目を擴大して、日滿商事扱のものに限り鋼管、鋼板、レール等をも輸入税を免除した。かくて鋳力、釘、針金並に特殊鋼を除いた殆んど全部の鋼材は輸入税を免除

されて高價格の抑制が企圖されたのである。

康徳六年（昭和十四年）の十二月、日滿商事は特殊會社に改組され、政府の監督の下に重要生産資材の一元的配給機關として巨大な存在となり、新京に本店、東京に支社を設置するほか、日滿支の樞要箇所百餘に支店・出張所を置くに至つた。

康徳七年に至り、日滿商事と表裏一體的立場にある滿洲鋼材組合の規約は更新されたが、その目的は、「滿洲ニ於ケル鋼材類統制機關タル日滿商事株式會社ノ方針ニ從ヒ同社ノ取扱ニ係ル鋼材類ノ圓滑ナル配給並ニ之ニ附帶スル義務」を營むものであり、その取扱ふ品目は「日滿商事株式會社が滿洲（關東州ヲ含ム）ニ於テ販賣スル棒鋼、形鋼、鋼板（亞鉛鍍板、鋳力板、美裝鋼板、硅素鋼板、ユニバーサル鋼板ヲ含ム）釘、針金、輕軌條、繼目板類」等であつた。

また本組合の構成員は日本國法人たる原田商事株式會社、滿洲國法人たる原田商事株式會社を初め、伊藤信廣商店、畑中商店、日本レール株式會社、鳥羽洋行、大阪鋼材、大信洋行、村信大連支店、岡谷商事、鞍山建材、天野商店、進和商會、政記公司五金船具店、榮信洋行等であり、組合資金四百五十萬圓、總口數十萬口、一口の金額は國幣四拾五圓であつた。

前述の如き滿洲鋼材組合のほかに、康德六年には滿洲特殊鋼販賣組合が結成された。いま規約案について見るに、第二條において「本組合ハ日滿商事株式會社ノ取扱ニ係ル特殊鋼ヲ同社ノ指導監督ノ下ニ其ノ販賣統制ノ方針ニ從ヒ販賣スル」ことを以て目的とすると規定し、本部を新京に、支部を大連・奉天に置かんとした。その組合員は原田商事株式會社を初め、大信洋行、本田商會、高口商店、鳥羽洋行、三榮洋行、岡谷商事、進和商會の八社が豫定せられてゐる。

同年六月十六日には日滿商事株式會社會議室において、「特殊鋼取扱店代表者會議が行はれ、共同仕入・代行販賣等組合機構の件や、組合格約審議の件、特殊鋼受渡及代金決済方法の件組合及組合員在庫の件、クレーム解決方法の件等が議事となつて討議せられてゐるのである。

康德八年（昭和十六年）五月一日には、日滿商事株式會社奉天支店長江川忠弑氏と、滿洲原田商事株式會社常務取締役大浦德身氏との間に、左の協定書が取交された。

日滿商事株式會社奉天支店（以下甲ト稱ス）ト滿洲原田商事株式會社（以下乙ト稱ス）トハ甲カ鐵鋼類統制法ニ準據シテ統制配給スル特殊鋼（以下單ニ統制資材ト稱ス）ヲ乙ヲシテ乙ノ責任ト危險トニ於テ代行配給セシムルニツキ基礎條件ヲ協定スルコト左ノ如シ

第一條 乙ノ代行配給スベキ統制資材ノ品種別、サイズ別、數量、配給時期及配給先ハ別途甲ヨリ乙ニ指定スルモノトス

第二條 甲カ乙ヲシテ代行配給セシムル統制資材ノ品種別、サイズ別、數量及受渡期日ハ日滿商事株式會社ノ發送個所ニ於テ發行スル送狀記載ノ當該事項ヲ基準トシテ乙ノ危險ト責任ニ歸屬スルモノトス。

第三條 乙ノ代行配給スル統制資材ハ受渡時ノ受渡場所ニ於ケル統制價格ヲ以テ乙ハ甲ト代金ノ決済ヲ爲スモノトス

第四條 前條ノ決済ハ第二條ノ送狀記載發送日基準旬末締切翌月當該旬五ノ日ニ乙ヨリ甲ニ現金ヲ以テ支拂フモノトス

第五條 乙ノ希望ニ依リ甲ニ於テ支拂延期ヲ承認スル場合ノ延滞日歩ハ國幣四分トス

第六條 乙カ甲ノ指示スル配給先ヘノ配給價格ハ第三條記載ノ統制價格ト同一トス

但シ配給ニ要スル運賃、諸掛、金利、其他直接經費ニシテ前條統制價格ニ包含サレズ且甲カソノ金額及別途徴收ヲ承認シタルモノハ統制價格以外ニ配給先ヨリ徴收スルコトヲ得ルモノトス

第七條 甲ハ乙ニ對シ甲ノ定ムル代行配給手数料ヲ支拂フモノトス

第八條 規格ニ關シテハ生産者ノ證明ヲ以テ最後の決定ヲ爲スモノトス

第九條 甲ノ指示セル乙ノ代行配給先ニ於テ正當ニシテ且首肯シ得ル理由ニ因ル排却ノ場合ト雖モ甲ハ

該排却分ニ對スル補充及代品配給ハ之ヲ爲サザルモノトス

第十條 前各號以外ノ事項ニ就テハ必要ノ都度協定スルモノトス

第十一條 戦争、罷業、天災、地變、其他ノ不可抗力ノ爲第一條ニ基キ甲カ乙ニ指示シタル統制資材ノ

一部若クハ全部ノ引渡不履行及引渡期日ノ相違ニ關シテハ甲ハ其責ニ任セザルモノトス

第十二條 本協定第八條、第九條、第十條、第十一條及其他ノ條項ニシテ乙ハ代行配給先ノ諒解ヲ得ル

必要アル事項ハ乙ノ責任ニ於テ本協定内容同様ノ諒解ヲ事前ニ得ルモノトス

第十三條 本協定ハ康徳八年五月一日ヨリ効力ヲ發生スルモノトシ之カ改廢ニ就テハ甲乙合議決定スル

モノトス

第十四條 本協定ニ關スル一切ノ疑義ハ甲ノ解釋ニ從フモノトス

右協定ノ證トシテ本書ニ通ヲ作成シ甲乙記名調印ノ上各一通ヲ保有スルモノトス

第四節 原田商事株式會社として新生

支那事變の勃發と共に高度國防の必然性は益々加重し、滿洲の資源開發は、いよいよ積極

化され、昭和十二年度下半年に至つて業界は曾てなき殷盛を示した。

これに先だち合名會社原田組は、滿洲における商權の増大を企圖するため、滿洲國成立直後すなはち昭和七年十二月、新京市日本橋通に出張所を開設、大連本店の従來の取引先關係を圓滑に處理すると共に、調査並に情報蒐集機關としての機能を果たせた。昭和十一年九月康徳會館一階に出張所を移すに及んで、奉天支店の管轄下に入り、本格的に營業に着手し、官需局・滿炭を始め建築・土木方面に積極的進出を試み、昭和十二年九月奉天支店の管轄を脱して獨立した。また昭和十年六月には哈爾濱に出張所を開設して、その態勢を著しく強化するに至つた。

日本内地においても、昭和九年一月大阪市西區江戸堀北通五丁目三十六番地に店舗を新築して大阪支店をこゝに移轉し、昭和十年二月には小倉市に出張所を開設して、原田組の前衛基地は滿洲内地相即應して擴充されたのである。

かくて合名會社原田組の前線據點は漸次擴大されつゝあつたが、急速度に移行する經濟情勢に備へて、舊來の經營方針を一擲して、新情勢に對應する新經營方式を、原田組自身としても設定するの要に迫られるに至つた。即ち先にも述べた如く滿洲國の第一次産業五ヶ年計

畫は昭和十二年度を起點とし、從來の原始農業國より近代的産業國への誘導に拍車をかけ、これに伴ふ巨大重工業の開発乃至建設に要する巨大な生産手段は凡て對日輸入依存に期待することを不可避ならしめた。日本内地に於ても日支事變を契機として、高度重工業への轉換、第三國依存性の離脱、配給機構の再編成等々、これに伴ふ統制經濟の策定強化は、事變の擴大と相俟つて日一日に高められたのである。

慧敏なる合名會社原田組店主原田猪八郎氏は、先に現地統率者として派した支配人原田恵伍氏と謀つて、合名會社組織を株式會社組織に更新せんとし、凡ゆる角度より検討して終にこれを斷行せられた。即ち原田商事株式會社と稱する。其の經歷書によれば

一、昭和十二年十月原田商事株式會社ヲ設立シ原田猪八郎取締役社長トナル

二、昭和十三年一月合名會社原田組ヲ原田商事株式會社ニ合併ス

と、記載されてある。而して原田商事株式會社設立に伴ふ重役陣をみれば

取締役社長	原田猪八郎氏
常務取締役	原田 恵伍氏
取締役	大浦 徳身氏

同 小川 邦雄氏

同 出口 重雄氏

監査役 豊田 俊文氏

の諸氏であつて、常務取締役の下に金物部長・機械部長の二部長制が布かれ、奉天、大阪、東京各支店長は常務に直結する職制に制定せられた。かくて滿洲において極めて長い歴史を有し、業界はもろろん人口に膾炙してゐた合名會社原田組の名稱も、またその内容も茲に一新し、新段階に向つて堅實な發足をなしたのである。

而して此の當時の關係代理店で今日に及ぶ取引先を挙げれば、本多商店(安全燈)、芦森製網所(綿ロープ)、鞆鉤合名會社(釘・鋏製品)、湯淺伸銅株式會社(銅・眞鑄製品)、椿本チエイン製作所(傳導用チエイン・コンベヤー)、光洋精工株式會社(ローラー・ボールベヤリング)、廣島製砥所(工作機用砥石)、關西電氣鑄鋼所(鑄鋼品)、北鮮製鋼所(鑄鋼品)、遠藤合資會社(耐火用バーマタイト)、油谷鐵工所(空氣工具一式)、宇都宮製作所(切削工具)、東京護謨株式會社、大日本ベルト共販株式會社、福岡製鎖所(炭礦用無繼目チエイン)山田鑄製造所(鑄一式)、大和鋼機株式會社(鑛山用破碎機)、東京板金工業機械製作所(鋸

第五節 傍・直系生産事業の展望

原田商事株式會社は、それ自體において異常な躍進的發展をとぐると共に、これを根幹として幾多の傍・直系生産事業を育成し、決戦下の生産力擴充に大きい寄與をなしつつある。その各々の事業活動については、第二篇においてそれ々の擔任者より記述されることになつてゐるので、茲には概觀的な展望にのみ止める。

昭和八年、鐵西に三百萬坪の大工場敷地が指定せられたのであるが、未だ單なるペーパープランに過ぎず、現場は區劃整理さへ完了して居なかつたので、大中工場を誘致して克く茲に大工業都市を建設せしめ得るや否や疑懼の念を以て迎へられてゐた。原田商事社長原田猪八郎氏は草茫のこの原野を眺め、未放置にあるを遺憾として、日本ベイント株式會社々長小畑氏と計り、企畫の全面・建設の一切に采配を振つて日滿塗料株式會社を設立された。これは内地資本を滿洲に活現せしむべしとの大阪工業會滿蒙視察團（附録參照）結成の動因と一であつて、氏年來の素願を實現したものであつた。鐵入式の當日、來賓として式に臨まれた

滿鐵栗野事務所長は

「この會社は滿洲事變後、滿洲に於ける最初の内地資本の投下であつて、その設立理念に對して滿腔の敬意を表する」

旨の挨拶をされたのである。後、この會社は日本ベイントに合併せしめたが、これを契機として鐵西は、僅か十年足らずのうちに大中工場が櫛比し、黒煙が空を掩ふ大工業地帯と化したことは特記さるべきことであらう。

更に同じく昭和八年、昭和製鋼所薄鐵板年産約三萬噸を主要材料として、原田氏は滿洲亞鉛鍍株式會社を設立して代表取締役社長に就任された。當時昭和製鋼所社長は伍堂卓雄氏で、常務取締役は富永能雄氏であつた。原田氏はかねて富永氏に、「何か機會があつたら貴下の方の仕事をお願いしたい」との希望を洩されてゐたところ、富永氏から「亞鉛鍍の仕事をやらないか」との慫慂により、早速調査して見ると非常に堅實有望な事業であることが判然した。これは勿論、富永氏が氏への好意によるものであつたが、事業が絶對有望といふ見通しが確實についてゐる以上、氏は一人で利純を占有することはその性格として潔しとするところでなかつた。

當時大連に鐵同志會（前出）があり、原田組・大信洋行・鳥羽洋行・畑中商店の四商會が鐵に關する限り一致協力、共同仕入を爲してゐたので、かかる折紙のついた事業を獨占することとは氏の道義心が許さず、鐵同志會員に謀られたところ欣然参加を見たので、四商會の共同出資とし、昭和製鋼所と切衝、その諒解を得て設立を爲されたのである。創業當初は如何に有望な事業でも血の出るやうな辛苦を嘗めねばならぬものであるが、原田氏は斷乎これが矢表に立つて代表取締役社長に就任し、經營に關する責任の一切を雙肩に擔ひ、遂に昭和製鋼所關係會社のうちでも非常に好成績の會社として認めらるゝに及んで社長を辭し、單なる相談役となつて園田氏を専務取締役に就かしめられた。

もし原田氏にして利にのみ趨り、自己にのみ汲々たるものがあるならば、あくまで社長として、代表取締役として就任せられてゐたであらう。否、その設立動機に由つて之を觀れば、合名會社原田組の獨占事業たり得たものであつて、後に富永氏が原田氏に對し、「滿洲亞鉛鍍は貴下を見込んで話をしたのだつたのに……」と言はれたさうであるが、蓋し氏の事業精神は苦難を一身に引き受け、利は獨りせず、終局の目的を興業による國家奉公に歸一する高邁さに於て我々はこれを觀るのである。

氏は更に日支事變に先だつ昭和十二年四月、仙臺市に東北特殊鋼株式會社を設立し、特殊鋼就中高級高速度鋼生産を目標として出發された。當時仙臺は因襲に眠る伊達藩古城下として、工業部門においては僅に地元資本を糾合して創立した東北金屬株式會社（後に住友に合併）位のものであつた。氏は兵器素材としての特殊鋼が徒らに外國依存に俟つを遺憾として、時の東北帝大總長本多光太郎氏に謀り、その絶大な支援を得て工場敷地を仙臺に覓められた。而して仙臺に東北特殊鋼株式會社を設立された要因は左の諸點が擧げられる。

即ちその一つは、金屬學界の世界的泰斗本多博士、並に村上金屬材料研究所長以下諸權威の指導を得るに便宜であることであつた。仙臺金研は人も知る我が金屬學界の聖所的存在であり、その研究部面は深く且つ廣く、特殊鋼の研究に於ても既に定評があつた。而して金研の研究を、直ちに生産工場に移植し、工場を金研の實驗的機關にまで解放することによつて、高級特殊鋼の生産を企圖されたのである。

その二は工業立地の觀點から、輸送力その他の不利的條件を無視して、工場建設を見たものであつて、工場分散の國策的計畫の先驅的役割を果たした功績は没せられぬものがあらう。その三は勞務供給源の豊富性と、質實剛健な質的優秀性に囑目されたのである。

かくて東北特殊鋼は創業以來滿五ヶ年。此の間、畏くも朝香宮殿下の御台臨を賜はり、或はまた軍管理工場に指定せらるゝあり、第二期擴充計畫を樹立しては廣褒五萬坪の敷地に新工場たる仙臺工場を建設し、舊工場たる長町工場は工具生産事業として各種優秀品を續出し、特殊鋼板用ドリルを完成する等、その異常なる發展は、軍から期待される事が大きい。

東北特殊鋼株式會社が創立された二ヶ月後、即ち昭和十二年六月一日には原田冷凍機株式會社が冷凍機製作設計の目的を以て大連に設立された。その重役陣は

社	長	原田	猪八郎
常務取締役		原田	恵伍
取	締	役	大浦 徳身
取締役支配人		永田	巳代治
監	査	役	小川 邦雄
同		出	口 重雄

等、原田組の幹部を以て網羅して活動期に入つた。當時ロータリーキャビネットD13型を大量に輸入して全滿洲に普及し、從來一般に贅澤品と看做され勝であつた電氣冷凍機を、

生活必需品たらしめるに至つた。

昭和十二年九月には、工作機械並に切削工具製造の目的を以て大阪に原田金屬工業株式會社を設立し、同社はベーン型全齒車式ボール盤製作に着手、昭和十五年七月には大阪告示を以て大阪第一工作機械工業組合員に指定されたが、後に三菱に譲渡された。

昭和十四年四月には、切削工具・旋削工具計測工具製造の目的を以て、滿洲國經濟部大臣の認可を得て撫順に撫順精機工業株式會社が設立され、代表取締役社長に原田猪八郎氏、専務取締役原田恵伍氏、常務取締役に出口重雄氏、取締役大浦徳身・小川邦雄の兩氏、監査役に田中宗雄・村上彦馬の兩氏がそれぞれ就任した。いま同社の經歷書によつてその全貌を概観しよう。

(會社ノ沿革)

1、當社設立ノ趣意ハ滿洲國內ニ於ケル機械工業ノ發展ト共ニ之ガ不可分ノ關係ニアル切削工具類ノ需要ハ主トシテ日本及第三國ノ輸入ニ俟ツノ情況ニ鑑ミ滿洲國內ニ於テ工場ヲ設立、本事業ノ最大重要條件タル素材ハ同一資本系タル仙臺東北特殊鋼株式會社並ニ工場隣接地域ノ純國産撫順製鐵工場ノ技術的連鎖ヲ保有シテ該品ノ製作ヲ企劃シ業界ノ使命ヲ達成スルト共ニ、一面高度國防國家ノ國策ニ順應以テ一

- 徴ノ貢獻ヲスル目的ヲ以テ康徳六年（昭和十四年）一月八日滿洲國政府ニ對シ設立認可申請書ヲ提出セリ
- 2、康徳六年二月二十八日付滿洲國政府經濟部資金統制科ヨリ第壹百五拾八號ヲ以テ工場設立ノ認可書ノ交付ヲ受ク
 - 3、康徳七年五月工場建築事務所倉庫機械工場其他附帶工場建築ヲ奉天細川組ヲシテ請負ハシメ着工、同年十月建築工事ノ内部工作ヲ除キ完了ス
 - 4、康徳八年一月四日ヨリ機械設置ニ着工、漸次對日期待ノ所要機械ノ入荷ニ平行シ据付ヲナシ同年九月略第一期計畫工場設備ヲ完了ス
 - 5、滿洲國政府ノ工具統制ノ方針ニ基キ康徳八年四月全滿工具製造工業組合ノ結成セラルルヤ政府ノ指名ニ依リ該組合員加入ヲ容許セラレ組合監事トナル
 - 6、康徳八年十月第二次滿洲五ヶ年計畫生産豫定調査ニ依リ康徳八年ヨリ康徳十二年迄ノ大略生産ニ關スル基礎ニ就而内示ヲ受ク
 - 7、同年十二月南滿九一八部隊ヨリ切削工具製作ノ内示ヲ受ケ製作ニ従事ス
 - 8、康徳九年四月全滿工具製造工業組合ノ役員改選ニ於テ監事トナル
- 而して主要製品は、（一）各種ドリル・カッター・リーマー・タップ等の切削工具及挾鉗類の製作加工（二）精密機械器具類の部品の製作工作の請負にあり、商標飛魚印によつて象徴

される如く、その業績は飛躍的な向上を示しつつある。

第六節 圓域計畫貿易と第三國貿易

圓域輸出調整が企圖されたのは、昭和十三年六月二十三日物動計畫の改訂に伴ひ、輸出の振興と國際收支の均衡を保持せんとするに始まつたのであるが、これが全面に高度の實行力を與へたのは、昭和十四年九月十八日に閣議決定を見た價格統制令であつた。即ち從來の圓域向貿易調整は單なる數量統制に過ぎなかつたが、物價の九・一八ストップにより内地の物價は強權的に抑制せられたのに反し、滿關支の物價は何等の規整を受けることなく、爲に圓域向輸出が變態的に上騰するに至つたので、かゝる不合理を是正するため、昭和十五年八月二十七日附商工省令第六十六號を以て「關東州・滿洲及支那に對する貿易の調整に關する件」が施行せられたのである。

原田商事東京支店より本店宛に報告した昭和十五年九月三日付の文書の中に左の一文がある。

(前略) …素より本件(註、圓域貿易調整委員會結果報告の件)の目的は從來日滿支間の物價に著しき懸隔ありたる爲滿支の物價を内地並に引下げ内地の低物價政策を彼地にも及ぼして滿支より内地への輸出を促進し以て貿易の調整を計る事に有之候へば或は將來調整物品の範圍を擴張する事も考へられ候得共今回は機械工具・鐵鋼其他滿支の物動計畫に直接關係ある資材は一切除外せられ生活必需品のみに取極られ候……(以下略)

圓域の物價調整策は滿關と支那とに於てそれぞれ取扱を異にし、滿關に於ては内地適正價格に運賃・手数料を加算したものを輸入價格とした。換言すれば日・滿・關の物價を同一水準もしくは同一系列に置く低物價政策をとり、支那に對しては現地適應主義を採つた。即ち支那向輸出品は内地適正價格に加ふるに現地相場を考慮に入れた調整料を課し、價格統制令の除外を認めた價格を以て輸出することとした。

かくて圓域貿易は數量統制ならびに價格統制の規正を受ける事になり、日本東亞輸出入組合聯合會がその操作を行つた。即ち業者は割當られた一定の數量を價格統制令の定むる適法價格を以て聯合會に賣渡し、更に聯合會が定むる輸出價格を以て受託者として輸出を代行する機能を保有するに止まり、從來の如く自己の見積りを以て恣意的に利純を得んとするが如

き性格は拒否されてしまつたのである。

昭和十五年七月政府の策定した對滿支貿易計畫によれば、(一)本邦より供給すべき物資の數量は我國の第三國輸出の維持伸展及び國民生活の確保に支障のない範圍に於て又滿支よりの供給を受くる數量は現地事情の許す限り多量ならしむること、(二)交流物資は各地域の消費統制方針並に滿支に於ける圓系通貨價值維持方策に即應し適當なるものを選ぶこと、(三)滿支に對する出超額は貿易外收支上の支拂超過額に照應せしめ以て對滿支國際收支の均衡を圖ること等々の三點が強調されてゐた。

右に見る如く對滿支への輸出は第三國向輸出の維持進展ならびに國民生活を阻害しない範圍に限定されたものであり、第三國貿易を第一義としその餘剰を滿支へ輸出するといふ謂はば餘剰輸出を根幹としたのであつた。原田商事株式會社はかくの如き政府の貿易基本設定に則り、且つ第三國貿易に對する深い經驗と地盤とを基礎(第三章第四節・歐米觀察と第三國貿易への進發參照)として、敢爲な進出をなして商權を張り、特に對伊貿易において新生面を開拓したのである。

原田商事株式會社のカタログ「伊太利の機械案内」には、トラクター・ディーゼル機關・工

具・工作機・大機械・紡機・電機・唧筒及コンプレッサー等の各品目につき著名會社を紹介し、更に製品の性能を叙記してあるが、その序文に

フアシストの國伊太利は歐洲の半島國家で、農業を立國の本義とするに拘はらず農耕の平地乏しきこの國は今や生産的には農業國より工業國に變遷しつゝある事に、今日この國の目覺しき工業發達の躍進振がうかがへると同時に、明日の世界的工業國を約束されるのである。

日滿に於ては此の盟邦伊太利との防共協定結成によりその親善關係に永遠の平和的連鎖を固めたが、更に一九三八年貿易助長の爲に同國との貿易協定を結び、同年伊太利政府はパウルト侯を團長とする經濟使節團を日滿に派遣し此處に日滿伊の經濟的提携の一大推進を見るに至つたのである。次で一九三九年九月協定書の交付を見るに至り今や全く其の取引は本格的なものになつたのである。

伊太利工業界の躍進は其の製品の世界市場に於ける英米獨の諸國に比して何等遜色なく、之を角違してゐる顯著なる例にうかがひ知る事も出来るのであるが、殊に飛行機、精密工作機械、機器機構部品・デイズル機關電機に於て異常なる發達を示してゐることをわれは認識するであらう（以下略）

と、對伊貿易につき異常な關心が寄せられてある。即ち、原田商事株式會社は滿伊貿易協定成立以後對伊貿易に進出し、滿洲大豆を輸出し、其の見返りとして伊國の機械工具ードル

リーマー・鏝等を輸入し、伊太利財閥の一つであるボツフワール商會と提携したのである。原田商事の活潑なる對伊貿易を示唆する一断面として、昭和十五年四月十七日付を以て當時の機械部長大浦德身氏より社長原田猪八郎氏に宛てられた左の書信は得難い資料と思はれるので、いま其の全文を引用したいと思ふ。

拜啓 益々御健勝奉賀候

一、對伊貿易問題

三月下旬小職新京出張滞在中、滿洲特産專賣公社向坊理事長宛御紹介の件御願ひ申上候處、當時即刻御配慮を賜り候段有難く奉感謝候

當時向坊理事長には地方御出張中にて四月一日豫定御歸京（註新京）無之、折角訪問仕候へ共御面會の機を逸し申候。仍而其代理小林理事に御面會仕候。尙兩三日新京に滞在上、理事長の御歸京を待つ所存に候處大連に急用差控へ居候爲一應歸連仕候。向坊理事長には豫め大連より書面を差上げ其の御在京を確めたる上、去る一二日再度新京へ出向、十三日御面接、種々大豆の輸出問題に關する懇談を遂行仕候

右結果大豆は昨年度收穫の減少、去る三月收賣價格の引上げ實行による中間收賣業者の先見越し、賣惜

み、農民の抱込み掩蔽等に加ふるに他面需要激増、對日緊急輸出要望等の原因にて、對第三國向け輸出
 割宛極度に制限せられ居る事判明仕候

滿洲國としては外貨資金獲得の爲には、輸出大豆の缺乏は致命的現象と申すの外無之、政府貿易科に於
 ては目下爲替科と協力の上其輸出割宛に關する重要協議を進行中に有之候。機械等の輸入以上遙に重要
 資源（的確なる言を避くるも石油・麻・食料品等の如し）を輸入の必要性に迫られ居る事實に逢着の由
 にして、之にリンクする輸出オフワ一の提言は要するに政府の指示一本なり。政府の重要性順位を明記
 せし指圖あらば乃ち對日輸出の割宛中より何とか差繰り考慮す可し云々の事に有之候。

然し乍ら政府貿易科高津科長は去る十日横濱より訪伊日本經濟使節團と共に洋行せられ候爲、今回は面
 會不能に了り申候へ共四月一日新京に於て對伊輸出クォーター三〇〇〇屯の設定方特に約束済みに付既
 許可證に基くボツフワ一原田輸出の右残量は努力の如何に於て可能なる事と信じ居候

尙政府對の折衝には今月末ボツフワ一大連代表者ルラチ氏及伊藤氏出張再度の交渉を重ねる事に相成居
 り候

因に今日迄の輸出總額は三五〇〇屯、金額約六三萬圓、從て當方發行信用狀も亦大體同額に有之候。残
 り三〇〇〇屯の輸出完結によりて當初の目的を遂行爲し得たる事に相成可候

但し昨今歐洲バルカンの風雲可成り悪化の形勢に在り其進展の如何に因りては可成りの杞憂を直感致さ

れ候へ共可及的に其輸入を完結方針を以て安全策を把握せんと致し居り候

二、伊太利アール、エンド、ジー、ボツフワ一
 フェナチ及ダセット博士訪日の件

今般右兩氏伊太利より來連仕り候間滿伊貿易に關して種々懇談且つ當社の立場を鮮明に致し置候。同社
 は極東の經濟的新事態に備へて日本に支社を設置の意向を有し居り、又北支那ブロック・中南支ブロツ
 クに對しても同様劃策の抱負を有し居るが如くに候。日本に於てはフェナチ博士二ヶ月位滞在の様子
 にて候。同氏等の希望により社長への紹介狀別紙寫の如く手交致し置候間若し訪問の節は何分御引見御
 懇談の程奉懇願候

尙ダセット氏は二三週間滞在の上マニラ、シンガポール、印度方面へ出發の由にて候
 以上當社對伊關係の近況御通知旁々御禮迄如斯候 敬具

次に原田商事株式會社總務部外國係より、昭和十五年七月二十二日付を以て、同社大阪・
 奉天・東京・新京の各支店長並に本部への報告文書「吾社ノ對伊貿易近況」を左に掲記する
 ことにより、原田商事の對伊貿易を展望したい。

今年初春ヨリ計畫セシ對伊百二十萬圓輸出入貿易問題ハ其後可ナリノ紆餘曲折ヲ經タルモ概シテ順調ニ

進行中デアツタ。

然ルニ六月上旬伊太利ノ對英佛兩國宣戰佈告ト共ニ實質的武力戰ニ迄介入セシ爲吾カ貿易行程ノ全部一時停止ノ已ム無キニ至ツタ。

此結果ボツフワー會社ノ取引上發生セシ或ハセントスル諸問題ニ關聯シテ左記ノ如キ暫定的措置ヲ行ヒ萬全ヲ期スコト、シタ。

一、現在迄ニ發行セシ信用狀ノ使用殘額ニ對シテハ、輸入權利ノ放棄ヲ防止スル爲メ取消シセザルコトニス。

但シ右殘額ハ伊太利ノ參戰解除或ハ戰爭ノ全面的終局又ハ現狀ノ儘貿易上ノ不安絕對ニ解消ノ如キ場合ニ到達セザル限り使用セザル様ボツフワーニ打電濟ミ(ボツフワーヨリハ特ニ確認ナキモ大丈夫ナラン)ニ、從テ右信用狀ヲ引當トセシ未出荷品ハ假令ボツフワー商會ノ 時的手持チトナルベキモ(實際ハ戰時ニ付他ノ國內需給ニ應ズルナラン)絕對ニ出荷セザル様指圖濟ミ

但シ現在ノ情勢ニ於テハ故意ニセントスルモ出荷不可能デアル。

三、輸出大豆六五〇〇屯ノ内最後ノ二〇〇〇屯ハ大連ボツフワーニテ專管對豫約取消シ、無條件解消ス

他ノ四五〇〇屯ハ一部伊太利へ未着ナルモ總テ紐育ニテ外貨受入濟ニシテ出荷主側ノ損失ナシ。

四、輸入品ハ四月二十一日ベニス出港ノフジヤマ號積ミ工作機米貨二三、二四〇弗、四月二十九日ゼノア港出港ノスマトラ號積同工作機米貨二、一九九弗五〇仙及同船積ヤスリ米貨二、四〇七弗九四仙ノ合計米貨四六、八四七弗四四仙(邦貨金一九九、八八二圓)デアル。

此兩船舶ノ動靜ニツイテハ參戰後安全ニ中立國ニ避難セシ旨ノ入電ヲボツフワーヨリ得タル儘由來確實ナル情報ニ接セズ、伊太利郵船大連支店及大連ボツフワー商會ヲシテ極力調査セシメ居リシ處此程伊太利郵船ニ正式ノ入電アリ左記ノ如ク判明セリ。

避 難 地

(イ) フジヤマ號 タイ國コシチャン港

(ロ) スマトラ號 タイ國ベナン港附近ノ「ブケット」

右ノ内(イ)項ハ良港ニシテ貨物ノ積替へ容易ナル趣デアリ、又三井ノ船舶往復ノ由ニツキ目下引取りニ付連絡中。但シ五%ノ停船料ヲ外貨ニテ支拂ヒノ必要アリ、是ハ滿洲國ノ許可ヲ得テ外貨デ支拂ヒノ豫定。

(ロ)項ハ未ダ情況判然タラズ後報ヲ待チツ、アル。

五、以上大豆輸出ノ外貨取得總合計米貨一七九、五一四弗六五仙(邦貨金七六五、九二四圓)ト輸入品外貨支拂總合計米貨四六、八四七弗(邦貨金一九九、八八二圓)ノ差額米貨一三二、六六七弗ハ滿洲國

ノ保有在外資金トシテ紐育ニアルモノニシテ、是ハ他ニ使用セザル様政府ニ依頼通達濟六、以上ノ情況總テ詳細ニ滿洲國政府ニ對シ六月十四日付及七月十一日付報告完了。

暫定的處置ハ以上ノ如クデアアルガ出荷品ノ内工具類ハサイベリヤ經由滿洲國へ送附ノ可能性ガアル。

伊太利ヨリ近着ノ伊太利在日商務官アンゼロニー氏ノ内報ニヨルト、兩國サイベリヤ經由貿易ノ目的ノ基ニモスコーニテ輸送協定促進中ナリト。

尙同氏モ今回モスコーニ十日間位滞在ソ聯當局ト折衝ノ跡アリ。尙今後ノ對伊日滿貿易ニツイテハ日滿經濟使節四月訪伊、五月下旬ローマニ於テ協定會議ヲ開催、兩國貿易上ノ討議ヲ行ヒテ其調印ヲ完了セシヲ以テ假令伊太利ノ參戰ニヨリ其計畫遂行ノ一時的停頓ヲ免レズト雖モ、近キ將來ニ於テハ必ず通商ノ實現ヲ期待セラレテ居ル。

殊ニ伊太利ノ南阿バルカン方面へノ進出ニヨリテ同地域ヨリ産出スル臭素液、酒石酸其他工業用必需ノ原料品ノ提供モ大ナル可能性ヲ發現セシ爲、サイベリヤ經由輸送ノ協定成立ト共ニ多大ノ興味アル期待ガ懸ケラレテ居ル。

伊太利アンゼロニー氏ハ今回歸朝ノ途大連ニ立寄り今後ノ輸出問題ニツキ研究中デアル。

今回伊太利ニテ協定セシ取引品目ノ内容ハ極秘ニテ目下判然タラザルモ仄聞スルニ對日滿取引年額四千萬圓（從來三千萬圓）ノ由デアアル。滿洲國ヨリ大豆ノ購入ハ年二〇萬屯（獨逸ハ六〇萬屯）ノ取極メ濟

ミニシテ是ハ發表セズ其他詳細ハ調査中。

以上

先に述べたる如く、昭和十五年七月設定の對滿支貿易計畫は第三國向輸出の確保を第一義とし、滿支への輸出はその餘利を以て充てるといふ方針であつたが、第三國貿易は國際情勢の急轉により佛印・タイを除いては全面的に杜絶の状態となり、昭和十六年度第二、四半期以降の物動計畫に基き對滿支貿易計畫も可及的多量を輸出入する方針がとられた。

かくて昭和十六年十一月四日付商工省告示第千二十六號を以て發令された圓域向輸出價格調整品目の追加擴充は、從來の稅番にして二百三十五品目に比し新規追加は百九十五品目となつた。このために第三國關係貿易商社の救濟策を講ずべきの要が起り、滿支貿易業者に認められた實績七割乃至八割（特別割宛二三割）を壓縮して實績の六割とし、其の差額一、二割をば第三國貿易業者に振向けんとしたのである。然し乍らかゝる實績再調整によつて第三國向業者の總てを圓域に振向けるとは困難であると共に、一方圓域貿易機構の整備に伴ひて輸出統制會社又は代行・指定制等による輸出統制方式が強化されるにつれ、第三國貿易業者の圓域進出は多くの期待をかけることが出来なかつた。

實績以外の特別割宛數量は期初において之を日本東亞輸出組合に保留して置き、（一）組合

員が実績割宛數量を越えて輸出しようとするとき、(二)実績割宛數量を貰へない組合員が輸出せんとするとき、(三)非組合員が輸出せんとするとき等の場合に認可によつて割當てるもので、昭和十六年七月一日以降は商工省貿易局の指示を受けて承認・不承認が決定される事となつた。而して特別割宛の申請は甲・乙の二種類に分れ、甲種は乙種に優先して承認されるが、甲種もまた無條件に承認されるものとは限らなかつた。いま甲種・乙種の區別及び申請書に添附を要する書類を一瞥して見よう。

甲種

1、左表の品目

税番	品名	要・添附書類
一一四	パラフィン	石油共販の割當證明書又は委任狀
二三五	燐寸	燐寸共販の割當證明書又は賣約書
二九六	マニラロープ	關滿向のものは「對日期待製作加工品需要表」に對し滿洲國經濟部大臣の發註許可せるもの(寫の場合には麻工聯の裏書を要す)
四一九	支那向の雲母別號に掲げざる同製品	支那向のものは興亞院經濟部長の「支那向麻製品割當證明書」(寫の場合には同院代行機關の裏書を要す) 興亞院經濟部長の「購入證明書」(寫の場合には興亞院代行機關の裏書を要す)

五〇三	クラウンコルク	關滿向のものに付ては王冠組合の對滿割當たることを證する書面又は對滿事務局長の證明あるもの
六一二	木材(除合板) 紙類(東亞紙貿易取扱のもの)	支那向のものに付ては興亞院經濟部長の「支那向王冠割當證明書」又は「王冠配給申込書」(寫の場合には王冠組合の裏書を要す) 東亞木材貿易株式會社取扱のもの 東亞紙貿易株式會社の「紙類輸出割當決定書」及當組合の「紙類輸出承認指圖書」
六三六	活動寫眞用フィルム	滿關向のものは滿映東京支社又は滿鐵東京支社取扱のもの 北支向は華北映畫東京支社のもの 中支向は中華映畫東京支社取扱のもの 日本度量衡器計量器工業組合聯合會取扱のもの 現地の警備用に充つるものなることの官廳證明あるもの
四九九	關滿向度量衡計量器 刀 劍	

- (2) 三井物産扱の海南島向雜貨にして海軍省兵備局第二課長發給の證明書あるもの
- (3) 軍需用物資にして陸軍省整備局戰備課長、同局燃料課長又は燃料所長或は海軍省兵備局兵備第二課長發給の軍需品證明書の添付あるもの

乙種(甲種に屬さないもの)

- (1) 關滿向のものには註文書(契約書)又はその寫(寫の場合には當組合支部又は出張所の證明を要す)
- (2) 支那向のものには現地輸入統制組合發給の輸入承認書(但し左のものは此の限りでない)
 - イ、興亞院の發注證明書及び興亞院發給の需要證明書
 - ロ、上海向青果物には上海青果卸賣株式會社の發注證明書

- ハ、漢口向物資には當該地陸軍部隊發給の搬入許可書
- ニ、三井物産扱の海南島向雜貨にして海軍省兵備局第二課長の證明書あるもの
- ホ、刀剣にして現地警備用に充てらるることの官廳證明書あるもの

(3) 左表の品目

税番	品名	添附書類
二九五	奢侈品等製造販賣制限規則(商工農林省令第二號)第一條、二條の規定による指定物品 ピッチ、アスファルト(石油性のもの) 支那度量衡器計量器(詳細は支那出張所に問合せのこと) 製鐵品(別號に掲げざるもの)	當該地方官發給の特免許可書(製造販賣又は價格の許可) 石油共販の割當證明書又は委任狀 日本度量衡器計量器工聯の「輸出検査完了證明書」 關滿向のものに付ては「對日期待製作品需要票」に對し滿洲國經濟部大臣の發註許可したるもの(寫の場合は資材團給統制團體の裏書を要す)又は「圓域向機器製造認定書」支那向のものに付ては與亞院連絡部の「機器發註許可書(寫の場合は統制團體の裏書を要す)又は「圓域向機器製造認定書」 當該需要の主務官廳(對滿事務局及與亞院)の證印ある配給申込書寫及右申込書に依り現品の配給したることを證する當該工業組合の證明書
五二四	五二五 四九六 ドラム罐五ガロン罐 ツルハシ、ハンマー	

五二五	前號に掲げざる金屬製品中支那向活字 アンチモニー製品	日本鉛亜鉛アンチモン統制組合の支那向資材より割當たることを證する書面 所屬工業組合のアンチモニー含有率檢定書(含有率二五%)未滿のものたることを證する書面
五三九	瓦斯計	關滿向に付ては機械工聯又は日鋼聯發行的「圓域向機器製造認定書」或は「對日期待製作加工品需要票」「機器發註許可書」「配給要望書」の何れかにして滿洲國經濟部大臣の發註許可ありたる書面(寫の場合には配給統制團體の裏書を要す)
五四〇	水量計	支那向に付ては機工聯又は日鋼聯發行的「圓域向機器製造認定書」或は與亞院連絡部發給の「機器發註許可書」又は「配給要望書」(寫の場合には配給統制團體の裏書を要す)
五四五	壓力計	但し税番五四九の醫療器中注射針又は醫療用小刀等の小物の申請には前記書類の添附は不要、五三九の瓦斯針、五四〇の水量計、五四五の壓力計には關滿支を通じ右の外に日本度量衡器工聯の「輸出検査完了證明書」の添附を要す
五四九	醫療器	
五五一	理化學器	

(註) 以上(3)についても(1)及び(2)に掲記の書類(注文書又は契約書、輸入承認書等)の添付を必要とした。

かくて圓域貿易は高度國防國家體制の一環として樹立せられ、輸出入ともに國防を中心とする政治的動因または外交的勢力に基礎を置くに至り、正統派經濟學者の金科玉條とした英

國流の比較生産費説や國際分業論などは、過去の遺跡と化し去つた。蓋し高度國防國家體制とは自給自足度の高位にある國家體制を指す謂であり、最初關滿支を以て圍域對象とした貿易は、更に廣く地域を擴大して、日本圓を以て決済する東亞廣域經濟圏をその範圍となしつある。東亞は過去一世紀に亘り自由貿易といふ美しい言葉の假面の下に、英米の植民地もしくは半植民地たるの地位を甘受させられて來たが、さきに英米の對日資産凍結を契機として、東亞本然の貿易體制に還元せしめたのである。

日本を中心とする東亞貿易には、今や輸出または輸入といふが如き自由貿易機構内に概念化された言葉は拒否され、移出または移入といふが如き觀念さへも妥當でなくなつた。即ち從來全く個人本位に價格を媒體としての物資の交流が、東亞廣域經濟圏内においては、日本國民經濟の發展と東亞共榮圏の確立に寄與することを本質となすべきものに轉換されたからにあるのであつて、東亞共榮圏中の軍事・生産力擴充のために重要な物資の綜合的・計畫的な移動が新貿易の基礎概念となり基本性格となつたからである。

而してかかる自給自足體制の確立に伴ふ貿易新秩序の確立ならびに貿易再編成に對處し、且また、諸生産事業をその傘下に持つ原田商事株式會社もまた、より綜合的計畫的な一元統

制の必要に迫らるるに至つて、昭和十五年十二月原田總本社を設立し、超えて昭和十六年十二月滿洲國法人原田商事株式會社ならびに日本法人原田商事株式會社を分離して機構を刷新し、新情勢に對應するに至つた。

第七節 新世紀に即應しての機構改革

自由主義經濟より、統制經濟へ、統制經濟より綜合的計畫經濟へ、經濟法則は徐々にしかしまだ急激に變革が加へられ、第一次歐洲大戰を契機とする個人主義の根本的行詰りは、今やその清算期を迎へ、これに代るべき新なる指導者原理が要求されるに至つた。而して經濟に要請されてゐた倫理性は、外部からでなしに、自己のものとして内部それ自身から溢れてるものとして、公益優先の經濟倫理が主動的地位を獲得したのである。しかし乍らこれは日本の經濟への復歸でもあつた。『經世濟民』を語義とする經濟は、それ自體に高度國防體制への確立を本質的な概念とする。かかる日本の性格に復歸した經濟の在り方は、その經濟法則ならびに經濟機構を次々に改訂せしめずには置かなかつた。

また從來各國の採り來つた貿易政策は販路の獲得に重點を置いてゐたのに反し、資源の確保に死力を盡すことこそ當面の課題となり、外貨の獲得を以て國策の至上命令とする時代は過去の遺物と化し去つたのである。従つて内需を抑制して輸出を促進するための輸出入リンク制度や、圓域輸出制限に關する對策等は、一時的な異常手段として是認されるにしても、今日に於ては盲目的な輸出の振興は國力の低下を惹起する以外の何物でもなくなつた。

經濟情勢は目まぐるしい變改を加へ、必然的に原田商事株式會社もまた新情勢に對應するため、機構を刷新して經營方策を劃定するの必要に迫られ、昭和十五年十二月左の趣旨に基づいて原田總本社が設立せられた。

現下我國ノ直面セル東亞共榮圈確立ニ伴フ國內新體制ノ樹立ハ必然我等ノ關係スル經濟部面ニ異常ナル變革ヲ來タシ萬一是レニ處スル方策ヲ謬ランカ、實ニ容易ナラザル窮境ニ陥ルニ至ルベシ。今ヤ配給機關タル原田商事ノ營業モ經濟統制強化ノ爲メ取扱品ノ範圍漸次縮少シ、其ノ前途ニ對シ大ニ考究ヲ要スルノ状態ニアリ。

此間生産事業トシテ東北特殊鋼、原田金屬等既稼工場ヲ有シ、更ニ近ク撫順精機ノ建設成ラントスルハ聊カ心ヲ強クスルモノアリト雖モ、是マタ今後變轉極リナキ財界ノ情勢ヲ考フル時、必ズシモ樂觀ヲ許

サザルベシ。

仍テ我等ハ常ニ社會ノ動向ヲ察シ、世態ノ推移ニ隨從シ以テ遺憾ナキヲ期スベク、茲ニ原田總本社ヲ設置シ、諸般ノ計畫ヲ樹立シ社内ノ統制ヲ圖リ、生産事業タル直系會社ト配給機關タル原田商事トノ間ニ於ケル合縱連衡ト經營ノ合理化ヲ圖リ、以テ現時局産業變革ニ善處セント欲スルモノナリ。

而して原田總本社規程の第二條によれば「當社ハ原田商事・滿洲原田商事・東北特殊鋼・原田金屬・撫順精機・原田冷凍機等直系會社ヲ統制シ傍系會社ヲ監査シ諸般ノ調査企畫ヲ爲スモノトス」と規定せることによつて、その目的は全原田系の事業を一元的に統制し、總括的に企畫する機能を有することが得される。従つて原田總本社に統制部ならびに企畫部を設置し、統制部はその細則に「統制ハ事業發展ノ基礎ヲ爲ス。然シテ統制ニハ適切妥當ナル科學的組織ノ總成ヲ必要トス。當部ハ先ヅ各關係會社ニ於ケル組織ノ整否ヲ檢討」することに主眼を置き、

- 一、各社間及本支店出張所内ニ於ケル事務統制
- 一、生産品並ニ營業品ノ統制
- 一、各所要資金ノ統制

一、各社各營業所ノ報告及稟議書整理

一、社員ノ任免・給與・賞罰・福利ニ關スル事項

一、各社間社員ノ交流、異動ニ關スル事項

等を統制したのである。

企畫部はその細則によれば次の如く規定してある。

企畫部ハ常ニ我國内外ノ情勢ト經濟界ノ動向ヲ注視シ、之レニ對處スル方策ヲ調査研究シ、變化極リナキ財界ノ狀況ニ即應シ速カニ計畫ヲ樹テ適宜ノ處置ヲトル必要アルヲ以テ、之ヲ二部建トシ日本・滿洲兩地ニ於テ其ノ事務ヲ取扱フモノトス。

一、日本企畫部ニ於テハ東北特殊鋼・原田金屬等ノ生産部門ト原田商事トノ連絡ヲ密ニシ、生産ト配給トヲ圓滑ナラシメ、双互其機能ヲ利用スル事
 圓域貿易、外國貿易ニ付キ新市場ノ調査研究

内地所在ノ代理店及重要取引先トノ連絡、並ニ新規代理店ノ選擇

一、滿洲企畫部ニ於テハ撫順精機其他在滿事業ノ經營方針ニ就キ指導研究ヲナス

滿洲ヲ起點トスル圓域貿易、外國貿易及特ニ北支市場ノ調査研究

三、企畫部ハ常ニ新體制下ニ於ケル諸法令ヲ研究シ事業遂行上抵觸セザルヤウ努ムルコト

總本社の本部は東京に置き支部を奉天に設けるやう規定されてゐるが、當初暫定的に本部を大阪に設置して今に及んでゐる。役員は理事長一名、副理事長一名、理事若干名で、理事長は社務全般を統轄して原田商事株式會社社長が之に當り、副理事長は理事長を補佐し理事長事故ある時はこれが代理をなして原田商事専務取締役が任せられる取極めであつた。また理事は直系會社重役中より理事長が任命するもので、各自關係會社の情況を報告し會議に列席して意見を開陳する權能を與へられた。この結果、理事長に原田猪八郎氏、副理事長に原田惠伍氏が就任し、理事に大浦徳身氏(原田商事常務)・小川邦雄氏(原田商事常務)・出口重雄氏(撫順精機常務)・清水千尋氏(前東北特殊鋼常務)・豊田俊文氏(前原田金屬支配人)・永田己代治(原田商事本店支配人)の六氏がそれぞれ任命された。

而して原田總本社の定時總會は春秋の二期に開催して重要事項を決議し、必要に應じて臨時總會を招集することになり、別に日本分科會は東京で、滿洲分科會は奉天で、一ヶ月に一回もしくは數回開催される事になつて居た。

かくて滿洲分科會は回を重ねること十二。昭和十六年十二月十二、三の兩日に亘つて奉天支店内に分科會を開き、原田副理事長、大浦、小川、出口、永田の各理事が出席して、新體

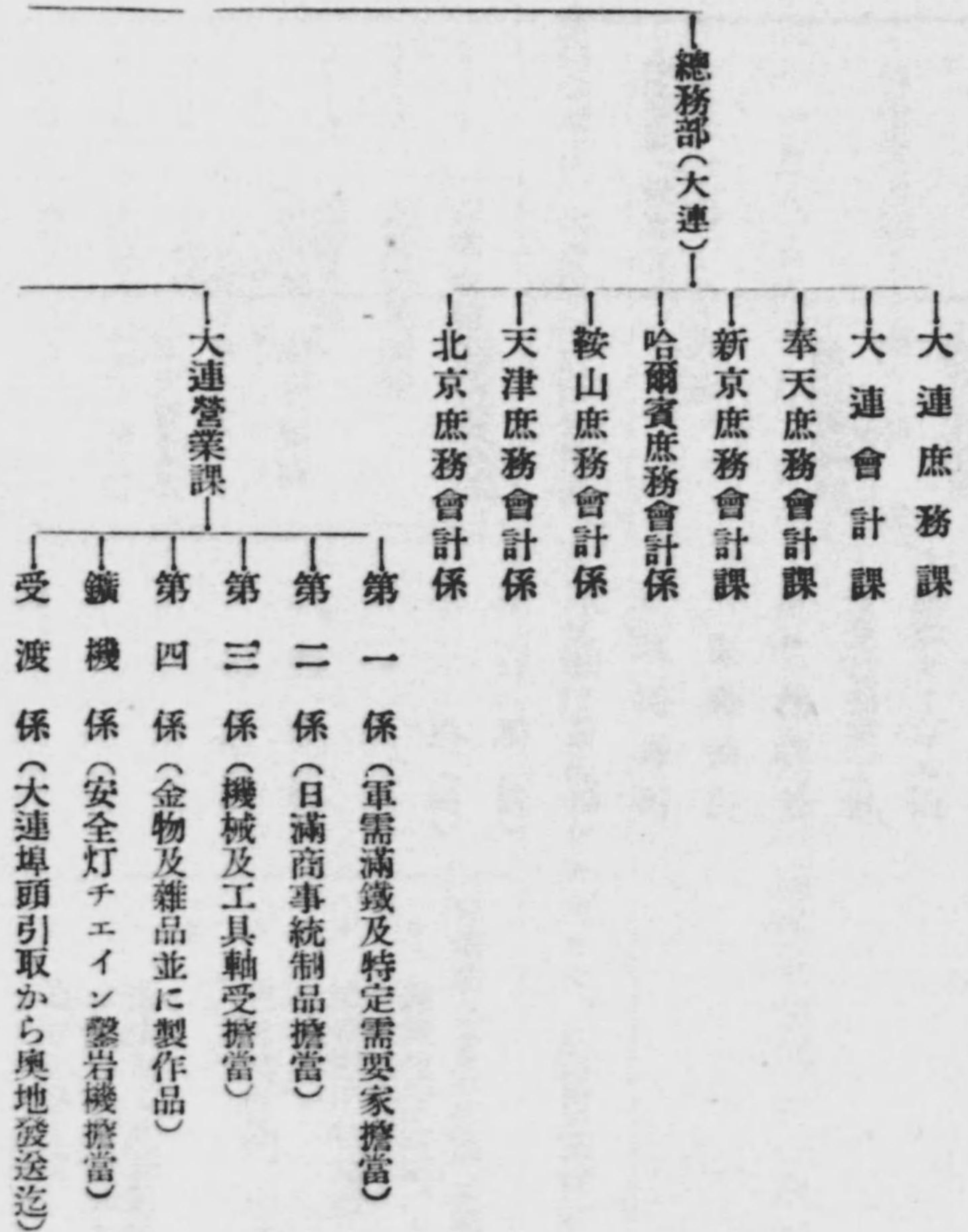
制に即應する原田商事の運営統制機構を改定した。

これによれば日本法人原田商事株式会社及び滿洲法人原田商事株式会社に各々營業部を設け、前者には大浦常務取締役、後者には小川常務取締役が營業部長に就任して營業統制を有機的ならしめた。即ち日本原田商事と滿洲原田商事とはその基礎法規を異にし、法規的には各々分離獨立してはゐるものの、營業内容は一體的であつて、相互に助成し有機的に連繫しあふのを原則としてゐるのである。滿洲法人原田商事株式会社の營業部は新京に置き、その下部に大連營業課、奉天營業課、新京營業課、大連倉庫課、奉天倉庫課、新京倉庫係及び哈爾濱・鞍山・天津・北京の各地營業係を一元的に統制運営し、更にまた滿洲における鑛山機械の圓滑な配給を期し一本に統制するために鑛山機械課を新京に獨立せしめてこれが統括をも計つたのである。また日本法人原田商事營業部は本據を東京に置き、大阪支店、東京支店名古屋出張所、小倉營業所の營業を統轄して一元的に運営することになった。

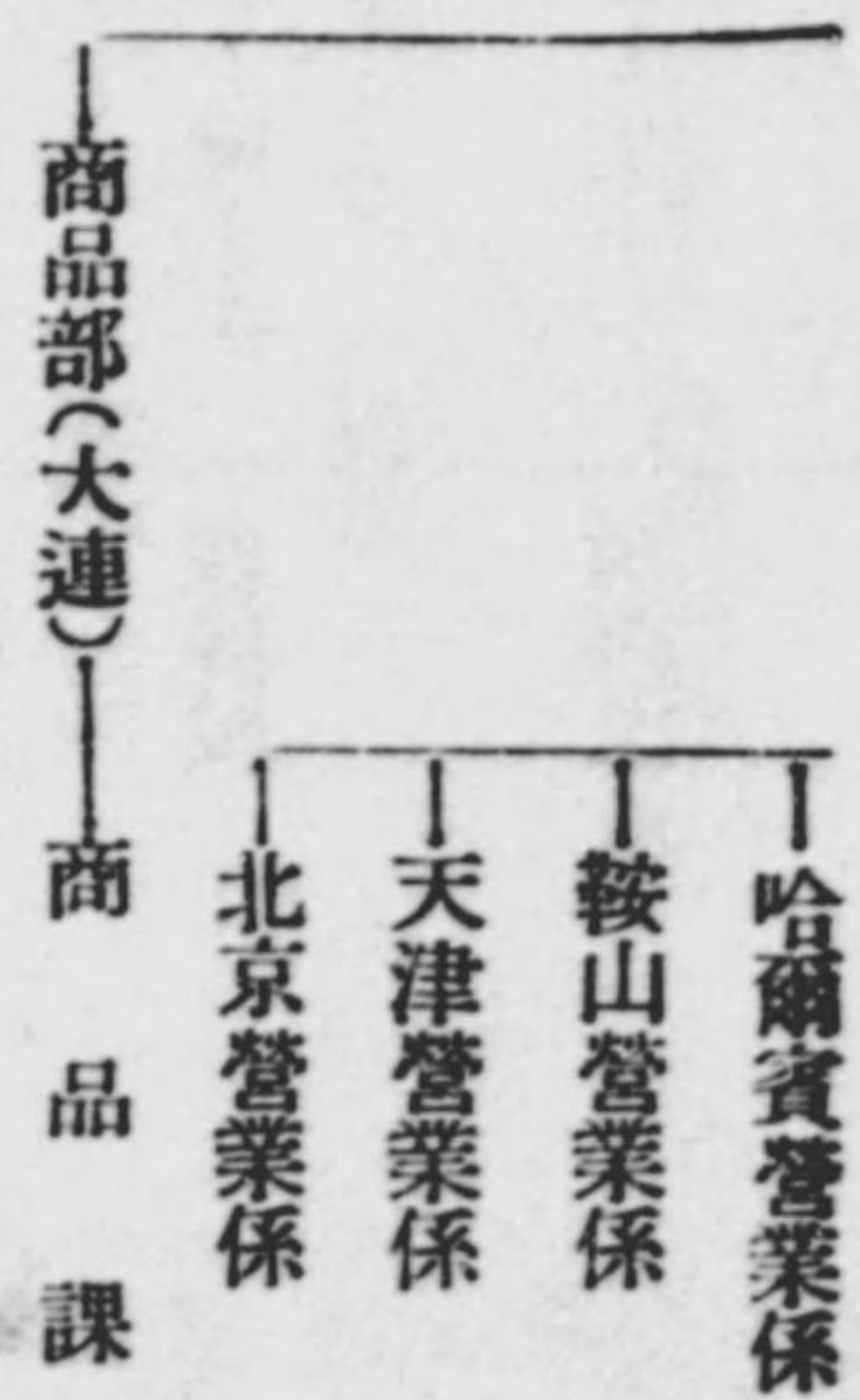
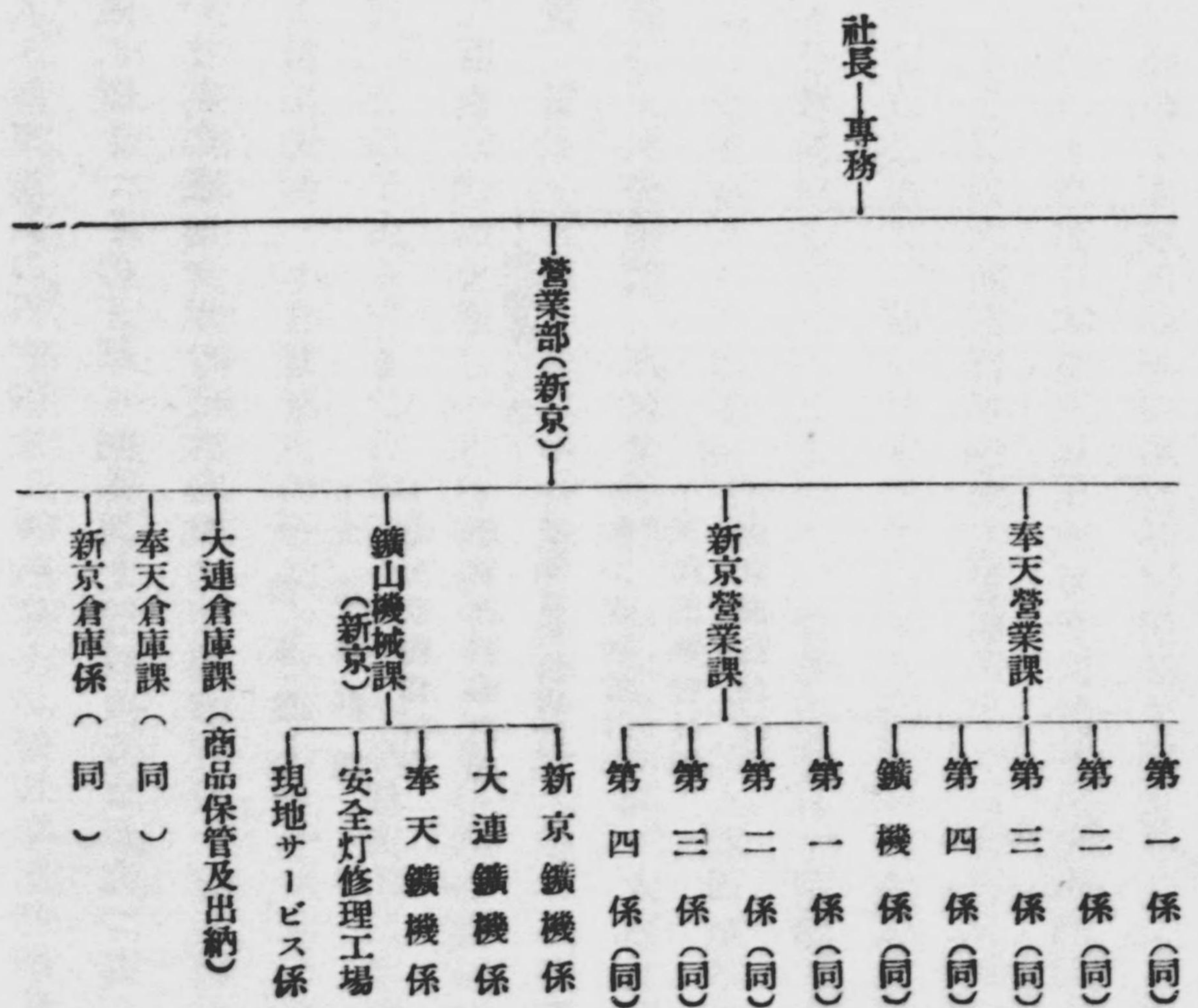
右の營業部のほか滿洲原田商事には總務部、商品部を置き、總務部長心得兼商品部長として永田大連本店支配人が就任した。總務部は大連に置き、その下部に大連庶務課、大連會計課、奉天庶務會計課、新京庶務會計課ならびに各地出張所當該係を統率した。また商品の綜合

仕入・新規商品の研究調査・製造家との新規取引特約代理契約締結等を目的として商品部を大連に置き、その下部に商品課を設けることになった。

いま其の職制を示せば左の如くである。



第七節 新世紀に即應しての機構改革



尙、昭和十七年一月八日附を以て作製された滿洲原田商事營業部の「取扱商品分類」を參考までに掲ぐれば左の如くである。

第一係	………全商品取扱、大口限定需要先擔當、其ノ商行爲ハ當係ニテスルモ、品種別諸統計、資料ニハ關係セズ
第二係	日滿商事會社非鐵金屬組合
第三係	滿洲住友金屬、大阪及東京支店、西村福知商店
第四係	鐵管繼手販賣會社大連出張所(大阪本店)
第五係	東北特殊鋼、中央製鋼
第六係	滿洲土工具配給組合、滿洲鐵工、多木農工具、砂川商店
第七係	朝鮮化學工業

第七節 新世紀に即應しての機構改革

第三 機械							第四期 飛躍時代		
3-機-1	3-機-2	3-機-3	3-機-4	3-機-5	3-機-6	3-機-7	2-機-10	2-機-9	2-機-8
原動機	工作機械	空氣機械	鑛山機械	ポンプ及風力機	農機具	雜機械	鋼材組合扱品	軌條附屬品	鋤、鐵鎖
エンジン、モーター、ボイラー、發動機、變壓機、重油燃焼爐、各種鐵工、木工、工作プレス、鋸金機、鍛工機械	各種ウインチ、捲揚機、クランツシャー、コンプレッサー	各種ポンプ、送排風機	各種農機具輸入組合關係及農機具	デヤツキ、チエンブ、ロツク、起重機、化學用機、其他	ドリル、リーマー、バット、オスター、鑛、金剛砂、砥石、中央會統制品	各種ゲージ、マイク、回轉計及滿洲計器關係	各種鋼材	各種鋼材	各種鋼材
富士電機工廠、日本發動機、吉田商工、東京芝浦電機、黑崎電機	戊申工業(板金)東京板金、大阪板金、遠藤工業、昌運、品川精機、西林鐵工、淡路鐵工、大平製作、濱中商店、筒井工業	油谷鐵工所	大和鋼機、興亞機械工業、北都電機、横山工業、關西電氣鑄鋼所	アボロ鐵工所、山本水壓工業、日本チャンピオン送風機、ポンプ製造所、日野屋鐵工所(耐酸ポンプ)	滿洲農機具輸入組合、多木農具、滿洲鐵工岡崎製作所、東洋鑄造鐵工、日本乾燥機製造	滿洲計器、黒田挾範製作所	日本機械製鋸、大阪機械製鋸、東洋鋸鋸	軋釘、鞍山製鋸	滿洲鋼材組合

品製鋼鐵				品用屬附			具工			
4-鐵-4	4-鐵-3	4-鐵-2	4-鐵-1	3-附-3	3-附-2	3-附-1	3-工-5	3-工-4	3-工-3	3-工-2
ト口車輪	容器	熔接棒	釘螺銀	パーマタイト煉瓦	ゴム調帯、ゴム製品	革調帯、革製品	粗工具	電動工具	軸承	計測工具
各種鋼材	各種鋼材	各種鋼材	各種鋼材	各種鋼材	各種鋼材	各種鋼材	各種鋼材	各種鋼材	各種鋼材	各種鋼材
原田商事工場、北鮮製鋼	大和金屬工業、大松商行、西村福治	妻島商會、昭和電極棒、滿洲化工、鞍山精工業、中山製鋼	鞍鋼釘、鞍山製鋸、鞍山精鋼、山添發條	遠藤合資、五稜斷熱工業、宇野耐火煉瓦	東京ゴム、大阪帶革製造	滿洲工業革製品統制組合(日本工業革製品會社)、大阪帶革製造所	北鮮製鋼、其ノ他大部分大阪支店、東京支店、名古屋出張所及大連奉天地方製鋼	芝浦製作所、日立製作所	光洋精工、東京ベアリング(F、R、Bフレキシブルローラーベアリング)	滿洲計器、黒田挾範製作所

であつた。従来各支店・出張所が各々基本単位として、一ブロックとして本店の統制を受けつつ運営される機構のみでは、新情勢に照應することが困難となり、原田商事そのものが丸となつて、見積・注文はどこでうけてもそれが原田商事そのもの見積・注文であるといふやうに、各ブロックの注文の奪合ひを拒否し、總てのものが強力な指導者原理のもとに運営づけられることを意圖したのである。

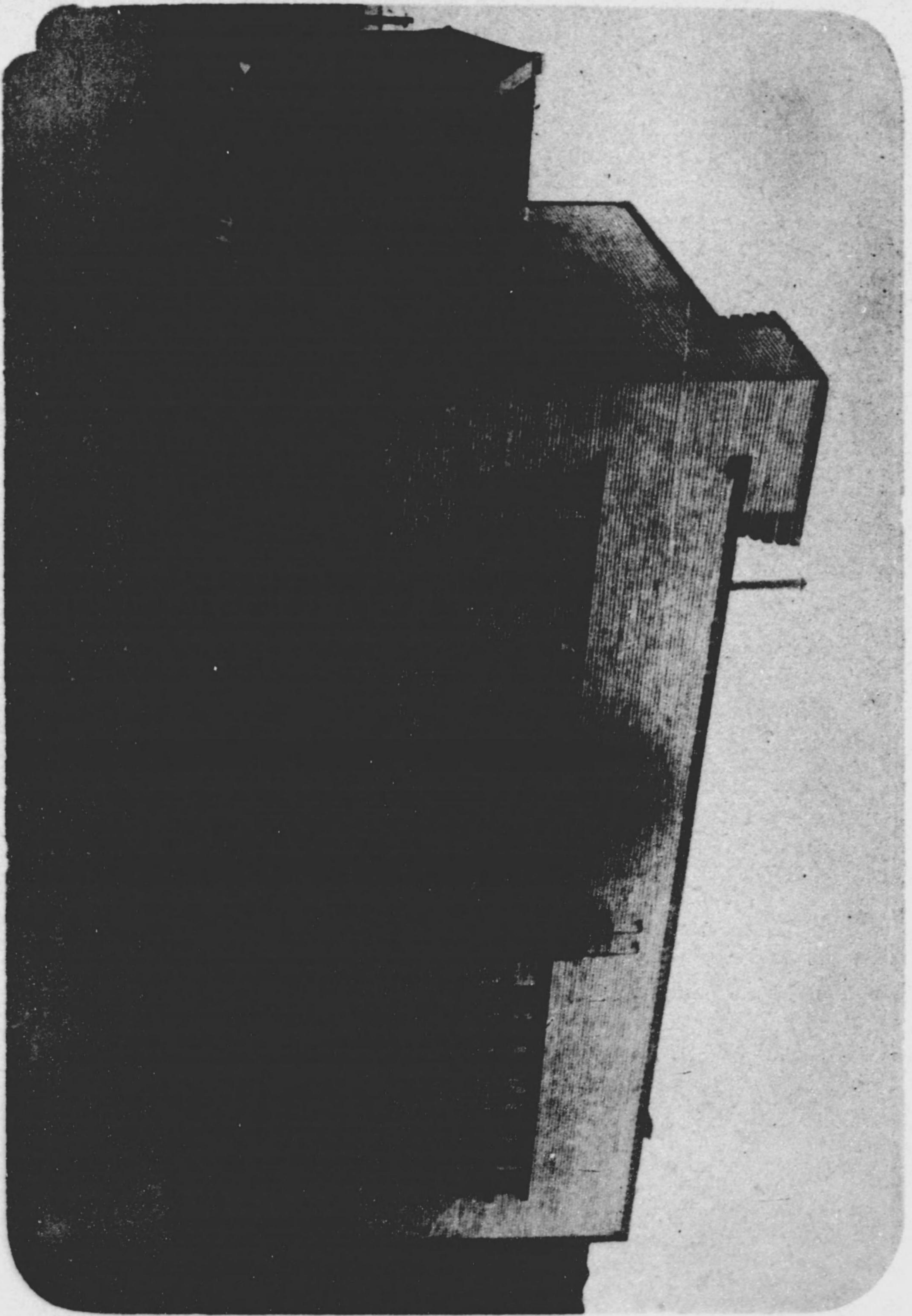
これを一面より考察すれば、今やかかる機構を要請するほど、原田商事の事業が増大し、巨大な基礎構築を完成したことを物語るものであり、更にまた其の運営が機宜を得て蓄積せる大きい力を、新情勢へ迫力を以て推進せんとする意志力をそこに発見し得ると思ふのである。

原田商事は、其の偉大な指導者社長原田猪八郎氏を中心として、果敢な前進をこの歴史的轉換期に敢行しつつある。そして今や爲されとんしつつある諸企圖が將來榮光あるものであることは、過去四十年の堅實な發展段階の中から、確信的に豫約づけられてゐると我々は斷言して憚らないものである。

第二篇

支店・出張所
直・傍系會社

發展史



原田商事奉天支店社屋

第一章 奉天支店史

現在に於ける滿洲國法人原田商事株式會社奉天支店史を書くに當り、遠く其の前身大連原田組が、大正六年六月一日新緑正に滿洲に映ゆる生氣瀲灩たる時季に、奉天進出をなした當時の様相を語らねばならぬ。思へば既に二十五星霜を閲し、原田組の母胎よりの支枝も、風雪にたゆまぬ強切な骨格を呈したのである。

歐洲戰亂が終熄して、世界を風靡する經濟恐慌來も、堅實を目標として營々將來の飛躍を期しつつありし時、本溪湖煤鐵公司、撫順炭鐵は建設の當初より、原田社長自らの開拓の地盤であり、大連本店よりの連絡に更に一段の緊密を要望せらるゝ一方、今日奉天鐵西工業地帯の先驅をなしたる滿洲製糖、奉天製麻、滿蒙毛織等の諸會社は、奉天に於ける唯一の日本人經營に掛る生産部門として、雄々しく樹立せられんとする際、原田組の滿洲に於ける據點を奉天にトシ發祥したのである。

當時、奉天における金物商は、極めて小數に止り、在奉邦人亦寥々たるの時、その英斷は活目に價するものがあつた。


奉天驛を中心として、中央奉天城内に貫く千代田通、南に平安通、北に浪速通の三大貫線道路が主體をなしてゐるが、當初浪速通郵便局西側江之島町に店舗を構へ、小田村信一氏主務者として着任し、搖籃時代の礎を築いた。

取扱商品としては、鐵鋼金物を主體として、大阪帶革ベルトピツカー等、皮製品、工具等であつたが、特筆すべきものとして、SKFボールベアリングは、本溪湖煤鐵公司に一手に納入した。

品物は殊に良質のものを選擇し、原田組の品は高いが良いと、一般顧客に對して認識づけ、健實な歩みを續けたのである。

千代田通廿番地に新店舗を建築したのは、大正八年で、現在こそ奉天の中央に位し奉天驛よりも不遠不近絶好の位置を占めて居るが、當時は全く廣漠たる草莽の地であつて、日本商社としては、千代田通進出の先驅をなした。千代田通今日の殷盛を誰が想像し得たであらうか。現在の千代田通り國際運輸の所在地と、現店舗の位置との何れかを決定するに當り、後

者を卜した事は誠に當を得たものであつたことが、市街の發展と共に明瞭になつた。

自由經濟時代に於ては、店舗の位置は重大なる役割を占むる一要素であつて、其後店舗の改造は屢々斷行されたとはいへ、その骨格は昔のまゝであり、當時二階建の建築は一偉彩を放つて居た。欲を云へば二〇番地一劃が獲得されて居たならば、素晴らしいものがあつたと思ふ。何れにしても、鐵鋼金物は供給量に比し、需要先が小數に過ぎなかつた爲めに、その方針は極めて深く且つ滲透性を以て需要家に喰入り、製糖會社のバルブ類の如きも  のマークの特定品が常に購入せられ、後年永く倉庫に殘留するバルブを見る時、追憶の新たなるものを覺えるのであつた。

東三省軍閥としての張作霖が、奉天の經濟界に幾多の波瀾を捲き起したことは世間周知のことであつて、原田組奉天支店史から、張軍閥の變遷は度外視できぬ。

奉天支店搖籃時代は極めて手固く、一步一步と力強い基礎が建設せられ、城内支那人方面における取引も、殆んど見るべきものがなかつた。張作霖は漸次確固不拔の勢力を蓄積し大なる兵工廠の建設に着手した。獨逸・英國・日本よりも技術顧問を得て、綠林の王者は、近代的武器製造軍擴に乗り出し、東三省民衆の膏血は大砲小銃と化身し、大正十一年頃より

兵工廠の兵器製造工場の資材は奉天の經濟界に一大紀元を劃しつゝあつた。

此處に於て從來の日本側會社に加ふるに、兵工廠關係の取引に對し、更に主力を注ぐの必要を生じ、大正十三年當時の東京支店長青木昇氏（豫備砲兵中佐）は、兵工廠專任として奉天に赴任し、一意兵工廠の開拓に着手したのである。即ち歐洲戰亂後の數年間の不況時代を突破して變則的に奉天には張作霖軍擴時代があり、この爲めに奉天一般財界に及ぼしたる影響は特筆するに價すると思ふ。従つて奉天支店そのものの取引も大正十一年より急ピツチを以て上昇し、張軍閥の軍擴が投影する所は賣上金額の上に明確に把握しうるのである。

此間、郭松齡事件あり、明智光秀を地でゆく郭が、奉天城をさして怒濤の如く進撃し、砲聲殷々として心膽を寒からしめ、流石の張作霖も日本に援助を乞ふに至つた。丁度今の滿鐵總裁公館が日本領事館であつたが、張作霖が領事館廊下を焦燥に驅らるゝ心を、下卑た言葉に出して行きつ戻りつしたことは今日にも語草となつて居る。しかし日本軍の邦人保護のためにする滿鐵沿線侵入不許可の斷乎たる態度により、郭松齡は奉天城を指呼の間に望む新民屯にて、敢へなく憤死するに至つたのである。

大正十四年より昭和三年迄が、奉天在住の各國商社が鎬を削つて兵工廠の擴張建設に奮闘

した時代であつた。今日より考へて見ると實に悲喜交々到るの思ひがある。その二三を摘録して當時をしのぶよすがとしたい。奉天の貨幣問題はその一つであつた。當時張作霖發行の奉天票と大洋及び現大洋と稱する銀貨が、奉天における貨幣の主流をなしてはゐたが、その外に金票即ち日本紙幣があり、外人關係の弗・磅があつた。變動の激しい奉天票は毎日／＼相場が異り、長期に亘る見積りは極めて不健實であると共に、外人との契約は弗・磅にて契約し、日本人には金票では見積りさせぬといふ矛盾した事があつても如何ともすることが出来ず、現大洋とても奉天票程の變動はないとしても、これ又相當の變化があつた。

随つて見積價格に或程度のリスクを見ると、支那人との競争には打ち勝てぬ譯である。契約して代金を受取つて見ねばその不安は除去されない。見積當時の換算率が入金の際に悲喜交々來るといふ現象を呈し勝ちであつた。

筆者が奉天に着任早々、兵工廠に用件を帯びて、奉天附屬地より、バスにて兵工廠の手前（現在の中央銀行造兵所前、當時は兵工廠の機關銃工場）迄乗車して代金を支拂ふことになつたが、奉天票の手持ちなく、金票五圓也を支那人車掌に渡したところが、奉天票でなければ受取らぬといふ。「金票を奉天票に換算して奉天票にて釣錢を渡したらよいではないか」と

いふと「それはいかん。君が奉天票が無ければ附近の錢舗（貨幣の交換所で、當時は各所に介在して成程度の口錢をとつてゐた）で交換して來い」と言つて、口角泡を飛ばして仲々解決がつかぬ。錢舗は附近になし、數萬圓の見積りが時間的に制限のある重要な任務を帯びてゐるので氣が焦る加減か、下手な支那語が十分に表現できぬ。ついに交通巡查に兩人の仲裁を願ふ事になつたが、結局理が理で通らず敗北、野次馬共の威嚇にあつて五圓也を劫奪せられるに至つた。

現大洋の銀貨を受取る時は一元（一圓）銀貨が直徑約二吋もあり、一萬圓も受取る時には所謂千兩箱幾箱といふ譯で、自動車に積載し人夫帶同にて行く譯である。此の現大洋は仲々膺物がある爲め、支那人は苦力でも、一度指先で弾いて、チーンと云ふ音に耳を傾けて識別したものである。

閑話放擲、青木氏を主務者として兵工廠係は、日本人二名、支那人外交員二名が係員となり、兵工廠に主力を傾注したものである。

工作機關係としては、若山鐵工所と正式に代理權を締結し、昭和元年六月、大型大砲削旋盤超重式特々旋盤の受註を手始めに、双頭手床（支那語で双頭手床と稱するのはツラバース

シエバーの事である。旋盤の事は車床と云ひ、ミリングの事を銑床と云ふ。當時の仕様書は支那語・英語・獨逸語で出るので、その意味を了解するのは極めて困難であつた。沙輪はエメリホイルの事であるが、しかし沙輪一机を普通のエメリホイルと見積つたら大變な事になる。これが不明のために何れの商社も見積不可能のまま數ヶ月放置せられ、偶然の機會に要求工場技術者より、それが兩頭グライデング・マシンなることが判明し特別で受註したことがある。一米ストロークのシエバー、萬能ミリング、タツピング、カツチング、スクリュールアタチメント機と云ふ様な、現在の日本マシンツールメーカーにても至難なる機械が、若山鐵工所にて製作され納入された。

一米ストロークシエバーの製作には、若山鐵工所も、吳工廠に技師を派遣、スケッチして随分製作に手違ひを生じ、大阪川口港を出荷する時には、クレンの故障にて不祥事を出す等の不幸もあり、納入の際には工場建物が狭く、建築物を一部破壊して納入する等の事もあつた。

兵工廠の外には滿洲事變發祥の戦跡地北大營の一部は、英國退職陸軍少將某の設計に掛る迫撃砲工場あり、工廠長は學良と講武堂同期出身の年齢三十有餘、陸軍少將李春宜で、英語

をよくし、猛烈な外人崇拜・反日思想家であつた。

又、排日の温床となつた北陵の南にある東北大學附屬工場は（滿洲事變後滿鐵の御花園工場と稱し鐵道工場となつたが後、焼失、現在は總局の鐵路學院となる）一面生徒の實習工場たり、又一面營利工場として、ボイラー、ラジエーターの製作をなしてゐたが、兩工場とも當初にはエドガーアレン鋼、旭鋼等によつて需要を充足した。

今日滿洲鑄物、前田ボイラー、興奉鑛工廠等のメーカーが出来て居るが、東北大學工場に於ては、十五年以前より、米國アイデアルファイター型のを製作して居た。

兵工廠材料科長は日本内地の情狀視察の爲め日本に赴きし事があつた。奉天支店は仕入機械は大阪支店に依存する處、大なるものあり、大阪支店と連繫をとり、視察一行の便宜に資する爲め、支那人通譯白玉政を隨伴せしめた事もあつた。

昭和四年店舗を改造して、現存する硝子ショウウインドを作り、全部を商品の陳列に當て以て現物認識に依る販賣法を取り、西森鐵工所の旋盤ボール盤等約四十臺を並べ、その他の工具類をも顧客の目に觸るゝ陳列をなし、地場賣にも可成の重點を置いた。事務所は僅かに十人を收容し得る程度の小規模にて第一線の外交販賣は矢張り支那側に主體を置いてゐた。

一方張作霖は郭松齡事件の日本の恩恵を忘れ、漸次排日の旗幟を鮮明し、對外人對日本人の間に、誠に不愉快なる差別をマザ／＼體驗せしめるの愚を敢へて爲すに至つた。

昭和三年中原に乗出したる作霖が、意氣揚々、山海關を通過歸奉の途次、奉天西北の滿鐵クロス線に於て爆死し、東三省は學良の踏襲となつた。原田社長は當時在奉中にて、兵工廠よりの歸途、時ならぬ爆音を耳にせられたと記憶する。

次の周期が排日の熾烈化、世界パニック時代が到來、滿洲事變勃發期までが、奉天支店としても、尤も多難な時代であり、又、歴史的に見ても多彩な周期でもあつた。

不況が益々深刻になると共に、日本人關係會社の運営も亦漸次衰退を餘儀なくされた。南滿製糖の始は、原田組奉天支店の發祥時代の大顧客であつた事は前述した通りであるが砂糖製法を一般支那農民にビードを栽培せしめて原料とする方針を取りたるも、之を壓迫するため、農民に過重なる課税に依る搾取をなし、遂に製糖會社の經營難を來し、支店の大顧客も又減する情況となつた。従つて、必然的に支那人側諸官社の方面に、より以上の重點を置くことを要望するも、學良は、鐵道政策に於ても、滿鐵包圍策を取り、齊克鐵道・四洮鐵道・瀋海鐵道等の並行線を建設し、更に交通委員會を設立して、滿鐵の生命をおびやかし、

楊宇廷を私邸に於て暗殺するや、俄然、排日の鋭鋒を如實に表はすに至つた。

「楊宇廷は張家の忠臣である。特に親父作霖の股肱の臣である。彼の曾ての忠誠には深甚の感謝と謝意を表する、併し乍ら彼の野心に對しては斷乎劍あるのみ。張家をして盤石の泰きに置くには涙を揮つて馬糞を切る」と云ふ様な聲名をなした。當時、楊宇廷は兵工廠の督辦であり學良を凌ぐ勢力を有してゐたので、日本と氣脈を通じて張家打倒の野心を有するものとし、兵工廠出入商社より老大なコミッションを取りて軍備の確保に資してゐる事を疑つたのである。このために、兵工廠出入商社の未拂賣掛代金の一〇%乃至二〇%値引きを時の材料科長に命じ、内外商社をして數ヶ月間、全く悲惨のどん底に落し入れたのである。當時奉天の支店としても、十六萬圓を超ゆる未決済金あり、之が解決は奉天經濟界の一大不祥事であつた。兵工廠前面に軒を並べた華人商社は、掛賣金の入手遅延の爲め倒産するもの續出するに至つた。

各國の委員は、或は領事館を通じて解決を迫り、情理を盡くして運動するも、學良は言を左右にして、荏苒日を延引するのみにて、治外法權撤廢を口に稱ふる學良にして、國際商業道德を無視せる現實に切齒扼腕するも、如何ともなし難き情況を呈した。

現在の忠靈塔の東にあるオリエンタル・ホテルに、日・獨・英・佛・露・支各國の商社が集合、國際會議を開催したのも當時のことである。原田組も日本人側代表に出席し、斯かる不合理に對する絶對反對を表明し、全員一致歩調を合することに決した。使用語は英語であつた。今日の大東亞戰爭完遂の曉は、斷然日本語でやれることを思へば、日本の世界的標準も上昇したものである。この會議は、二三商社の裏切りに依り、瓦解して、結局學良の思ふ壺にはまつてしまつたのである。

更に排日排貨は愈々露骨となり、城内に於ける民衆も、田中内閣成立の時は、堂々と打倒帝國主義・打倒田中内閣の旗を戸毎に掲げ、日本品（東洋貨）は全く外國品（西洋貨）に壓倒せられ、代金の回収亦長日月を要し、加ふるに紙幣の濫發は、奉天票の價格を極度に低下し、十圓札が日本金票の十二錢に相當する様になり、現大洋又下落の一途を辿るに至つた。

城内の夜間の通行、郊外への單獨行動も危険であつた。從來馬賊と稱するか、強盜と云ふか、強力强奪犯は頻々として起り、千代田通目抜の店舗は、軒並に襲はれ、原田組も三名の馬賊に襲はれんとした。しかしこの時は、巡邏中の日警官に發見せられ、店舗前にて射殺されて危険を脱したのであるが、これは確か昭和二年の頃であつたと記憶してゐる。だが斯か

る危険とはその本質に於て趣きを異にする排日毎日に起因する危険は、それ以上の危険を想像せしめ、まことに寒心に堪へなかつた。

昭和五年奉天支店創立以來、始めて小額ながら赤字を出すに至り、此處に曾てなき人事淘汰が斷行せられ、内には經費の節約、外には積極的な進展を計る爲めに、小田村信一氏は大連本店長に、筆者は奉天支店長に、それぞれ重責を擔ふに至つた。ここに起死回生の非常時方策として、上下一致の協力團結により、新情況に處せんとしたのであるが、經濟界の不氣味な底調は犇々と、しかもねばり強く壓迫して來た。

日露戰爭に血をもつて購つた滿洲における權益は、あくなき排日の風潮に危殆に瀕せんとし、在奉同邦は内地に引上げを執行する者もあり、兒玉源太郎將軍をして、滿洲に百萬人の同胞を植ゑつけんとする抱負は、地下の將軍をして慨歎せしむるに至り、日に日に毎日の行動は目に餘るものがあつた。奉天に生じた不祥事件としても、富山縣人會の城内侮辱事件を始め、神原農場事件、滿鐵線鐵路妨害事件等、全く枚擧に遑ない。昭和六年九月十八日の歴史的な滿洲事變の勃發となり、原田組奉天支店史の第三期時代に入るのである。

原田組は日本ペイントの滿洲に於ける總代理店であり、昭和五年五月事變の直前、危険な

る空氣が全滿に滿つる時、社長は日本ペイント内地代理店を以て結成する大黒會の一行を、滿洲視察に招ぜられた事があつた。今日奉天の慈善事業として有名なる孤兒養老院同善堂を視察せられた時、筆者も隨件して院内孤兒養育學校教室を參觀した事があるが、教授中の妙齡の女教師は、我々外來者に對する禮を失するのみかは、極めて冷淡なる白眼を以て遇した。一少女にして尙且かくの如き實に肌を粟を生ぜしめる感を深くしたと、當時を回想して社長の常に口にせらるる處であり、如何に滿洲が非常時的事態を呈してゐたかが、これによつて察知せられる。

迫撃砲廠の材料科長は、英國エドガー・アレンk9鋼の公開入札に際し、當方が値段納期遙かに有利であるにも拘はらず、英商チャデンマジンソンに公然と決定した。公開の席上顔面を逆になでられた屈辱感に、思はず大聲叱咤せしところ、之に應酬するに「東洋鬼」を以てした。

營利商店としての商取引に屈辱を與へられたのは忍ぶところである。乍併、日本人としての侮辱を受け、尙且、低頭忍耐するところ何れにありや。今後の取引は當方から辭退すると憤然卓を叩いて歸つた事もあつた。商賣もさること乍ら、日本の對滿政策は之で良いのか。

此の儘に放置して居たならば滿洲退場は必至であり、第一線邦人の過去の基礎建設は一朝の夢と化する。各々國家的意識が奔り、國力發展の貴い根幹ならば、日本人は喜んで捨石ともなる。無駄な捨石たらんよりは寧ろ決然起つべきである。此の氣持は皆の忌憚ない真髓であつた。九月十八日柳條溝の爆破は、盲腸患者の患部にメスを入れて、以て清淨を期する手術であつた。

事變當時の奉天支店員の動靜を、此處に附記して置かう。事變當夜は午後十時頃、在郷軍人に應急召集令狀を發し、守備隊の北大營攻撃中、市内の警備に任ずる事となり、出口・中西・村上・盛口・小澤・森山の六名は、直ちに警備隊員となり任務に服した。九月十九日の朝まだき、遼陽多聞師團の精銳が奉天に到着、尖兵を案内して、日頃城内の兵工廠その他官衙を熟知し、且つ支那語をよくする中西君が、勇躍部隊の先頭に立ち城内に道案内を承り、奉天支店員の面目を發揮したのも此の時である。同君は當時の感激が終に軍屬として挺身することに決心せしめるに至つた。現在中西君は新京協和會に、盛口君は奉天鋼材組合に勤務中であり、小澤君はその後獨立寫真機商を營業してゐる。當時は六名の召集により、店内の留守居を承るものは、少年川野・永岡の兩名であり、一時休業して兩君は店内の警防に任ず

る事となつた。

北大營は一夜にして占領、滿洲の曙明も十九日の朝より潑刺として進展した。隱忍自重、今日ある日を期待した邦人は流飲を下げ、且つ今後の躍進日本の姿を目の當り體驗し勇躍した。馬占山討伐の漱江戰・熱河征戰・錦洲攻撃と、戦局は發展すると共に、奉天支店員は夫々、當時の關東軍參謀長三宅少將の傘下に入り、涼工廠・被服廠・糧秣廠或は東北無線電信局等の守備に服した。

滿洲事變勃發以來十二月二十八日迄は、支店員は全く業務を取る餘暇なく、召集解除を反復すること三回、一時は停頓状態に終始した。今日の奉天は全く滿洲の玄關に等しい。當時は事變の爲め大連との連絡も、一時停頓し、況んや内地との密接なる連絡は不可能にて、事變發生の夜「ジヘンオキタ」の第一報を、大連と大阪に打電したのみであつた。

後年數字的に大いなる利益を計上するに至りたる事も、事變前のあの沈滞と焦燥の時期が力士の土俵一寸の處にて押返す力と云ふべきか。或は冬の寒氣が去り明朗なる春の日射しの内に、若葉が大地を持ちあげる感と譬ふべきか、とも角にも、この數年間來味へぬ一同の精神的喜悅は大きいものがあつた。昭和十六年十二月八日の異常なる緊張味と、その反面萌

え上る大きい清新性は、ちやうど鬱陶しい暗雲の裂目に青空を見る氣持であつて、在滿邦人と日本皇軍の呼吸がピッタリ合した當時の緊迫感を今想起しても心の躍動するのを覚える。明くれば昭和七年、疾風枯葉を捲くが如き皇軍の赫々たる戦果は、現在の滿洲國の全域に亘つた。リットン卿一行の聯盟代表の滿洲事變檢討、日本の國際聯盟脱退は、尙耳に新らしい所であつて、滿洲國の建國、長春を國都として新京と稱するに至つた。

當時、學良の兵工廠は今日の滿洲飛行機製造株式會社、株式會社造兵所となり、迫撃砲廳は自動車部門の同和自動車に、皇姑屯京奉鐵道工場も、齊克四洮瀋海鐵路等の鐵道も、滿鐵の委任管理となり、所謂滿洲は全く一大活動を開始し、經濟界も久しき沈滯萎微を脱皮して所謂滿洲建築景氣と稱するものが到來した。之より先、滿洲事變により、一應敵性支那官衙方面への各商社の賣掛代金は、債務者が全部抹消されたる以上、之が解決は至難の問題として残されたのである。

奉天支店としても、迫撃砲廳・鑛務局・東北大學等に、未收金若干を残して居た。幸に兵工廠に對しては支拂の緩慢と貨幣の不安定等のため積極的方針は執つて居なかつたため未回收金は殆んど有しなかつた。而してこれら未回收金の債務については、積缺委員會と稱する

債權整理の調査機關が生れ、奉天領事館が主として其の衝に當り、當時の特務機關長土肥原大佐（現大將）が奉天市長として、從來の奉天の草分けをなした名士が各重要ポストを分擔し、この急設せられたる機關を通じ約一ヶ年後に公債式のものにて解決した。處が何が幸になるか判らぬもので、債權發生當時は現大洋の金換算率は悪かつたが、漸次換算上の利潤を得るに至り、某社の如き三十五萬圓の債權を有して倒産の危路にあつたものが、禍が變じて福を齎された幸運者もあつた。

昭和八年に至り、奉天鐵西の工場地帯が開放せられ、工場建設の緒についた。日本ペイントは既に原田組内にペイント専門の販賣部門を形成し、奉天にも駐在員を置き、逸早く鐵西進出の緒を開いた。原田組は日べとは從來極めて密接なる關係にあり、原田社長と日べ小畑社長合作の下に、滿洲工場の先驅として、今日鐵西工場の建設計畫を樹立され、滿洲に地盤を有せらるる社長が各方面の連絡を取られ、滿洲駐在重役として藤田秀助氏が就任した。原田社長は滿鐵地方課土地係に屢々交渉、第一着に今日の日べの工場土地の獲得に成功、昭和八年只見る地平線上の彼方向物もさへざるものなき第一回豫定工場地帯の一劃に地鎮祭をなした。社長の慧眼は當時既に製造部門への着想を切に考慮せられ居りし事と察せられる。來

賓たりし栗野地方事務所長は「今日此の平原のうちに打ち建てられた當工場の建設を緒に他日彼方の地平線迄、工場煙突の林立の日の實現を望む」と謂はれたが、それが全くの現實となつてゐる今日から、往時を追想すれば感慨の新たなるものがある。

日べ工場と原田組日べ販賣部とは、兄弟の如く、滿洲塗料界に君臨する抱負の下に、紅梅町に社宅要地を設定して、二社社宅を共にするに至つたが、種々なる事情の下に、本製造部門から全面的に原田組が手を引くに至つた。

ともあれ、奉天においては建築土建事業が澎湃として起つたが、急激なる土建の膨脹は請負工事者の杜撰なる經營方針と各會社の材料代金の回収の圓滑を缺き、更に質的に不良なる分子、滿洲景氣に一獲千金を夢見る連中の經濟的攪亂の爲めに、材料の販賣は多大の注意を要し、不良貸付を極度に警戒するの必要を生じた。

賣上は漸次上昇の一途を辿り來つたが、根本的商策の検討と修正とを要する時期に到達したのである。即ち線香花火の如き建築景氣が昭和九年頃續くうち冷靜に滿洲を批判し商策の根本的なる樹立を必要とするに至つた。

大なる變動の後に來る一時の靜寂は、再度の躍進の精力蓄積であらねばならぬ。走馬燈の

様な變遷——滿洲といふ獨立國が世界注視の内に發足し、奉天は滿洲國の工業地帯として裏書付けられ、大連は勿論日本内地に於ける商工業者は、齊しく滿洲の將來性に絶大なる關心を傾け奉天はまた其の焦點でもあつた。

かくて原田組奉天支店の經營方針にも、冷徹なる批判を下し對處する轉換期が來た。先づ取扱品に就ての、品質本位か、値段本位かの問題である。

既述の如く、搖籃時代は、原田組は品は良いが値段が高いとの一般顧客の批判を聞いた。乍併當時は依存すべき取扱商社の數は極めて少なく、信用を一步步積極的に確保していく爲にも、取扱商品の優秀性に力點を置く必要があつた。然るに一旦不況時代に入るに及び、技術的にも極めて低級なる支那官衙方面は品質よりも價格に重點を置くに至り、日本内地からの輸出品も滿洲向の品が續々ダンピングせられる等諸條件に制約せられて漸次、質よりも價格に主點を置く一般的商況を全然無視することを得なくなつた。

滿洲事變後の建築景氣の後に、眞に底力のある滿洲開發が五ヶ年計畫として取上げられ、鐵石炭部門鐵道部門等は、日本人技術者が中樞となつて建築が開始せられ、自由經濟は漸次統制經濟に移行せんとするに至つた。支店としても、此處に一段と、從來代理權を有する商

品の市場性打診、日本内地メーカーとの接觸、販賣方針の確立等が再検討せらるべき段階に達した。いまこれを具體的に見れば、建築材料の主體をなす鐵鋼ならびに鐵鋼製品は、一元的統制を受けるに至つたので、國策の進路に即應すべき方策をとり、機械工具等高い性能を本質的に要求せられるものについては、質よりも價格の一般的商況を無視し得ない乍らも、原田組傳統の質を重視し、東京のメーカーとも深い連繫を持つに至つた。すなはち從來大阪に供給源を有してゐたのであるが、より一層品質に主體を置くとなれば、どうしても東京方面との有機的に結合しなければならぬとの意圖から、東京板金、宇都宮工具製作所、小島鐵工所、アボロ鐵工所等の新しいメーカーと深い關係に立つに至つた。かくして古い關係を持つ本多商店・椿本チェイン等の有力業者とも、一層緊密に雙關しつゝ、不拔の地盤を築くと共に、品質的に十分の自信を以て需要家に推薦しうる光洋精工のベアリング、油谷鐵工所の空氣機械、昌運工作所の工作機械等は、重要な商品として期待し販賣宣傳に努力すべく方針が樹立されたのである。

次に現金主義か掛賣かの問題である。大正九年より昭和九年迄の十五ヶ年間の統計をみれば、幾多の社會情勢の變轉はあるが、大體に於て總賣上高に對する現金賣は平均約六%内外

で、昭和八年度の一一・四%を變態的と見て先づ六%内外に終始してゐる。

即ち全體的の數字より見れば僅少であるが、奉天市場は内地乃至關東州よりの輸入期間を考慮に入ると、代金決済に於て回収迄の期間の永きため相當の金利上の負擔を受くる事となる結果、當時の商社は何れも在庫品の現金賣に相當の腐心をなしたのであつた。

材料として尤も重要な鐵鋼は、大連に於て同志會メンバーとして、進和商會との華々しき販賣戰を演じ、之が販賣量の増大は望まじき事ながら關東州地區に對する奧地需要家の關心は購入者側が積極的なるに反し、滿洲内に於ける商社の鋼材販賣は、販賣者自體が積極的なるため、販賣量の増加を計るに代金決済條件に讓歩の止むなき結果を生じ、其の利潤と回收問題に極めて困難を來した。又瓦斯管、洋釘、亞鉛鐵板も組合制となり、利潤の低下・販賣量の確保に拍車を掛ける事となつた。

以上の如く各部門に就て從來と異りたる狀勢が萌芽しつつあつた。

昭和十年は内地各代理店關係メーカーは、久しき不況の後を受け、滿洲事變後の滿洲の目覺しき發展の推移に對し、從來の滿洲觀を改め、代理店の積極性を要望し、メーカー自身が推進的役割を強大にしたかの感を懷かしめた。而も文化の向上と共に、内地との通信連絡は

極めて敏速になり、強大資本の流入、優秀分子の進出等により競争は熾烈化するに至つた。
昭和六年九月事變勃發より、昭和十一年迄を分類すれば

(一) 六、七年

一、軍の施設

二、鐵道の建設

三、内地資本家の投資による工場建設

四、人口増加に依る住宅、之に随伴する文化施設と各種機關の設立

(二) 八、九年

萬事將來の見透もつかず、尨大なる計畫の準備時代とも稱すべきか、又一面、一時的利益の獲得に汲々たる浮薄なる分子の跳梁時代とも云ふべきか

(三) 十、十一年

揣摩臆測の時代は晴れ、太陽の光線薄雲の間より漏れ來る滿洲の實狀は次第に將來の見透づくに至る。

一、滿鐵、鐵道總局は一體となり鐵道統制

二、電業の電力統制

三、電信電話の一元統制

四、滿洲國內に實業部が設立、産業方面の統制

五、滿洲炭礦に依る石炭の開発

六、北滿の移民、大農業法の計畫

七、鐵鋼は統制となり昭和製鋼並に内地の日鐵と建値の決定

八、貨幣、銀行の統制

等々各部門が統制の圏内に包含、將來の經濟統制の方針が確然となつて來た。

昭和十二年に至るや、十一年末より諸物貨は暴騰を續け、特に金物類は需要供給の不均衡の爲に上昇の一途を辿り、販賣高は急激なる上昇を來したのである。

フリヂデア―電氣冷蔵機部は、原田冷凍機部となつて獨立し、これに専任者を置く一方、特殊鋼部を數所に新設し、エドガアレン鋼の販賣に積極化を計る事になつた。

安全燈は、昭和十年末より、滿洲炭礦として全滿炭礦の一元統一せらるるや極めて有望性を帯びるに至り、西安炭礦、北票炭礦更に難攻不落の撫順炭礦に於ては、島津G・Sと全く

血戰數ヶ月、最後に久保炭礦長の吳越同舟の粹な手捌により、兩者同數を納入する事になり漸次各炭礦の突貫的なる採炭の重要具として、其の販賣を擴大するに至つた。三井を核心として、鞍山住友鋼管の販賣に關し、組合機構に依り、日本鋼管と鑄を削つたのも十二年より始まる。

行政方面に於ては、昭和十二年十二月一日を以て治外法權は撤廢せらるるに至り、過去數年間張學良の口にし問題は、滿洲國政府に於て斷行せられたのである。

原田組奉天支店は滿洲國法人として國策に沿ふべく、大連原田組より分離獨立し滿洲法人となるべく昭和十二年十二月之が手續を奉天領事館に提出、翌昭和十三年一月一日合名會社原田組大連本店が、永年の思出多き原田組を原田商事株式會社に改名、株式組織を斷行するや、奉天も之に並行し、滿洲國法人滿洲原田商事株式會社として、新經濟機構に順應すべく誕生したのである。思へば滿洲に於ける原田組の名稱は極めて古き歴史を有し、業界は勿論人口に膾炙して居たのであるが、名も内容も一新、新階梯に向つて發足をなしたのである。

支那事變の勃發と共に、高度國防の必然性は益々累加し、滿洲の資源開發はいよゝゝ積極化され、業界は曾てなき殷盛を極め、昭和十二年の下半年より、昭和十五年の上半期の三年

間は原田商事眞の躍進の周期と云へよう。

支那聖戰は皇軍の破竹の勢を以て、北支、中支、南支を席卷し、滿洲國は友盟邦日本と歩調を合して、長期戰體制をととのへ、いよいよ多事多端となつた。

昭和十三年從來の店舗は狹隘となり、陳列所に事務所が漸次擴大せられ、商品は倉庫に、事務所は事務所として一大改造を餘儀なくせられ、杉山工務所の手により應接間・炊事・暖房室を改造、更に階上獨身宿舍を温水暖房に改造し、前部が事務所となり、白タイトルの近代的事務所として、千代田通りに偉觀を呈するに至つた。

滿洲事變當時は現在の會計課の位置に僅か八名の社員たりし昔を追憶せば隔世の感なきを得ない。昭和十三年十四年は鐵鋼統制の一元化時代であり、自由經濟と統制經濟の過渡期とも謂へよう。原田商事の製造部門への關心が高調し、年末に撫順精機工場創設も緒についた。昭和十四年聖戰第三年を迎へ、五月には近衛内閣總辭職、平沼内閣成立とともに、全體主義的統制は愈々強化せられ、外貨資金の獲得は益々重點主義となつた。此の間に處して、大連本社と密密なる連絡をとり、エ社高速度鋼を始め、對米對伊の機械工具の輸入問題、千代田通店舗隣地約三六〇坪の買收問題、撫順精機資金統制認可、會社登記完了、内地機械の手當

等が重なる事項である。

昭和十五年皇紀二千六百年既に世界の動亂は勃發し世界を擧げて戦争の渦中にあり、經濟統制は漸次軌道化し、商事部門としても國策を十分認識し、以て新體制に合流すべき機運は濃厚となりつつあり、特に中間業者としては統制の本質又は眞隨を正確に把握することによつて、時代に即應するの商策がとられなければならぬ。

かくて鐵鋼は遂に完全に一元的統制となり、日滿商事の監督の下に、滿洲鋼材販賣組合が樹立せられ、原田組當初より切ても切れぬ商品はその手を離れる事になつた。更に撫順精機工業株式會社も建設に着工、商事部門の枝葉として、積極的に前進の歩を進むるに至つた。ついで昭和十六年新春を迎ふるや、日本法人原田商事ならびに、滿洲法人原田商事の機構人事の一大改革を斷行することになり、滿洲に於ては、大浦常務は奉天支店に、小川常務は新京に駐在、各支店出張所を統轄し、出口は撫順精機の常務として轉出することにより、新態勢を整ふるに至つた。

昭和十六年新機構下に強力なる發足をなしたのであるが、經濟界の状態は全く日に月に寧日なき移行をなし、國家に於ても又全く建國以來の國難に遭遇し、遂に十二月八日、米英に

對し乾坤一擲の大東亞戰の戦端は開かれ、世を擧げて全體主義の旗幟の下に、上下一致目的の完遂に邁進する事になり、更に第二段の商事部門の機構改革をなし、各位の有する精神力と體力とを傾けて、一意國家總力戰に、又原田商事の運営に突入する事になり、十二月機構の刷新と人事の更迭を斷行した。

かくて營業部門は一元化し、滿洲は新京駐在小川常務、内地は東京駐在の大浦常務が、夫々營業部長となり、奉天支店長として大連本社より田中宗雄來任するに至つた。

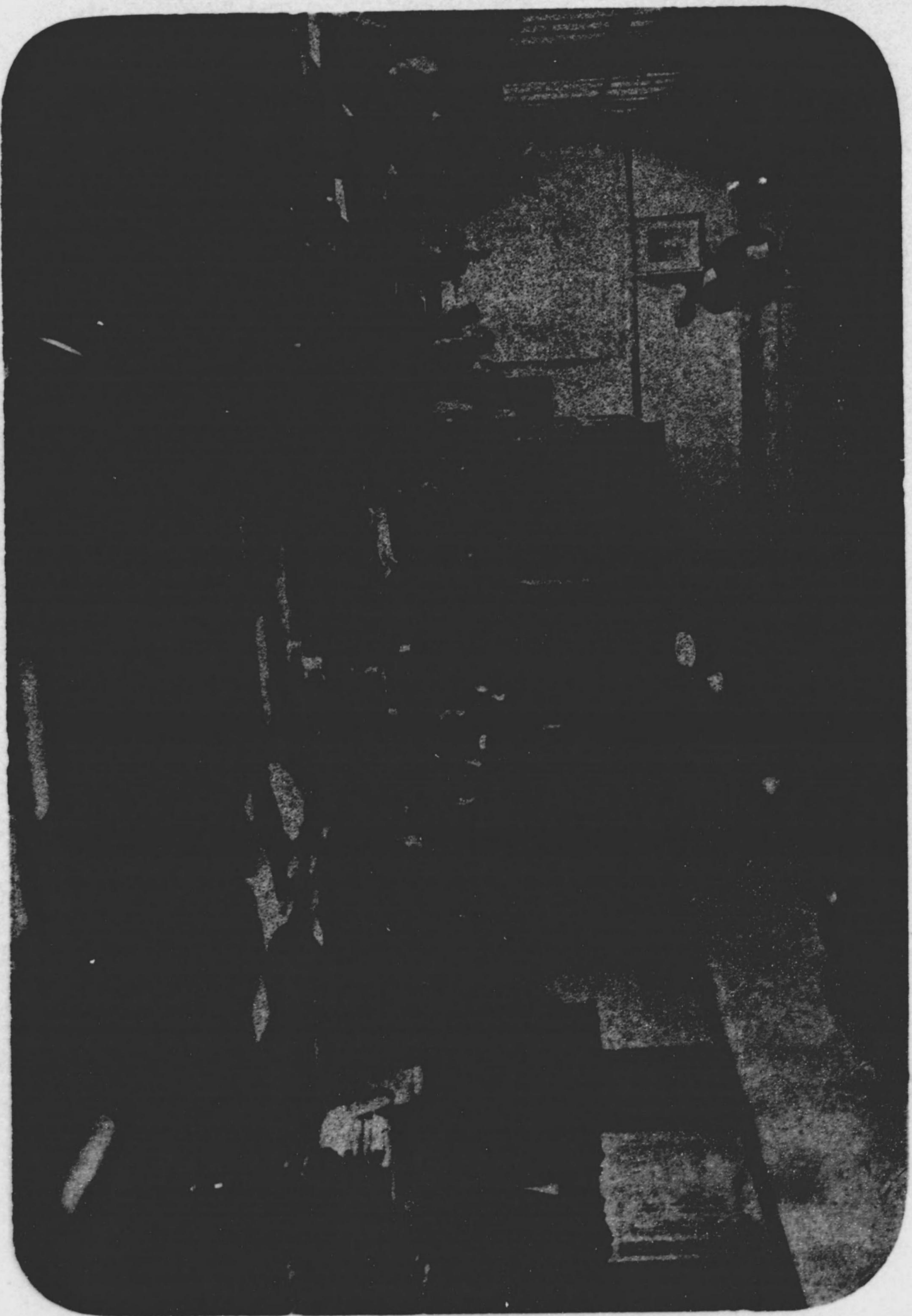
願れば奉天に打ち立てられた原田組の一出張所は、波瀾多き廿五年の歲月を閲し、今や田中支店長を核心として、従業員三十有餘を擁し、滿洲國主要物資の配給部門とし、國家理念の下に新局面に雄々しく歴史の進展に棹さしつつある。(完)

附記

史實の記録は、飽迄も「あるが儘の眞實」を、修飾普遍する處なく表現することが必要な事は謂ふまでもない。筆者の主觀が混入する事は避けねばならぬと思ふ。その意味から云つて、資料に依つて客觀的に記述し易い人に依頼すべきであるが、何分にも時日なく、十分に検討の餘裕なきため、編者の意圖

を付度することなく、多分に筆者の主観が打込まれて居ることは諒とせられたい。時日や數字に多少の相違があるであらうし、又努めて人的問題に觸れることを避けた積りであることも察知せられたい。今は既に退社せられて居るが、在任當時は一意専念勤勞せられた幾多の方々の奮闘努力に對しては何等記述してないが、筆者の主観が誤つてはとの想念のために、特に省略したことも併せて諒承せられんことを附記す。

(出口重雄記)



原田商事新京支店事務室の一部

第二章 新京支店史

序 言

原田商事が呱呱の聲を擧げて茲に四十年、社長御自らとしては固よりのこと、自分としても過去を顧み現状を観るとき、全く感無量といった三字が總てを盡くす思ひがする。實に荆棘多難な路を切り展いて、よくも今日に及んだと思ふ。挺身といふ言葉は前身原田組の名稱でもつて髣髴し得る。滿洲開拓の先驅であり今も尙ほ第一線の挺身をもつて本命とし、熱と力をもつて、職域奉公の至誠を献げつつある。原田氣魄はここにあると思ふ。

而も今や大東亞の舞臺は廣く、東に西に南に北に益々原田氣魄は熾烈に要請され、我々の前途愈々多望ならんとしてゐる。此の秋、四十周年の記念すべき慶事に遇ひ、この機會に新京支店を通じて、自分の所見を述べ得ることは誠に欣幸の至りである。

出張所時代

滿洲事變以前、其の當時長春と呼ばれた新京地方の營業は、大連本店の管轄下に置かれ、本店地方係の一部面として取扱はれ、得意先も吉長線路が唯一のものであつた。滿洲經濟界が、舊軍閥とその手先たる官商の手に委ねられ、不換紙幣の濫發、主要事業の獨占などから、我々の商品がたとへ良質安價であつても却々注文がとれず、従つて實績も頗る微々たるものであつた。

昭和六年九月滿洲事變突發、昭和七年三月滿洲國の生誕とともに、商業開發に關する大要綱が擧げられて、曩の舊弊は漸次匡正されて來たため、當社は其年十二月、已に新京と改稱された日本橋通りに初めて出張所を開設、一名の事務囑託を置き、大連本店の從來の取引先關係を圓滑に處理するとともに、牒報の役をもたせたのである。其後東二條通りに出張所を移轉、大連より正式に二名の係員を派遣することとなつて、調査並に情報蒐集機關としての連絡は強化された。大洋信行、鳥羽洋行の如き同業者は已に營業方面に主力を注いでゐたが、我社は尙ほ營業には觸れず、待機の姿勢を持續してゐた。

昭和十一年九月、新京のメインストリートたる大同大街に面する康德會館一階一室に出張

所を移すに及んで、新京は奉天支店の管轄に入り愈々營業に着手、官需局、滿炭を始め、その頃繁忙を極めた建築土木方面に積極的に働きかけ次第に地盤を築いた。吉林上水道が敷設されて、其のために駐在員を派したのもこの年である。昭和十二年九月新京出張所は奉天支店の管轄を脱して獨立、村上彦馬氏（現在大連本店支配人代理）が新京出張所長として赴任し、康德會館の事務室には、所長以下五名の陣容を擁し、業務は次第に向上し來つた。

昭和十二年を起點として、滿洲國の第一次産業五ヶ年計畫が始まり、從來の原始農業國より近代産業國への誘導に拍車をかけ、これに伴ふ巨大重工業の開發乃至建設に要する巨額な生産手段は、凡て對日輸入の依存に期待することを不可避となすに至つた。この政策遂行のため新京は事業計畫の中樞となり、特殊會社の相踵ぐ創設と共に、その本社は新京に集中される情勢となつた。此年、我社と最も關係深き日滿商事株式會社金屬部が、大連より新京へ引揚げを敢行し來り、新京の重要性は頓に高められた。

昭和十二年七月支那事變が勃發し、昭和十三年九月、先の五ヶ年計畫は更に擴充的修正を施され、戰時體制が一段と昂揚せられるに及び、滿洲國の生産資材入手は急激に増加し、滿洲國の輸入數字は昭和十二年度八億圓より、昭和十三年度十二億圓を現出するに至つた。

支店に昇格

斯くて昭和十三年一月、原田組は原田商事株式会社として飛躍體制を整へた後、前項の通り新京中心の時局に即應するため、昭和十四年新京重點の方針に出づることに決定、新京出張所を新京支店として昇格せしめ、支店長として不肖自分が就任する事となつた。依つて自分分は二月十五日大連本店より三名、奉天支店より一名の社員を伴ふて赴任、新京支店の人員は倍加して十名を算し、その四月學校卒業生三名を迎へて十三名となつた。

重任を負ふて赴任した自分は、此時ほど挺身の意義を痛切に感じたことはなかつた。それほど一意、我社の期待に添はんことを念ふて奔命したが、幸ひ業績は天の時、地の利を得たものか急速に上昇、昭和十三年度販賣額約九十萬圓であつたものに對し、昭和十四年度は一躍十倍の九百萬圓を突破するに至つた。

尤も此の昭和十四年度（我社の決算年度として昭和十四年九月より昭和十五年三月に至る）に於ては、修正五ヶ年計畫遂行を目的に、滿洲國の産業開發に對する熱意が最高潮に達した時期で、生産の擴充計畫の進捗に伴ふ特殊會社筋への資金放出は増大し、日本の滿洲に對す

る支持にも絶大なものがあつて、建設資材の流動は頗る活潑を極めた。滿洲炭礦、東邊道開發、滿洲電業、採金會社等は新京支店最大の得意先であつた。其他各社また擧つて資材獲得に汲々たるものあり、統制機構の不備から資材の著しき偏在が漸く表面化するに至つた。

昭和十四年九月歐洲戰亂が起り、國際情勢に重大なる變化を與へるに及んで、此機を境に資金統制強化を必要とするに至つた。昭和十五年一月資金統制に關する關係法令が改正實施され、同年四月頃から特殊會社の再検討に移り、各社在庫の資材調査が行はれた。

不急事業の停止、土木建築の全面的繰延べ、特殊會社筋に於ても金融壓縮から計畫上の蹉跌が生じ、註文の取消し繰替へなどの事態を現出し、昭和十五年一年間は各方面とも計畫の變更・事業の整理等に終始したが、その影響は當然我社の業績にも大きく反映した。

新京支店が本格的に軍方面に働きかけたのは、前述の如く特殊會社の再吟味が行はれ、購買力の激減を見るに至つたため生じた餘力を、從來から引合のあつた軍部方面へ振り向けることに起因したとも云はれ得よう。即ち昭和十五年秋頃から餘裕のできた人手を軍に差し出して折衝を進め、昭和十六年初頭から愈々實際的に、關東軍經理部を中心に、多忙な納入が行はれ始めたのである。

それ以後漸次その周囲の部隊にも連絡を廣め、新京支店として軍註重點の方針を樹立、軍の一定不動の策定に對應して奉仕の萬全を期すべく、一層緊密に提携し來つたため、今日その結晶を納めんとしてゐる次第である。

昭和十六年滿洲國は更に第二次五ヶ年計畫を實施することに決定、昭和十七年を初年度とする具體的な案を提示した。本計畫によれば、日滿支を打つて一丸とする一體の見地から、滿洲國の擔當すべき産業分野が明確にされ、産業の範圍については高度の重點主義が採られた。即ち石炭及び農産物の二つに最高重點が置かれ、これについて油料、鐵鋼、非鐵金屬等の重要産業に全力が注がれ、それ以外の諸産業は重點産業遂行のための附帶的要件としてのみ取上げられるが、本計畫と並行して生活必需品其他輕工業部門の維持育成を圖らんとしてゐる。

我社の職域對象も、自然その線に沿つて畫策集中する必要があるであらう。

如上、新京營業所開設以來、目まぐるしい時局の變轉に際會し、營業成績も自ら各期間毎に消長は免れ得なかつたけれども、銳角的急増を示してゐることは同慶の至りである。今後と雖もこのテンポを持続し得べしと信ずるものであるが、從來の商業的觀念は此際根抵から

拂拭し、新たな理念から出發せねばならない新時代に直面してゐることを銘記すべきであると思ふ。

昭和十六年十二月大東亞戰宣戰の詔勅を拜して、自分は一層急激にこの新理念を身内に感じたのである。今自分の踏み越え來つた自由主義商業時代から、計畫統制主義商業時代への移行を省み、將來に資する新理念を把握したい。

商業が自然的に發生し、それが自由に成長し、所謂商業といふ通念のまゝに機能を發揮し得られた時代では、個々の力量・勞務に對し、それ相當の利潤追求が正當視されたものであつたが、商業の國家を本體とする全體主義の立脚點から編出された配給機構の一階層となつた今日では、従前の商業の形式内容は全く一新せねばならない。我々は恰もこの變革期に遭遇し、現在尙ほ過渡期に直面してゐるので、現在は勿論、將來に亘り善處すべき方策の樹立を要求されてゐる。前項新理念の問題は之であるが、自分は以下暫く變革期に遭遇して過去を顧み回答を與へたいと思ふ。

先づ第一に我社の主たる營業品目たる鐵鋼部門が、國家建設の重要基礎資材である關係から、その自由商品性を失ひ去つたのである。鞍山製鐵所が本溪湖の骸炭を原料として、一噸

二十三圖といふ世界一安價な銑鐵の生産に成功し、昭和製鋼所と名稱が變つて後、昭和十年小型丸鋼が市場化されるに至つたが、當時は外國品を自由に輸入できたため、昭和製品の販賣には非常の努力を要したのである。滿鐵商事部は鐵材取扱の大手筋たる我々（進和商會、烟中商店、鳥羽洋行、大信洋行、原田組）に昭和製品の引受け販賣に當らしむることとなり我々前記五社は二七會と稱して一定建値により、昭和製品の賣捌きに盡力したものである。其の後、我が原田社長は宿志たる滿洲亞鉛鍍株式會社が設立されて、亞鉛鍍板が製品化され、昭和製鋼の薄鐵板の取扱ひが、二七會に加へられ、メンバーも増加したので、二七會の名稱は昭和會と變更された。

一方内地品に關しては、八幡製鐵所の生産過剰による大量ストックの鋼材處分のため、進和商會が三菱商事と結び、殘餘の四社（烟中・鳥羽・大信・原田）は鐵同志會と呼稱して三井物産と提携し、小食製鋼、釜石製鐵その他の鋼材製品（後には八幡製品も加はる）の滿洲國への輸入ならびに販賣に當つたものである。

第三國品は内地品の納期不確實なるに比し、納期の確實性から盛んに輸入が行はれ、我社としても三井物産を通じ四千噸を買付、ハンブルグ大連間一噸二十二志の船運賃を十八志に

引下げるべく、大連汽船に値引交渉を行つたことを覚えてゐる。

以上昭和十二年に至るまで、滿洲生産品、日本品、第三國品と鐵、鋼類は自由に入手され自己の採算で自由に販賣されたのであるが、各取扱店とも薄口錢でもつて販賣競争に鎔ぎを削つたものである。これはしかし滿洲國建設資材の供給に蔭ながら貢献したものと自負してゐる。

昭和十二年五月、滿洲國は重要産業統制法を制定發令し、産業發達の健全迅速を圖ることとなつたために、商業機構にも變革が現はれ初めた。昭和十一年十月、滿鐵を根幹に昭和製鋼の参加を見て、日滿商事株式會社が設立され、法令に基き鐵鋼類の統制に着手した。我々の在庫鐵鋼品の買上げを斷行し、昭和十三年鐵鋼類の輸出入統制令が布かれるに及んで、日滿商事が指定會社となつたために、永年老舗と經驗を恃んできた我々の自由販賣は完全に茲に停止符を打たれたのである。

日滿商事は、しかし配給施設を持たない一面の理由から、同社の配給下部機構として、我々に對し組合結成の慫慂をなし來つた。時勢の抗すべからざるを知り、我々業者は相集り、茲に鋼材組合といふ配給團體を創設したのである。昭和十四年第二期から、鋼材割當制が

布かれ、一定の口錢の下に、配給業務を擔當することとなり、商業の形式は多分に變化した。

瓦斯管に對しては瓦斯管組合、薄鐵板を統制するために平浪會、輕軌條に對しては輕軌條組合、釘・針金に對しては線材組合等が、殆ど相前後して生れ、凡て日滿商事の監督下に適正價格をもつて圓滑なる配給をなすを目的とした機關であるが、かゝる組合の叢立も昭和十五年十一月滿洲鋼材組合が、前身鋼材組合を擴大強化して設立されるに及んで、瓦斯管組合を除く前記凡ての組合は一括吸収統合されるに至つた。こゝに我々商社は普通鋼材は擧げてその取扱ひを返上、我社は鋼材組合に對して單に出資關係のみとなり今日に及んでゐる。永年扱ひ來つた商品の自然消滅である。

惟ふに非鐵金屬類、特殊鋼の全滿組合も近く結成されんとし、合金鐵も日滿商事の統制下にあり、土工具配給組合、カーバイト組合の設立などありて、益々商業形態は一變、半官半民濃厚なる手數料主義による配給機關となり終らんとしてゐる。

この計畫統制は、更に進んで鐵鋼ならびに非鐵金屬類の第二次製品にまで及ぼし、その徹底化を圖るべき意圖も看取し得る。

機械關係商品に於ける統制は、鐵鋼類より稍々遅れてゐるが、漸次整備の域に進みつつあるので、イニシヤチブを取つて、政府の統制方針に協力することが我々の使命となりつつある。

昭和十六年三月、切削工具類が滿洲工業組合中央會の發意により、從來の輸入業者を無視し除外して（一説には命令と言はれるも我々には納得の行かぬ點あり）貿易統制會第四條の指定輸入團體たる資格を取得すべく運動を起して、之に成功したる事實は、業者を刺戟するに役立つたことは確かであるが、業者側の無自覺だつたことも認められよう。其の轍を繰り返さざるやう、中央會關係以外の、一般工具類の統制團體結成のため我社も委員となり、目下成案を急ぎつゝある。

機械類に關しても、需要者協會が獨自の見解の下に、代理店排撃、直接購買を主眼に貿易統制會第四條の指定を受けんとしたる事實がもれ、中央會並に滿洲機械輸入組合の蹶起によつて、政府當局も一考する所となり、需要者協會の申請を一應却下し、中央會、輸入組合、協會の三者合體したる滿洲機器輸入組合の設立を新たに勸説されたるため、目下その設立案作製に邁進中である。

革ベルト及び工業用皮革に對しては、滿洲工業用皮革統制組合、電氣機器配給統制協會、農機具には滿洲農機具輸入組合が既に現存し、その他の部門に亘つても、早晚全面的に統制團體の出現を見ることゝならう。

結 語

以上、結論として、時代の要求は絶対に國家を本體とする全體主義の埒外に踏み出す自由を許さないことになつて來たのである。統制國策が設定される毎に、我々の取扱ひ得る自由商品の範圍は減少して行き、現在已に皆無に近く、出資金は要請され、低率なる口錢の一定化を甘受せねばならず、それに加へて、發註許可制による輸入量の制限、七・二五の價格停止令があるなど、完全に商業の自由主義は昔日の夢と化して、痕跡も止めぬ現狀となつたのである。一面この憂鬱とも見るべき現狀を打開するためには、此際一步を先んじ、此の統制經濟の鐵環中にあつて、國家への協力奉公を唯一の目標として、第一線の挺身主義を實際に實行せんと決意するとき、我々の活動範圍はたとへかゝる實情に直面してゐても、尙ほ廣く

且つ深いものを認識し得られよう。舊式利潤追及の觀念を捨て、國策の線に従つて職域奉公の誠を致し、國家と共に榮えるべき方途こそ、我々の新理念であらうと信ずる。大東亞戰は未だ緒戦といふべく、日本國家隆替を堵する重大時機に際會してゐる今日、有終の戰果あらしむべく、一億一心を要請されてゐる今日、我々商業人の決意も、自ら明白であると信ずるのである。

最後に滿洲國は過去十年間に於けるが如き、日本依存が繼續さるべきでないことは既定の事實で、日本は大東亞の日本として重要地位に進むべき責務を持つため、滿洲國はそれ自體の自給自足の政策を確立することゝならう。現在已に物動關係、輸送關係、現地適用主義等から、對日依存の稀薄性を如實に見せられてゐる。松花江水力電氣、鴨綠江ダム完成の曉は動力資源の豊富なる供給によつて、滿洲に於ける産業開發は急速に實現し、滿洲國の大東亞へ與へる地位は高められよう。

南方への關心は高いが、北邊の護りも亦之に比肩すべき重要性を有してゐる。南方發展への度が高まれば高まるほど、滿洲國の有する石炭、鐵鋼、農産物の増産は益々不可缺の事業である。従つて新京中心の政策は益々昂揚されよう。我社の新京重點方針と、營業新理念に

よる輝やかしきスタートは、我社四十周年記念を境として茲に切られる。

(小川邦雄記)



(上) 京橋區八丁堀時代の東京支店



(下) 現在の原田商事東京支店事務室の一部

第三章 東京支店十八年史

大正十四年九月と言ふと、震災の餘燼漸く收つて、復興の氣天に満ち、帝都一圓に建設の鎚音高き頃である。

その帝都の中心地銀座の一角に、原田組東京支店が最初の足跡を印し、狭い八坪の事務室に豪華な調度を並べ立て、無窮への歴史の一步が初まつた。

そろ／＼國産品擡頭の氣運に乗つて、いち早く軍は舶來品を排撃し、先づ國産の旗幟を掲げ、長らく墮眠を貪ぼりつゝ巨利を欲しいままにせる外國商社も、バックカードに深々と納まつて葉巻の紫煙高々と吹き上げる事も許さなくなつたのである。然も又一面、大戦の慘禍に取残されて、日の出の勢の日本目ざした歐米の有力なる同業者との競争渦中にも捲き込まれ彼等自らをしてこゝに出直しを餘儀なくせられしもの尠からず、エドガーアレン株式会社も時代の敗者として、この岐路に逢着した。しかしその歴史は長く、品質も亦優秀であり定評

もあるをもつて、原田社長は敢然この業務を繼承し、こゝに原田商事の前身原田組東京支店が創立されたのである。

時に大正十四年九月一日、震災に後れること二年、東京市京橋區銀座二ノ十五、間口二間・奥行四間の小屋がその生立ちの全貌であつた。その當時、陸軍造兵廠に提出せるエドガー・アレン株式會社總代理店認可願書に添附提出せる營業調査表には、原料仕入先として、馬尼刺が加はつてゐるのも、既に當時我が南方への道を開きつゝありし象として面白い。

納品の正確、納期の確實なるは、滿洲に於て既に定評あるものの如く、南滿鐵道より以上の件にて賞状を受けし如くにも記載いたしあり、尙信用欄に「大連及滿洲地方にて第一流なり、日本内地にて營業日尙淺きため一般に未だ知られず」と、認めて居るもゆかしく當時を偲びて感慨深きものがある。

當時の良き得意先たりし横濱ドッグ、沖電氣等の註文を取次いだり、時折は中島飛行機あたりからの御小言も聞いたであらう。初代の電話銀座七三五四番は其後轉々として、現在東北興業株式會社にて使用の由。

京橋區八丁堀に移轉したのは、昭和二年九月で、七年の秋丸ノ内に轉進するまで、丸々五

ヶ年、帝都の所謂鐵屋街で斯の道への磨きをかけたのである。不況のドン底の時で、重工業などといふ言葉もまだ耳慣れぬ機械工業の搖籃時代で、そのやうな時世に際會しての事ゆゑ、もちろん華々しい業績を残したとは云へぬが、然し乍らこの苦難の時代を乗り越えて來た店の鍊成が、謂はば一つの風格になり、鐵鋼商としての立派な基を礎いた事は争はれぬ事實である。鋼屋らしくなつたのも、鋼屋としての原田組を當地で認められて來たのも、鋼屋の技術を覚えて來たのも、恐らくこの當時の五六年が與つて力あつたものと思ふ。

しかし有形の業績は誠に微々たるもので、長谷川・宇野兩支店長等の努力にも不拘、日々に衰退の道を辿り、遂に昭和七年秋十月、社長の斷に依り機構形態の改訂を見るに至つたのである。

誕生初代支店長清水氏は、これに先立つて大阪支店より東京に轉動し、東京詰として勤務中を社命に依りこの多難な前途を敢受し、しかも業績日々に上り、功成り名遂げて昭和十三年三月現在の東北特殊鋼株式會社常務に轉出されるまで、約五六年間陣頭主義を標榜して、自ら得意先の開拓に、仕入の交渉に、又は新しき企畫にと、大童の活動をなされた。

従來の鋼材一本建の弊を避けて、滿洲原田に於けるが如く、多角的經營の意圖の下に、日

本熱鍊、椿本チエイン、小島鐵工所等々新商品の取扱にも全力を注いだ。日本熱鍊の代理に關しては次の如き話がある。熱鍊工業の所長は斯界に名も高き工博高橋源助氏で、氏は典型的技術家肌の方のために、所謂商賣のための掛引や策を好まず、當初代理權云々の交渉をせる場合も殆んど興無きが如く、更に考慮さるゝ模様もなきため、清水支店長は當時としては莫大なる五千封度の發註をなし、一先づ商權を獲得して、こゝに背水の陣をしいたのである。今日でこそ五千封度と言へば大口需要家の數日にも當らぬ數量かも知れぬが、海のものとも山のものとも解らぬ商品に對し、しかも機構の改革に依り資金の極度に縮少せられた折にあたつて、この決を敢てせしは、氏の當時の滿々たる闘志をも窺ひ得て趣き深きものがある。今日斯業の東日本一帯に亘りて、絶對の地歩を打ち立てし基は、この一事にありし事を思ひて、氏の感慨又別なるものがあると思ふ。

原田組東京支店が商會社の形態をなして來たのもこの頃からで、八丁堀で鋼屋の腕を磨き、ビジネスセンターの丸ノ内で、所謂お店としての殻を脱して會社形態へ移行し、鋼から出發した東京支店が漸次多角的經營への進路を辿つた。

東京市麴町區丸ノ内三ノ二 三菱廿一號館 震災に焼け残つた丸ノ内最初の貸ビル、ヨ

タ／＼のエレベーターに苔むす赤煉瓦ではあるけれども、爾來星霜こゝに十ヶ年、日と共に愛着の念深く、五階から四階、四階もまた別室へと移轉擴張への變化はあれど、將來我々自らの建物でも建てざる限り、この屋根の下に愈々永く榮えたきものと念願してゐる。

エドガー當時以來、鋼種の多岐に亘りたるを、この丸ノ内移轉を契機として、専ら高速度鋼及び不収縮鋼の二種目に重點を置き、金色のスタグメジョアや、綠色のK-9を振りかざして邁進したものである。輸入杜絶以來既に四年、苦蟲を潰した様な現場技術家も、S・Mの略稱で未だに遠き日を偲ばれること尠からず、一片の金色の切れ端に限りなき愛著を示さるゝ方も見受けられる。

K-9の原田か、原田のK-9かと言はれたくらゐK-9も一世を風靡し、裏町の長屋工場にさへK-9の名は喧傳されたものである。其他銀色の超特鹿、黄色の特鹿、赤色の力等々、自由經濟當初の花形として押し廻つた。

それより少しく遅れて、K-6不収縮鋼が鮮かに登場し、宣傳と時機の宜しきと得て、見／＼その販路を弘め、K-9と兩々相俟つて無敵の猛進振りを發揮して來た。K-6はスエーデンの産で、初め某社にて輸入せるも需要殆んど無く、徒らに倉庫の塵をかぶつて、無

聊の日を送つて居たらしい。

その頃昭和十一、二年シヨール製鋼會社のファレット鋼が、想像外の廉價でK-9の市場に迫り、侮り難き勢に策を講じつゝあつた折柄として、何條この良品を見逃すべき。清水支店長は早速某社と協約して該品の一手販賣を契約し、その名もK-6と改め、K-9の姉妹品として堂々こゝに、鶴翼の陣を張り、斯界の王座を目ざして進撃の途上、爲替管理の障害に逢着したのである。昭和十三年六月、事實上我々の外國依存はこゝに斷絶され、再び我々は新しき途の發見に努めた。清水支店長が折柄創立中の東北特殊鋼へ轉出されたのは、この再轉換期の昭和十三年三月のことである。

想へば此の時代は、東京支店十八年の歴史にあつて、再建・中興の期とも申すべく、閉鎖の運命に置かれつゝあつた東京支店は、滿々たる霸氣を以つて、自ら鋼を切り、鋼を負つて此の難局の打開に努め、陣容を整備し、機構を改革し、併せて斬新なる企畫を立案し、上下一體火の玉となつて精勵したものである。

八丁堀時代に鋼屋の修業をした東京支店は、こゝに到つて舊套を脱した新しき近代商社として出發するに至つた。爲替管理に依り輸入困難にはなつたが、軍の證明等により許可を得

て暫くは輸入が爲された。が然し、これとても昭和十四年の夏枯れを終りとして、大正十四年以來繼續せるエ社との關係は、日米交戦に先立つ事二年、こゝに斷絶を見るに至つた。

輸入は杜絶したとは云へ、昭和十二年の末期頃、先を見越して手配せる品物が相當の入荷をみ、尤も最後の物は遂に内地に揚陸不可能にて大連に揚陸したが、このストックを最も有効に利用する途として、必然的に切削工具の製作販賣へと進んだ。

清水支店長に代つて、見須龍夫氏が大阪支店より、東京支店長として赴任されてからは、重なる扱商品は鋼材から工具へと移行したのである。昭和十三、四年及十五年の前半とは、軍需産業部門においては、直接たると間接たるとを問はず、大企業と小企業との差別なく未曾有の殷盛を極め、擴張につぐに擴張、新設に次ぐに新設と、お蔭で經驗淺き工具ではあつたがこの新部面への轉換を完了した。

見須支店長は當時、現在は如何にして品物を買ふか、又いかにして品物を賣らぬか、さういふ變態時代だ。と話して居られたが、事實、品を手に入れることは既に利益を得た事であり、賣らねば賣らぬだけ値の出た時代であつた。しかし斯くの如き變態時代が永續するものではなく、十四年の末期から現在の統制經濟時代へと急速に轉回して行つた。

昭和も十一、二年頃までは、街に圓タクが氾濫したが、ガソリンはいつか、アルコール入りとなり、圓タクの影も漸く少くなり出し、羊毛が、木綿が、革がと騒がれ出して、十四年九月、九・一八物價停止令の發令をみ、續いて同年末、我々の特殊鋼も全面的の統制を適用せらるゝに至つたのである。一方工具も相次いで公定價格の決定をみ、十六年の末、大東亞戰の勃發迄には我々の身も固り、我々の關係商品の總てが、この統制の網中へ包含されて、毎日の官報と首引きで、急激に此の潮流へ押されて行つた。

十二、三年の商賣繁昌のあの華やかなりし時代から、十五六年へかけての目まぐるしい急變にさほどの不安も焦燥もなく、しかも最も我々の關係事業の困難なる今日、日に増し月に榮えつゝあるは、一に國家興隆の御陰と萬謝せねばならぬ。

想へば東京支店も、遠き滿洲事變は除いても、支那事變以來この僅かの社員の内から、我々は我々の兵隊を五人戰線へ送つてゐる。しかも岡崎喜郎君は北滿において活躍中不幸病塵に侵され、昭和十六年八月三日陣中に戰病死されたのである。全原田最初の尊い犠牲者を我々の仲間から出したこの光榮に、東京支店一同は涙の中に感謝し、昭和十六年十一月十日同君の百日忌に際し、社葬をもつて靈を弔つた。

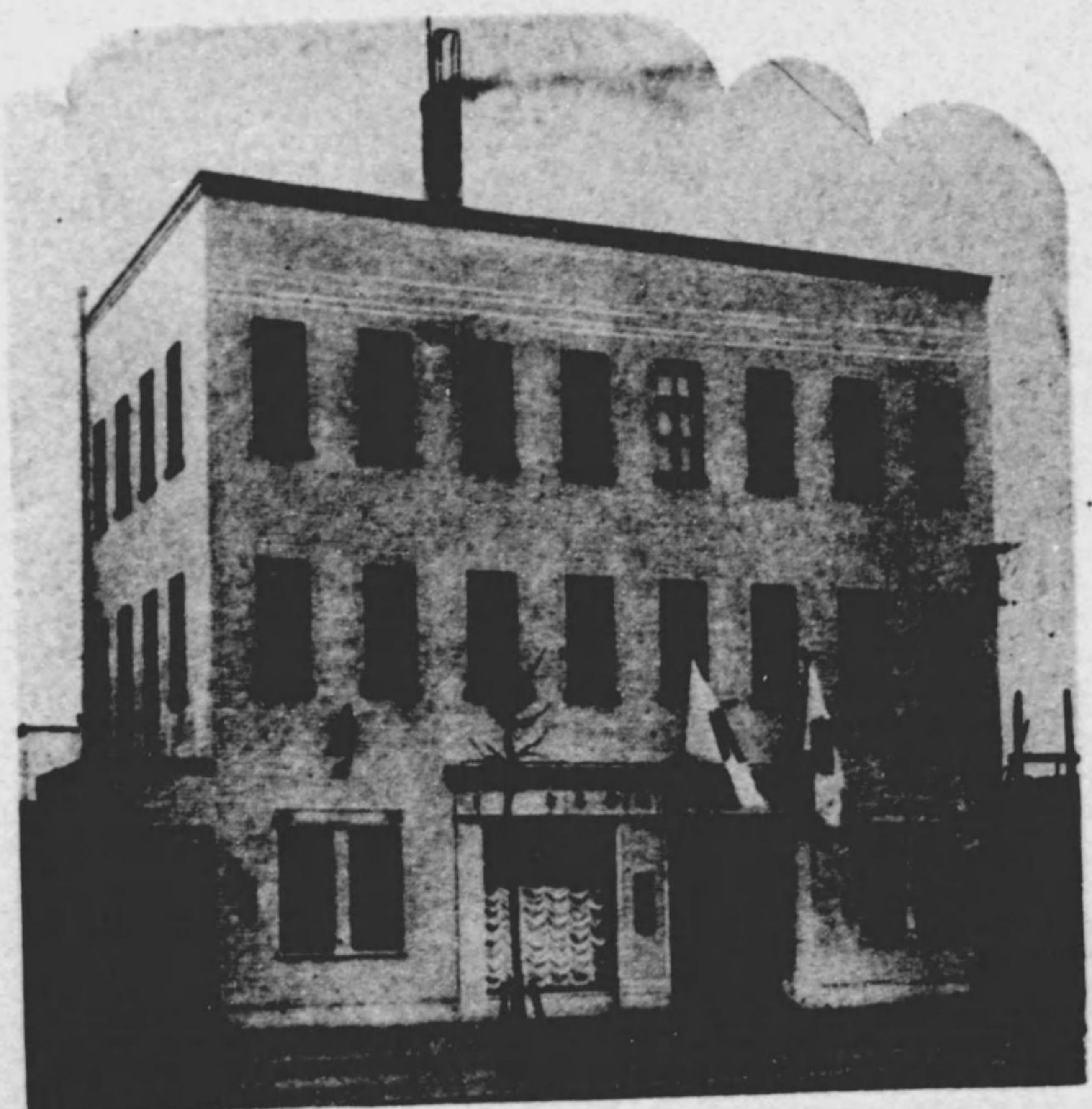
しかもこの年頭一月八日には、昭和十三年三月以來、慈父の如き溫情を以て全員を導かれた見須支店長の急逝に逢ひ、周章措く能はず、寄り所なき悲嘆のドン底につき落された思ひに閉された。見須支店長が就任の約三ヶ年間は、謂はば最も東京支店自體の事業の比較的容易なる時代で、爲に氏は専ら餘力を日滿の連絡に意を用ひられた。從來東京の滿洲係は一、二名の係員が然も兼任で處理したものである。それが昭和十三年頃から滿洲五ヶ年計畫の遂行につれ、對日期待の急激なる膨脹に伴つて、東京滿洲係の業務もまた急増し、その重要性を増加して來た。

昭和十四年には詳さに滿洲を視察して、原田の日滿一體化を痛感し、早速滿洲係の強化に努め、一支店の事業を離れて、所謂全體の爲に盡瘁されたのである。

見須支店長の逝去の後、一時前支店長清水東北特殊鋼常務が社長に代つて業務を見られ、追つて二月末、現大阪支店長西村新五郎氏の就任を見た。氏の東京在勤は僅かに半歳有餘にして、未だその經綸の總てを發揮するに至らずして大阪へ轉ぜられしものゝ、この最も經營困難なる時に際會して、尙未曾有の功績を收められしは、氏の手腕の一端を窺ひ得て充分である。

回顧すれば東京支店も、大正十四年銀座裏に間口二間の店を構へてより爾來約十八年、時に不振の過程を辿りし事あるも、今日丸ノ内の一角に五十坪の事務所を構へ、三〇の人員を擁して、光榮ある原田商事の帝都駐在として、その潑刺たる存在を誇りつゝある。而して愈々重要性を増大しつゝある北邊の産業基地を背後に据ゑ、更に原田直系事業の雄、東北特殊鋼とその地を接し、然も聖都の中心に位して、二十年に近き歴史を有する東京支店が、名實共に全原田の中核と成る日を待望して筆を擱く。

(砂川武夫記)



(上) 現在の原田商事大阪支店社屋



(下) 立賣堀時代の大阪支店社屋

第四章 大阪支店史

大阪支店が、本格的に營業を開始し、支店としての實體的機能を有するに至つたのは、大正十四年九月一日であつて、この日こそ激刺たる大阪支店の歴史が創造された日である。

しかし、より嚴密に言へば、大阪支店の活動的母胎はもつと過去に求められなければならぬ。すなはち、滿洲に本據を有する原田組が、其の扱商品の給源地である日本内地——殊に大阪に連絡機關を設置すべきことは必然的要求であつて、明治三十九年既に出張所の開設を見てゐる。従つてその本質的機能が、調査ならびに仕入にあつた事は謂ふまでもなく、「回覽簿」大正八年十一月二十八日付に左の事務分掌が見えてゐる。

大阪支店各係業務擔任左ノ通り分掌ス

會計、庶務係	主任	砂	員	助	手
調査、仕入係		牧野	鶴保	伊奈	
受領、發送係		兒玉		石田	

右の記事に見る如く、出張所として出發した連絡機關は、大正八年頃には既に支店となり大正九年三月二十三日には大阪市西區立賣堀南通五丁目十二番地（西二橋南詰西入）に移轉した。然し乍ら是は單なる仕入店としての機能を持たせてゐたのに過ぎなかつたので、大正十二年には情勢上一時閉鎖するに及んだ。

然るに帝都大震災の直後、原田組に於て、英國エドガー・アレン製鋼會社の日本に於ける事業を繼承するやうになつたので（第一篇第三章第四節参照）前記の如く大正十四年九月一日付を以て、東京と共に大阪にも支店を開設し、エ社の特殊鋼ならびに工具製品の販賣に従事することとなつた。茲に大阪支店は、日本内地に於ける本格的營業を開始すると共に、滿洲に對する仕入其の他の連絡事務をも強化且つ軌道化せしむるに至つたのである。同年十月十日付の回覽簿には、

左記ノ處へ支店ヲ設置シ本日ヨリ執務ス

大阪支店 大阪市西區立賣堀北通六丁目二十番地

東京支店 東京市麹町區八重洲町二丁目一番地

と記載されてゐる。

支店設立當初の陣容は、現滿洲法人原田商事常務取締役小川邦雄氏のほか、前記エドガー・アレン製鋼會社大阪支店主任島津寛章氏、現名古屋出張所長米田寛氏の外數氏に過ぎなかつたが、原田社長自ら陣頭に立ち、大阪・東京兩支店の經營に専念せられたので、逐次業績の向上發展を圖り得た。いまこれを「回覽簿」十二月一日付の記事に就いて見れば左の如くである。

大正十四年十二月一日

本日ヨリ支店事務分掌左ノ通り定ム

- 一、エドガー本社關係事務
 - 一、商品 仕入 事務
 - 一、地方 通信 事務
 - 一、地場 同業者 販賣
 - 一、諸官衙 大工場 販賣
 - 一、計畫 宣傳 事務
 - 一、販賣 一般 事務
 - 一、帳簿 ノ 一部
- 島津
- 長谷川

- 一、地場小口同業者及小工場販賣
 - 二、倉庫出入ノ監督
- 米 田

- 一、大連本店、奉天支店關係事務
 - 一、東京支店關係事務
 - 一、諸帳簿關係事務
- 大連本店出張員
小 川

以上ノ通り相定ムト雖モ現下無人ノ折柄ニ付キ互ニ相扶ケ以テ事務ノ敏活ヲ計ル事

大正十五年十二月二十五日 大正天皇崩御遊ばされ、世は御諒闇に鎖されて國民等しく痛哭したのであるが、昭和三年

今上陛下におかせられては、京都において御即位の大典を挙げ給ひ、國家の隆昌は旭日と共に彌榮となつた。

原田社長は支店開設以來、毎年初頭に新年告示を社員に示して、處生と事業に對する指針を明確にせられた。(第一篇參照)

由來、大阪支店の日本に於ける地位と業績とは、逐日確立せられるに及び、人事方面においても漸次擴充され、小川邦雄氏(現滿洲法人原田商事常務取締役)は、昭和四年七月十二日付大連

本店人事機構の改革に従つて、大阪支店専任となり、昭和五年十月二十日には、原田惠伍氏(現原田商事專務取締役)が始めて大阪支店に勤務せられることとなつた。

此等人事の充實と共に、鋼の販賣のみならず、原田組の滿洲に於ける代理關係その他との連絡もまた一層濃厚となり、昭和六年五月十一日原田社長は、日本ポイント特約店主及び同社小畑社長一行二十數名を東導されて滿洲視察を爲されたが、この間、原田組において萬般の斡旋をなし、旅行目的遂行に萬遺憾なからしめた。

同年九月十八日滿洲事變が勃發し、大阪支店もまた衝動を受け、將來事業の推移に多難來るの印象を深からしめた。かくて原田社長は、昭和七年一月四日、新年告辭を全社員に寄せ、凡ゆる難關を克服すべきを要請し、「凡ソ希望アル所ニ榮光ハ輝ク、努力ノ存スル所期セズシテ成功ハ來ル」と、左の如く激勵された。

軍國ノ春昭和七年ヲ迎フルニアタリ、荒涼朔北ノ地ニ凜烈タル亟寒ト闘ヒ横戾兇惡ナル支那軍匪ヲ膺懲センガタメ車奔西驅スル皇軍將士ノ勞苦ヲ偲ビ、吾等ハ衷心感謝措ク能ハザルモノデアル。

滿洲ハ今回ノ軍事行動ヲ一轉機トシテ、舊軍閥ヲ掃蕩シ新國家ヲ建設シ、以テ永久ニ四民怡樂ノ新天地ヲ實現セシムルハ敢テ遠キ將來デハアルマイ。

吾々ハ其ノ事業ノ舞臺ヲ滿洲ニ有スル丈ケ、此ノ更生滿蒙ニ處スルノ道ヲ講ズルハ刻下ノ急務ト信ズル。

過去ノ財界ハ世界的不況トハ云へ、何レモ困憊ヲ極メ政府民業共ニ赤字缺損ノ聲ヲ聞クノミデアツタガ、將ニ來ラントスル景氣回復ニ備ヘ克ク堅忍持久セシモ、臘末政變ニ依リ金輸出再禁止トナリ、經濟界ハ茲ニ再轉スルノ不幸ヲ見ルニ至ツタ事ハ遺憾ノ極ミデアアル。世間説ヲナスモノハ再禁止ハ沈衰スル財界ニ活況ヲ來シ、輸出ノ増進トナリ、往年ノ好景氣ガ再現スル如ク強調スルモノアルモ、果シテ斯カル結果ヲ將來スルヤ否ヤハ明確ニ豫斷シ得ザルノミナラズ、却テ吾ガ財界ノ基礎ヲ危クスルモノトシテ吾等ハ大ニ戒心ヲ要スルモノデアアル。此ノ時ニアタリ滿蒙ノ天地ハ更新ノ氣漲リ吾人ノ到ラントスルヲ待ツアルモノノ如ク、吾等亦大ニ此ノ機運ニ乗ジ奮勵一番、業礎ヲ確乎ナラシメネバナラス。

想フニ何レノ時、何レノ業界モ唯ダ拱手漫然トシテ成功ヲ贏チ得ルモノニ非ズ。内ニアツテハ事業向上ノ組織的經營方法ヲ研究シ、經費ノ節約ヲ圖リ、外ニ對シテハ吾社ノ名聲ヲ宣揚シ、顧客ノ信用ヲ得、店頭常ニ躍動シ店員何レモ意氣揚々トシテ事ニ當ラバ、期セズシテ店務ノ發展ヲ將來シ得ルモノト信ズ。

幸ニシテ滿洲ノ天地ニハ、吾社三十年ノ經驗ヲ有ス、即チ既ニ地ノ利ヲ得タリ。時下滿蒙更生ノ今日、時ノ利ハ來レリ。此ノ上ハ人ノ和ヲ得テ以テ吾人ノ目的達成ニ努メタイ次第デアアル。

一致團結店內和氣論々々

常ニ新進ノ氣分ヲ以テ店務ヲ處理セン

小商店ト伍シテ職フハ經費ノ節約ヲ要ス

大商店ヲ敵トシテハ忠實ナル奉仕ヲ要ス

軍戰ノ後ハ吾等ノ商戰舞臺タルヲ自覺シ緊張事ニ當ラン。

以上ヲ目標トシテ昭和七年ヲシテ最モ有意義ナル一年タラシメヨ。凡ソ希望アル所ニ榮光ハ輝ク、努力ノ存スル所期

セズシテ成功ハ來ル。

原田組の事業は、滿洲事變を契機として、愈々多事多端を極むるに及んだが、その反面、原田社長は日本内地に常駐せられて居る爲め、その綜合經營上一段の強化を企圖して、昭和七年三月一日原田組本部が大阪支店内に設置せられるに至つた。三月一日付回覽簿によれば

「原田組本部規定」として

- 一、合名會社原田組ハ其事業統制及發展ノ爲メ原田組本部ヲ設ク
- 一、原田組本部ハ店主所在ノ大阪支店内ニ置ク
- 一、本部ハ本支店ノ監督及營業上ノ發展ニ關シ常ニ研究調査並ニ計畫實行ニ努ムルコト
- 一、本部ニ於テハ原田組本來ノ業務以外當會社定款ニ抵觸セザル範圍ニ於テ有望ナル見込アルモノニ對シテハ經營ヲ爲スコトヲ得(以下略)

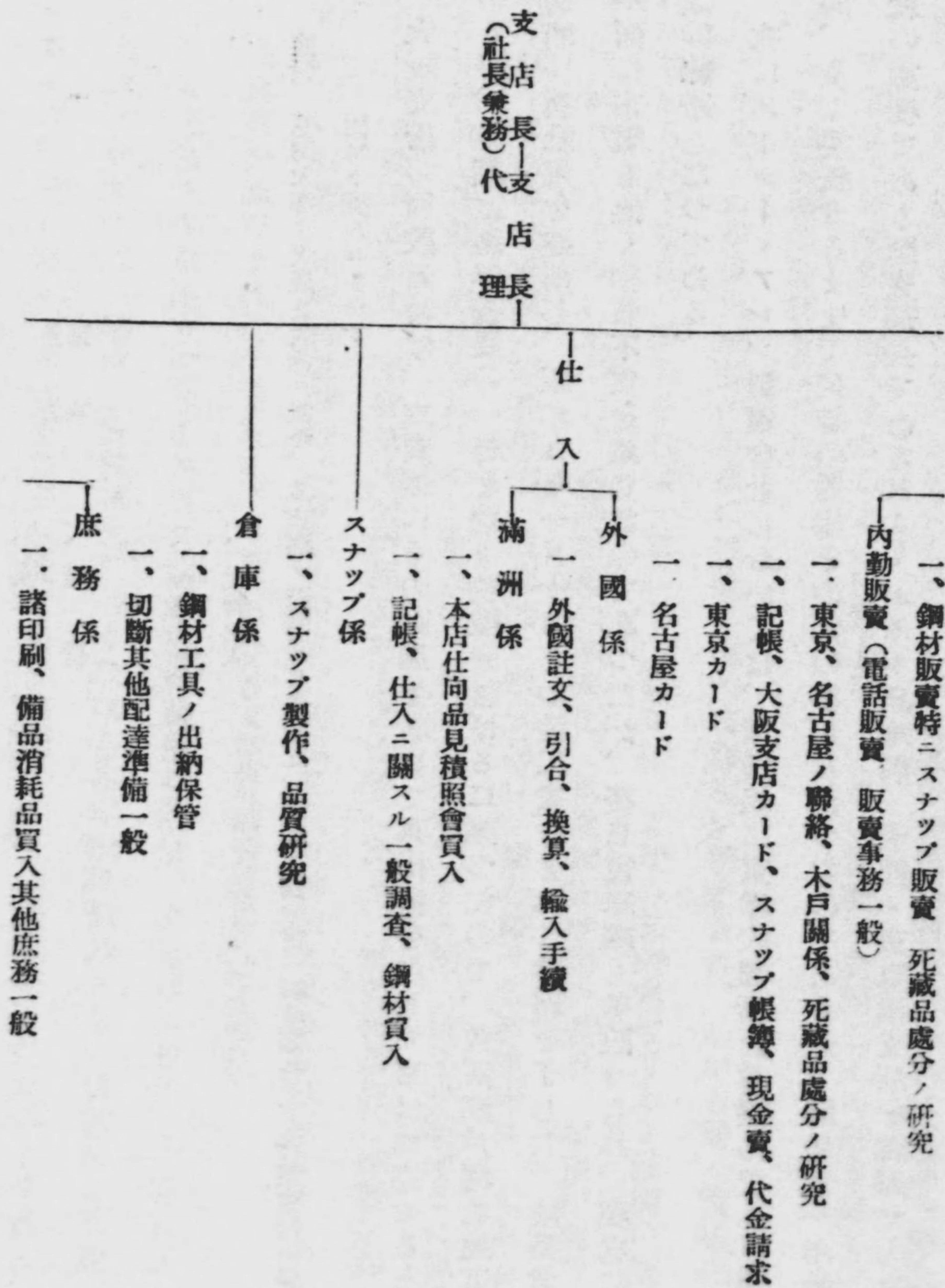
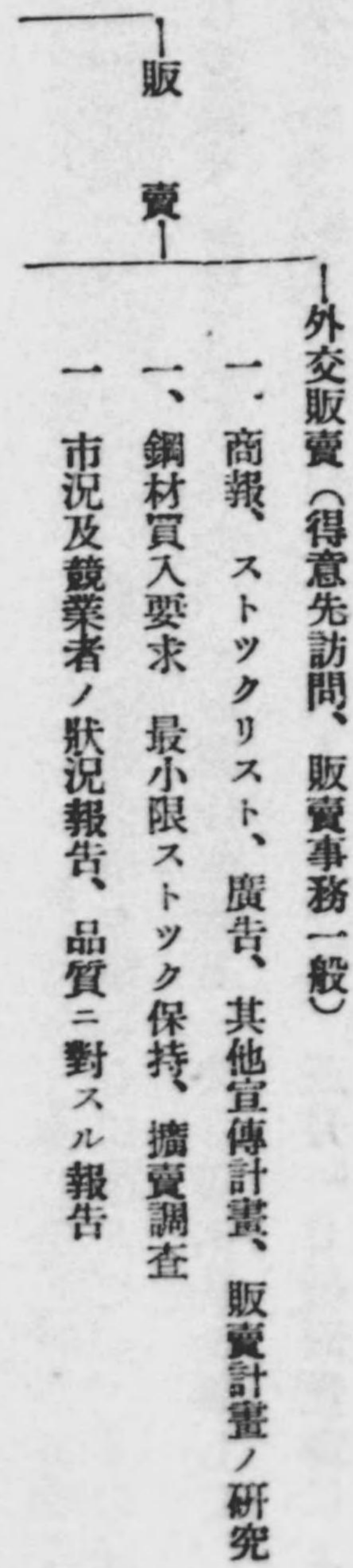
とあり、本部の分擔は左の如くであつた。

部 長	原 田 猪 八 郎
部長代理	原 田 惠 伍
囑 記	島 津 寛 章
部 員	滿洲係 齋 藤 利 助

かくて大阪支店内に原田組本部が設置され、原田社長が全面的統制をなされるに及び、大阪支店は頓に活氣を帯び、社員は各分野に果敢な商勢を張り業績は日一日と向上した。

昭和八年五月一日には、豊田俊文氏（元大阪支店長）が店員として、採用大阪支店勤務を命ぜられ、同年七月三日には原田恵伍氏が大阪支店より大連支配人として赴任せられた。（第一篇第三章第五節参照）

昭和九年四月には、「社長自ら大阪支店經營の任に衝り居り候が、原田組全般の業務繁激を來し加ふるに對外用務亦頗る多事となり、自然支店細大の職務を處理するに缺くる所多きに鑑み、今般支店長代理を設け支店長を補佐し、大阪支店一般の事務を經理せしむる事とせり。尙これに伴ひ大阪支店組織及事務分掌を定む。各位は所定の事務に精勵し支店業務の發展に努力せんことを希望す」との意圖の下に新職制が左の如く定められた。



會社
 庶務計
 一、英文タイプ、受信、應接
 一、發信

會計係

一、金錢出納、銀行關係
 一、元帳記入

追記 原田本部ヲ大阪支店內ニ置き、本支店ノ監督及ビ營業上ノ發展ニ關シ常ニ研究調査並ニ計畫實行ニ努ムルニハ從來ト變ルコトナシ

大阪支店の開設當時は、立賣堀にその社屋を求めて再出發をなした事は前述せるところであるが、業績は逐年發展の一路を辿り狹隘を告げるに至つたので、西區江戸堀北通五丁目の空地に新社屋を建築し、昭和九年一月十日その造工成ると共に移轉を了した。建築當時は前路面に市電も無く相當不便を感じたのであつたが、後日電車線も敷設せられ、現在に於いては幹線路となつてゐる。

次にエドガー・アレン製鋼會社においては、原田組に東洋代理權を委讓してより以來十年間、全く委任せるまほで何等の監察その他の事がなかつたのであるが、昭和十一年始めて同社の重役であり販賣部長であるH・D・ボイド氏來朝、大阪・東京兩支店を視察せしめて取引

上種々相互に協議するところがあつた。然し乍ら其の後國際關係の惡化は貿易上變調を來たし、英國より特殊鋼を輸入することは困難となり、この情勢に對應しての新方途をいかに解決するかは當面の急務となつた。

是より先、わが原田社長の肚裏には既に遠大な腹案が構想され、しかも着々實現化への交渉が進められてゐた。即ちそれは一言にして盡せば、工業の基礎素材である鐵鋼の對外依存性を拂拭せんとするにあつた。國際情勢の不安化、軍機械化整備の要望、切削材料である特殊鋼就中高級高速度鋼の需要増大、技術的に歐米品に一籌を輸せる現實等々、これら一聯の事象を凝視し靜觀し續けられてゐた社長は、愛國の熱情たぎる所、拱手傍觀するに忍びず、東北帝大總長本多博士、東北帝大金研所長村上博士等に諮り、特殊鋼製造の結願を起され、昭和十二年初春、東北特殊鋼株式會社を設立、同四月三日神武天皇祭の佳辰を卜し、長町工場の地鎮祭が執行されたのである。(第二篇第八章東北特殊鋼株式會社五年史參照)

この日大阪・東京兩支店ならびに名古屋出張所員一同は、名古屋に會集し、社長より東北特殊鋼株式會社設立の趣旨を披露された。すなはち多年配給機關として豊富なる經驗と知識とを有する商事社員が、本事業の國家的意義を認識し、その興隆發展に衷心より協力せんことを

とを希望され、一同また前途に多大の光明を認め、本事業達成に挺身せんことを誓つた。而してこの營業會議の後、一同は熱田神宮に詣でて同社將來の發展を祈願し、更にまた日本ラインに壯遊を試み犬山城趾を弔ふて、記念すべきこの日を祝福した。

かくて大阪支店は開設以來十八年、斯界に商權を擴大し、飛躍的な業績を示しつつ一路發展し續けて來たが、我々は更に商事會社に課せられたる國家的使命に勇躍進發せんことを、大阪支店員一同深く期してゐる次第である。

(大浦徳身記)

第五章 名古屋出張所史

創設とその發展過程

名古屋出張所の開設は大正十五年八月一日に始る。原田組に於てはシエフィールド市エドガー・アレン會社の日本及滿洲總代理店として再出發以來中京名古屋が持つ特殊性に着目、こゝに新販路を開拓すべく企圖されたのである。當時中部代理店として佐橋鋼店に委託すべきか、ワシノ商店にお願ひすべきか多少の論議があつたのであるが、大阪支店販賣主任たりし長谷川慶二郎氏の盡力により、その友人犬俣氏を介して岡谷商店名古屋機械部に委託することに決定した。ところが當時の岡谷商店機械部には、鋼に對する經驗者が居らず「一、二年指導ならびに援助のため經驗者の來援を願ひ度し」との機械部長吉橋金平氏の希望と依頼があつたので、原田社長の命を承け、私が駐在することになった。従つて私の仕事は同商店

名古屋機械部内に事務所を設け、専ら宣傳と應援を爲すにあつて、代理店主體は岡谷商店であつたが、實質的には我々が活動の中核をなして居た。といふのは、當時大阪支店の販賣構成員は、前記長谷川氏と私との兩人で、長谷川氏は専ら大工場方面に進出、私は中小工場及商店方面を擔當してゐた關係上、名古屋に常駐することを許されぬ事情にあつたから、最初の一年は、大阪に半月、名古屋に半月といふ具合に、大阪・名古屋間を去來し、兩方面における同時的活動を餘儀なくされてゐた。然るに私の名古屋不在中は營業成績低下の觀があり、常駐を要請されるに至つて、遂に昭和二年八月一日、多くの意圖と、身に餘る責任を双肩に擔ひつゝ、社長の指令を受けて名古屋に常駐することになった。

當時は全くの不況時代で、大工場であつても高速度鋼の使用は僅少であり、一ヶ月一〇〇圓以上を消化する工場は殆んど絶無であつた。従つて名古屋關係の賣上はそれほど多くはなかつたが、これは一面、當時の名古屋が平和産業中心であり、高級特殊鋼の需要を多く必要としなかつたことにも起因する。即ち名古屋を中心として、北は瀬戸、多治見、土岐津、瑞浪等中央沿線の諸都市、南は常滑、四日市等の地域は陶磁器の産地として、夙に全國的に名を馳せ、名古屋西方の一宮、津島、奥、起等所謂尾西一帯の地域は毛織工業の一大中心地

であり、更に綿織物業に至つては大阪地方と共に雙璧をなしてゐた。かくの如く、陶磁器、毛織物、綿織物の如き平和産業が壓倒的優勢を占めてゐた。事變前の名古屋工業界に、高速度鋼の需要が僅少であつたことはまた歇むを得ないことでもあつた。

然るに支那事變の勃發並にその擴大後は、國際情勢の變化に伴ひ、右の平和産業が直接間接收縮される反面、時局の要請に應じて、軍需産業は勃然として隆盛の機運を迎へた。元來當地方には航空機を筆頭とする軍需工場が從來より存在してゐたが、これらの工場は敷地を擴張し或は分工場を設ける等、製造能力の伸暢に極力意を用ふると共に、時計、紡織、機械自轉車、工作機械、金屬工業等在來の工場のうち軍需工場に轉換するものが多く、更に名古屋を中心放射線上に位置する豊川、舉母、各務ヶ原、桑名、四日市の衛星都市に巨大軍需産業が新設され、從來の平和工業都的色彩を脱却して、新興軍需工業都市と化するに至り、我々の賣上高も飛躍的に増大した。

かくして營業成績は日を遂ふて遞増したが、政府の爲替管理が施行せられて以來、輸入は杜絶し注文辭退に困る時代となつた。反面、岡谷商店に對する代理販賣も自然消滅の形となり、その駐在の意味も解消したため、圓滿談合の上、離脱するに至つた。而して昭和十四年

十一月一日、大阪支店名古屋出張所として新生し、専ら國產特殊鋼、精密諸工具、諸機械の販賣に従事することになった。

名古屋出張所を開設した當時は、大阪支店より石橋直美氏の應援を得て三名といふ陣容であつたが、大阪支店各位の指導と援助を以て、毎年逐次飛躍的に賣上を増大し、昭和十六年十二月一日、原田社長の名に依り、大阪支店から分離して獨立經營を許される事になり、所員一同、日夜奮闘を爲しつゝある。

現況と將來

名古屋出張所の營業成績は名古屋工業界の發展と共に飛躍することは論を俟たない。此の意味に於て、名古屋工業界の趨勢を一應のべたい。

名古屋市に於ける注目すべき現象は、重工業の内容が多少變化を來し、金屬工業の急激な躍進にある。從來本市に於ける機械工業は相當程度の發達を見てゐたが、その根幹をなす金屬工業に於ては徹々たるもので、多年その發展が要望されてゐた。蓋し高度の性能と精巧さを要求する精密機械の製造に當つては、先づ以てそれに耐へ得る素材の供給が確保されねば

ならぬからである。近來輕金屬、特殊鋼の大工場が、或は擴張され、或は新設され、その規模は漸次増大し重點主義の徹底に伴ひ一段と促進されつゝある。昭和十四年現在の職工五人以上の工場統計を見るに、工場總數六、一六六。金屬工場數七四三。百分比一二%。機械器具工場數一、六八三。百分比二七%。化學工業一八七。百分比三%となつて居り、重工業は昭和十六年度に至り益々旺盛となり、年を逐ふに隨つて重工業都市としての名古屋の性格は一段と強化されつゝある。

かく觀てくるとき、名古屋出張所の存在意義は一層加重される事になると思ふ。現在當所の重なる顧客先は

トヨタ自動車工業株式會社、豊和重工業株式會社、大隈鐵工所、豊田工機株式會社、矢作水力株式會社工業部、大阪機械製作所名古屋工場、藤田製作所、愛三工業株式會社、東京芝浦電氣株式會社三重工場、名機製作所、松川鐵工所、平岩鐵工所、特殊輕合金株式會社等々であるが、將來陣容整備の暁は

愛知時計電機株式會社、住友金屬名古屋輕合金製作所、日本車輛株式會社、大同製鋼株式會社、三菱航空機、三菱發動機、三菱電機名古屋製作所、神戸製鋼所名古屋工場

等々に一路販路を擴張すべく、現在その準備を進めつゝある。

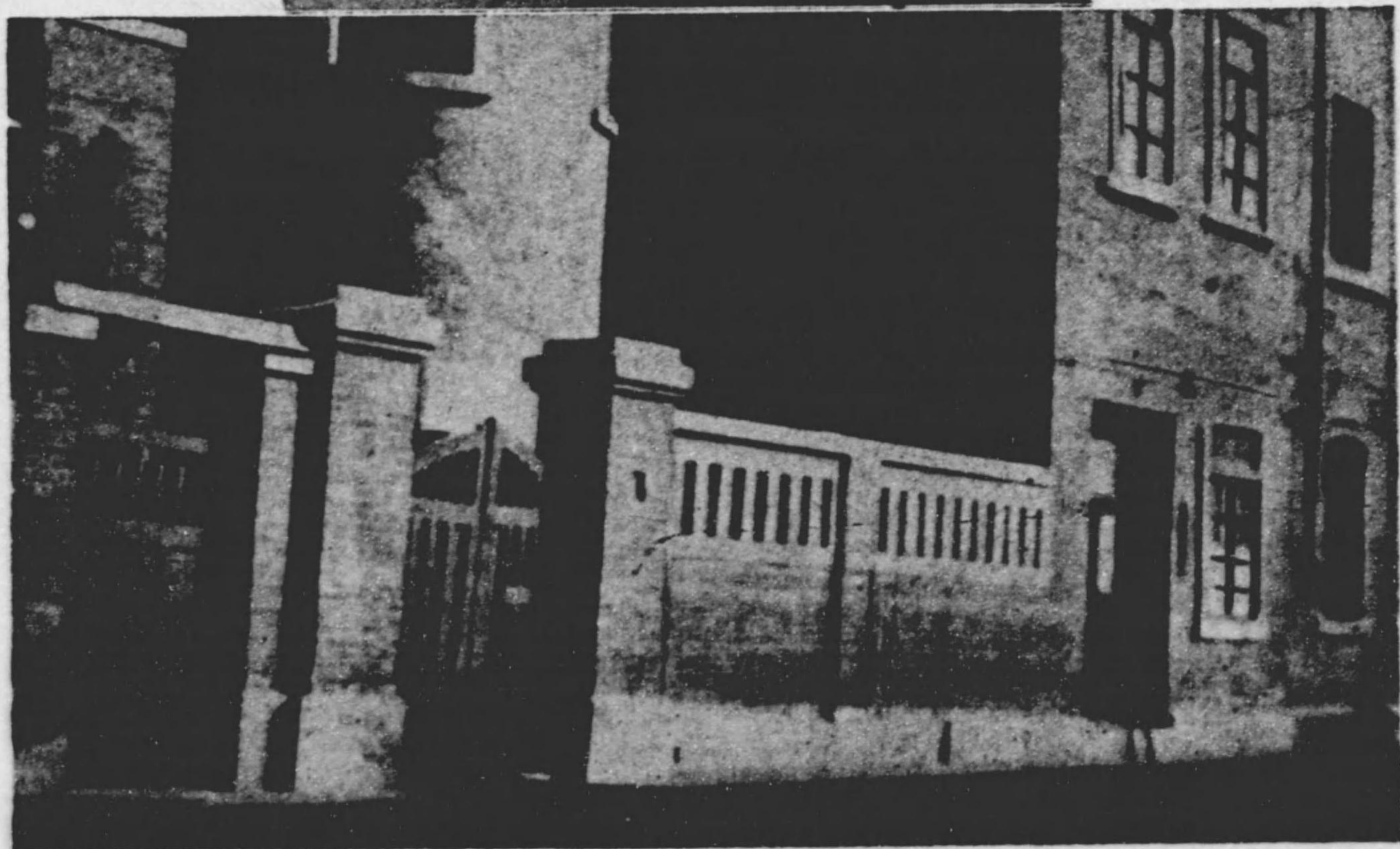
當所の營業品目中、特殊鋼は諸種の事情により次第に賣上が減少してゐることはやむを得ないが、これをカバーすべく、精密工具の賣上は飛躍的に向上して居り、所員一同は、名古屋支店昇格の目標の下に、營々として販路の開拓に努力精進してゐる次第である。

(米田寛記)

(上) 北京出張所の一部



(下) 原田商事天津出張所



第六章 北支營業所史

一、編 成

昭和十七年四月一日現在

北支營業所長

大塚 平八郎

天津出張所主任(兼)

大塚 平八郎

同 所員

河本 潔美

同

田中 集

同

高岡 弘平

同

西岡 敏介

同

八木 敏介

同

韓 茂堂

同

史 世行

第六章 北支營業所史

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
劉	劉	劉	劉	劉	劉	劉	劉	劉	劉	劉	劉	劉	劉	劉	劉	劉	劉	劉	劉	劉	劉
漢	炳	炳	炳	炳	炳	炳	炳	炳	炳	炳	炳	炳	炳	炳	炳	炳	炳	炳	炳	炳	炳
正	坤	坤	坤	坤	坤	坤	坤	坤	坤	坤	坤	坤	坤	坤	坤	坤	坤	坤	坤	坤	坤

二、沿革

昭和十五年度

五月十二日 開設準備委員として大塚平八郎以下四名天津到着

五月十四日 劉漢正雜用係に採用

六月一日 天津特別三區二緯路四號に天津出張所開設
大塚平八郎同所主任を命ぜらる

七月四日 天津出張所營業許可下附

八月一日 北京外二區南新華街七號に北京出張所開設
大塚平八郎同所主任兼務を命ぜられ石田與三治を連絡員に派遣

九月一日 韓茂堂を天津華商掛に採用。張蔚英を天津淨書係に採用。
北京出張所營業許可下附

昭和十六年度

十二月一日 天津日本租界須磨街十九番地に天津出張所を移轉

四月一日 紀英芳、史世衍、華商掛助手に採用

六月一日 北京内一區東裱褙胡同六四號に北京出張所を移轉。紀英芳北京華商掛として北京勤務

六月十日 李大興北京雜用係として採用

- 六月二十五日 高岡弘平天津出張所勤務を命ぜられ大連より到着
六月二十八日 吉廣孝志北京出張所勤務を命ぜられ大連より到着
七月十五日 天津淨書掛張蔚英退職
九月一日 八木キン天津會計兼淨書掛として採用
九月十日 西岡敏介天津勤務として採用

昭和十七年度

- 二月一日 王茵芳北京淨書掛に採用
三月一日 天津北京兩出張所を綜合北支營業所と呼稱に決定さる
大塚平八郎北支營業所長兼天津出張所主任を命ぜられ、吉廣弘志北京出張所主任を命ぜらる

三月二十一日 河本潔美非役を解き天津出張所勤務を命ぜられ着津

四月一日 西岡和夫北京出張所勤務として派遣

三、業界

皇紀二千六百年世界的非常時に直面して何れの土地に於ても、曾て見なかつた大規模な變

動を齎したが、わけでも北支の經濟變革は他に劣らぬものがあつた。即ち自由經濟が統制經濟へと加速度に變つたことである。元來北支は、對上海貿易を主體に歐米依存マーケットで物價は舊法幣の對外價値に因り上下してゐる。蔣介石の打續く敗戦に、法幣は暴落に暴落を續け、物價は鰻登りに高騰する。戦争には敗けたが、物價の暴騰で商賣人は巨利を占めてゐる。經濟挑戰を含む露骨な敵對行爲に、天津では英佛租界が封鎖隔絶、物々しいバリケートが張られて居る。これが出張所開設當時の状態であつた。

しかし、何時までも自由思想におかれる筈がない。最大の禍根は通商貿易にあつた様だ。當局では、インフレ防止に、統制への變革に凡ゆる手段が講ぜられた。主だつたものを列記して見よう。

- 五月十五日 聯銀券以外の通貨使用禁止廢令
五月二十日 日本人の渡支制限發令
六月十五日 新規營業許可申請受付停止
天津輸入配給組合結成準備開始
六月二十日 英佛租界隔絶解除

六月二十八日 第三國品輸入許可制發令

銀行貸出制限發令

十一月 商品別に依る五十有餘の組合結成さる

今にして考ゆれば、天津開設當時は、自由經濟の最高潮時であり又、終末時であつた。

近くは、十二月八日の御詔勅に、外地にある吾人の感激はひとしほだつた。迅風の皇軍の英權益接收に、天津英租界も支配下に入り、租界内は虱つぶしに物資の調査を了し、三月二十九日の國府還都紀念日を期して、中國側へ移還された。長年の癌も切開せられ、茲に明朗北支が建設さるゝことになつた。

四、天津出張所

北支では、先づ天津を基礎に、業務を開始した當時、大塚・田中・西岡・石田の四名だつた。業界は悪化を辿るのみ。不便な場所に電話がない。最初の出張所（特三區）は苦闘そのものだつた。此間部隊の御用に専念した。現在機械工具では第一人者と認められるのは、當時努力の賜だ。九月には、本店に永年勤続の韓茂堂を採用して華商方面との連絡が圓滑になつた。

十二月一日に、日本租界現事務所に移轉、地の利を得て、地場取引が活潑となつた。所員一同の努力にて、逐次需要家の販路を開拓して、十六年六月には大連より高岡の轉勤、九月に西岡、八木兩名採用、小規模乍ら陣容が整つた。華人を除き、全員出張所に起居を共にし和氣靄々裡に社業に勵んでゐる。

現在の主要取引

一四〇〇部隊、一八〇九部隊、一八一四部隊、華北鹽業、華北車輛、塘沽新港、開灤炭礦、長城炭礦、各化學工廠、紡績製紙工場、土建業者、一般華商

五、北京出張所

昭和十五年七月七日、北京花壇を假事務所として、開設準備に取りかゝつた一週間後、五十嵐組事務所の一部を借り受け、諸準備を進め、八月一日開設の運びとなつた。人員の関係で石田一名連絡員に置いた。人一人、机一つ北京の苦闘時代は約一ヶ年續いた。翌年六月現事務所に移轉して、大連より吉廣着任、天津より華人二名派遣、こゝに出張所はやゝ形づき諸炭鑛始め、各需要家の増加に努め、着々成果を収めつゝある本年四月、天津より西岡を派遣して出張所の擴充を圖り、北京の將來は期して俟つべきものがある。華人を含む全員二棟

の社屋に起居し愉快なる日常を社業に精勵してゐる。

現在の主要取引先

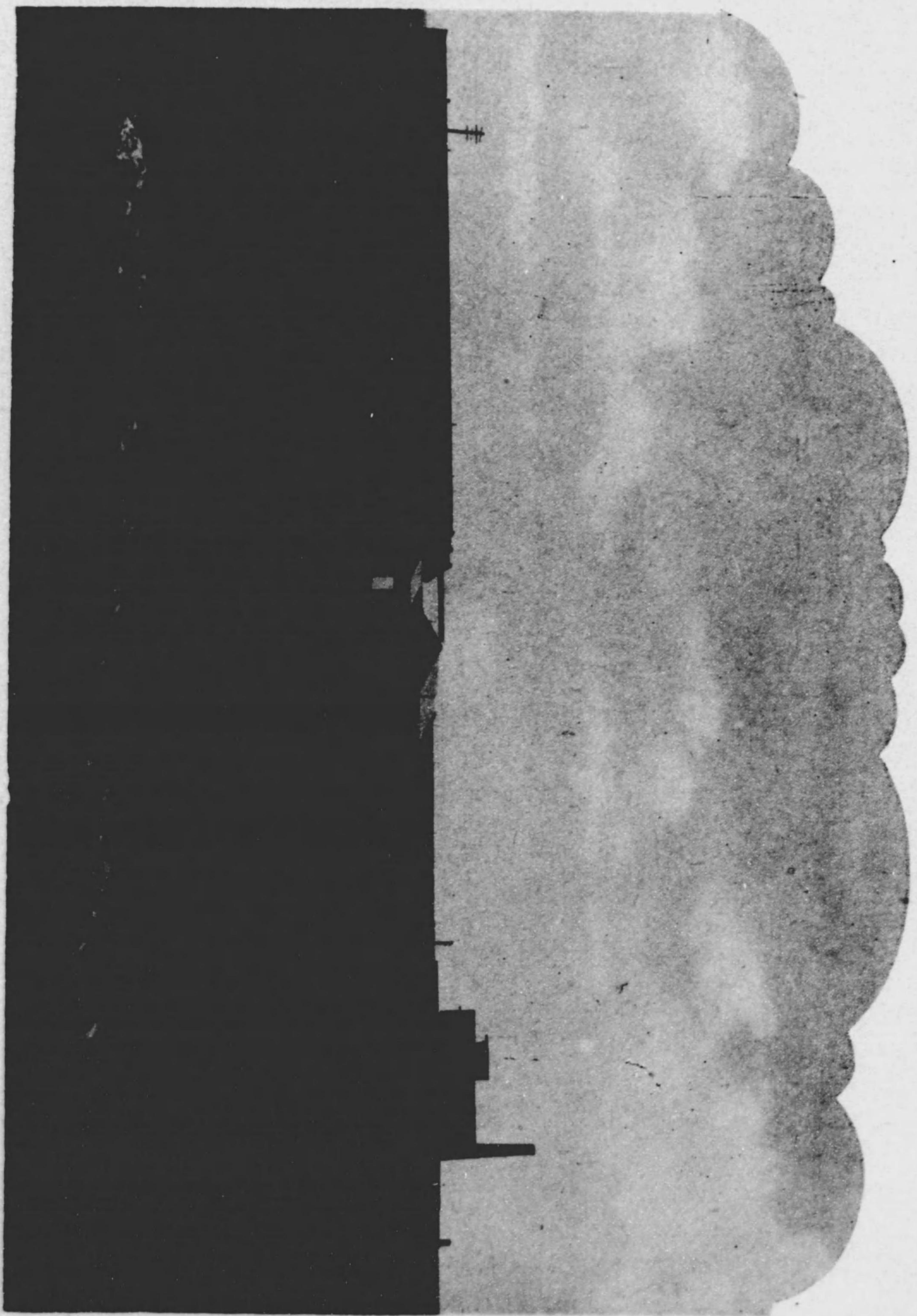
華北交通、華北電業、華北車輛、華北重石礦業、井陘、焦作、滋縣、柳泉、大綏口、門頭溝各炭礦、石景山製鐵所、土建業者

六、北支の將來

一面戰爭、一面建設の土地柄、資源開發は未だ序幕と言はねばならぬ。共榮圈内資源を考へても北支の積極的開發増産は必須である。炭礦鑛山の開發に伴ひ電力の増強運輸の完璧、即ち港灣施設の擴張等は必至で、此後益々此方面へ重點を指向して、當社の業績を向上させ度い。

華北交通では、北京―昭南間の急行列車を計畫して居る。何でも三晝夜以内らしい。原田商事の前進基地として、又南進基地として吾等の責務は重い。四十周年を機會に開設時の苦闘を想起して、戦ひはこれからの感を新にする。そして五十年史には、北支全域に中南支に、或は更に南に輝やかしい足蹟を載せ度い。

(大塚平八郎記)



燕順精機工業株式會社工場全景

第七章 撫順精機工業株式會社史

獨逸クルツプ工場の創始者アルフレッド・クルツプが、西曆一八七三年二月工場繼承後二十五年エツセンにおいて手記する言葉は、工場人として誠に味ふ可きものがある。冒頭に之を掲ぐる事もあながち無意味ならずと信ず。

今を去る五十年の昔、元一職工の住居なりし此のさゝやかなる一棟の家屋は、余の兩親の避難所であつた。願くば吾が工場建設の我等の廿有五年の永きに亘り成功のほども疑はれしかど、過ぎにし困苦、缺乏、努力、信頼、忍耐は遂に驚嘆すべき程徐々に酬らられた。此の教訓が苦境に喘ぐ諸々の人を力づけ又はいふせき住居への尊敬と、彼等の中に屢々見受けられる大いなる苦難への同情を増さしめ給はんとを。

労働の目的は公共の福利なれ

然らば労働は神の祝福を受けむ

實に労働は祈禱なれ。』

クルツブの今日の大をなせるは、實に廿有五年の建設の基礎の下に樹立せられ、過去の歴史を偲ぶ縁にもと近代的高樓工場建築は創始時代の慥き一職工の住居の傍に、一抹の奇異なる對照を示して樹てられたものである。

撫順精機工業株式會社は、斯の如き光榮ある歴史を將來の語り草に又よき追憶の糧とすべく、今その沿革を、記念すべき母胎原田商事株式會社四十周年史に記録するは意義深き事と言はねばならない。

誠に勞働の目的は國家の福利なれ、大東亞戰爭の高邁にして雄大なる理念は、更に世紀的な目標の下に着々進行しつゝある。滿洲國の成長と共に、原田組は原田商事に發展し、日露戰塵尙立ちこめる直後に植付けられた若き實は、今や亭々として壯年期に入り不惑の年を迎へ、撫順精機工業は此の幹によつて逞しく成長せんとしつゝある。

昭和十二年支那事變の勃發は、滿洲事變後の高度國防に更に一段と拍車を掛け、滿洲國內重要物資の開発は急激なる増産を要望せらるゝに至り、之に伴ふ機械金屬工業又躍進の一途を辿り、經濟界は全く夜を日に繼いで新體制に置き換へられんとして、滿洲國々内の自給自足の必需性は、日本ならびに第三國のみに依存するを以て足れりとせず、無より有への邁進

をしたのである。

滿洲法人原田商事株式會社は、過去に於ける取扱商品を検討し、滿洲國內に於て國策に沿ひ、有意義なる製造部門を樹立し、以て此の未曾有の變換期に幾多の犠牲と種々の地理的條件を克服し、滿洲機械工業界の一端に其の責任を果さんとしたのである。昭和十二年には、既に仙台に於て東北特殊鋼は遠大なる計畫の下にその基礎を固め、前途洋々たる旗幟を鮮明し軍需工場として約束づけられつゝあつた。滿洲國內においては、東北特殊鋼素材に關連性を有する事業について、豫ねて原田社長の命題であり、更に進んで工業原料を國內に求め、いはゆる純國産品として將來價值ある事業の設立もまた眞剣な課題であつた。第一次産業五ヶ年計畫は澎湃として進展して、各種事業は拱手傍觀、無爲に惰性を追つて現況に甘んずる如きは許されざる處にして、製造部門への清歛は眞に焦眉の急務であつた。

時に、撫順の地は曾て原田社長が同志と圖つて撫順鐵工所を建設し、炭礦の開発に寄與せる所なり。當時の工場敷地は、彼の露天掘の採炭區域内に在りて、いまは跡方も無くなりつつあるも、當時の優秀なる機械の一部は、現在炭礦機械工場内に存置せられつゝある因縁深き思ひ出の地であり、年産數億圓の幾多の重工業製品を産出する撫順は滿洲屈指の工業地帯

である。

滿洲輕金屬のアルミニウムを主體とする輕工業、日下式海綿鐵を母胎とする特殊鋼メーカー、滿鐵傍系撫順製鐵工場素材に關連性を有する工業は、當時の二大懸案であつた。斯くて位置は撫順に決定、電力、石炭、又勞働力吸収に於ても、奉天鐵西の工場地帯よりも遙に好條件の天賦の域を得、愈々前途洋々なるは言ふ迄もない。滿洲國內に於ける精密工業、特に機械金屬工業に不可分の關係を有する切削工具類の製造部門は皆無であり、全面的に他に依存する分野たること、而も兵器、自動車、航空、車輛工業には、極めて主要性を有する事業たるに鑑み、未開の扉を穿つ事業に、四つに組むことの雄渾さに、眞の妙味があり逞しさがある。たゞ、當時の關東軍第四課長沼少佐は、滿洲精密工具の將來に就いて、深く思ひを致され、撫順製鐵工場の特殊鋼製産を更に一步を進め、工具製造の必需性を屢々言及さるゝに至り、結論として、切削工具製作と斷定せられた。

滿洲は資源の國であり、資源を開發して日本に送り「精密工業は日本に於て」の論もありと雖も、敢て試金石たることも、永き將來の歴史に貴き貢獻を爲す事と云ひ得る。

昭和十三年十二月二十一日は、現在の原田専務に依り、撫順精密工業株式會社と命名せられ

た。切削工具ならびに之に附隨する精密加工が定款に定められ、その範圍は極めて廣義にして事業の持つ將來性は誠に遠大である。土地と名稱、事業の方針は確定し、具體的實行に一路邁進する。

二十八日師走の滿洲は白雪皚々、峻烈な寒氣が襲來した。工場設定の曉、撫順製鐵工場から産出する特殊鋼の全面的供給と、工業敷地の分讓のため、計畫目論見書並びに敷地分讓願を當時の撫順炭鑛長久保孚氏に提出した。かくて本事業の緒戦の幕は切つて落された。

越えて昭和十四年一月八日の事業開始の當日、新京滿洲國政府經濟部に對し、事業設立の認可願を提出したのである。

當時滿洲國政府に於ては、建國の意氣に燃える若き事務官は、熾烈なる國策を論じ、潑刺として春光を受け、大地が蠢動するか之感を受け、渺たる輕工業の設立に對するが如き印象付けられたる事は偽らざる感想である。

然し乍ら、經濟部内に於ては、滿洲機械工業界の指導は到底總括的分掌にては企畫し得ざる處にして、機械工業科の機構が設立せらるゝ直前にて、技術を擔當する技佐よりの内容検討、資金の方は中央銀行資金統制科の査定を得、兩者相俟つて認可の形態を取つたのである。

ドリルやカッターの型録を持參、性態の説明や、機械工業は如何に必需性を有するか、などと全く専門外の銀行當事者に詳述、之が認識を得て貰つた事などは、今日より見れば誠に微苦笑を覺ゆる。

幸にして二月十六日附を以て資金統制法第壹百五拾八條を以て、資本金壹百萬圓の會社設立の認可書の交附を受け、四月二十七日には奉天區法院に於て登記號番六七二號を以て一切の登記を完了、滿洲工具製造分野の先鞭を着けるに至りたるも、愈々實行に移す事になると幾多の難關に逢着、冒頭掲ぐる處のクルツプの所謂驚嘆すべきほど徐々の過程を辿るに至つたのである。

各種統制は其の緒につくと雖も、幾多の部門に於て急激なる需要供給の不均衡は物資の暴騰を將來し、又資材の合理的確保は多大の日月を要する處となり、自由經濟當時の如く工場建設の方針は容許せらるゝ範圍に於て、漸進的步調を以てしては、到底國家の要望する國策の一翼を擔當し得ず、當初よりその要望の計畫經濟の圏内に職域を果すが如き能力の整備を必要とするは、最大の緊急事である。

機械設備は重要部門を、當時原田商事に於て盟邦伊太利のバスキノ・ガツテ等のマシンツ

ールを、バッテリーにて滿洲國內に輸入すべく計畫中なりしため、之を充當し、一部を日本内地より輸入すべく畫策、工場建築の研究並びに機械手當のために、日本内地に當事者を派遣せしも、各製造業者は晝夜兼行量的に奔走するも尨大なる註文の輻輳は、之が入手至難にして、而も納入期間の長期に亘るはもちろん特殊機械の新造は難事中の難にして、滿洲に於ける滿人労働工員の技術能力を補ふ唯一の方法たる單一行程機械の獲得は、砂中に寶石を求むるの感ありしも、取敢へず必需の諸機械を契約、一方大連谷口建築事務所谷口素録氏の手により、工場及附帯建築の設計を爲さしむる事になつた。

他方滿洲國政府に於かれては、漸くこの種工業の重要性を認むるに立ち到りしも、當初より生産分野の確定、素材メーカーの一貫作業等の理想案により、事業の内容を再検討する事となり、確たる方針の樹立又時日を藉すに到つた。統制計畫經濟に於て根定なき事業は、一寸先は暗である。尠くとも國家に意義付けられるに非ざれば、假令一時を糊塗するも永遠の活路は見出し得ざることとは言を俟たぬ。政府當局に鼎の輕重を問はるゝ事は實際根元より事業的銳鋒をそがれる事となる。これ實に受難と荆棘の時期であつた。

昭和十五年五月、撫順炭礦より分譲を受けた二萬坪の工場敷地に、思ひ切つた地鎮の清鍬

を、工事施行者細川組員に依つて打ち下したのである。撫順の工場地帯は撫順市街の西方に位し、大官屯、瓢兒屯、柰石寨を連ねる奉撫滿鐵線に沿ひ、帶狀に撫順セメント、石炭液化、製油工場、滿洲輕金屬、製鐵工場と翼を接して、龐大なる生産の火花を世紀の偉觀として、敢闘しつゝある。吾が工場は製鐵工場西隣接地帯に位し、瓢兒屯驛より徒歩にて南西約五分間、奉天より撫順に向ふ鐵道線より指呼の内に望見せられる。線路反對側は、撫順都市計畫用地を控へ、拾年計畫二千五百萬圓の巨費を投じて、新興都市計畫を樹立し、豪華な理想都市の建設へ驀進しつゝある。工場建築は、昭和十五年末に外郭工事を終了し、二階建鐵筋コンクリート事務所延坪七〇〇米坪、材料製品倉庫四〇〇米坪、工場一六〇〇平方坪、其他守衛室、滿人工員宿舍は宏大なる敷地内に建築せられた。

對日期待の機器類の發註統制が布告せられ、日本内地發註中の諸機械類は政府の認可を要するに至り、建築と並行に機械設備の設置は不可能となりたる爲め、之が對策として緊急に政府當局に要望した。

滿洲における冬期建設は、十一月より三月の解氷期迄は基礎工事も危険であつて、既入手機械は一部旋盤類に止まるも、荏苒時日を経過せしむる事は、四圍の情勢より徒に工場の進

展性に對する認識を缺くの怖れあるを以て、昭和十六年一月四日内地より先發の三名の技術者は機械工場の基礎工事に着手した。同月は滿洲の酷寒中最高の冷凍季であるため、零下十數度、地下三尺餘を氷結し、掘方を始めて、下打コンクリート迄は絶対に溫度を保持せしめねば、折角のコンクリート加工は直に凍結し、解氷季ともなれば大事な基礎に歪曲を生ぜしめるため、僅少の人間を動員して、約五日間連續交代で、地面の保温をなさねばならぬ状態であつた。

また電燈はおろか、電話も瓦斯水道の必需設備が未設であつて、僅か二十八臺の旋盤の据付にも一片のスクラップ、一本の釘鉋にいたるまで、意の儘に速急に間に合はず、二月十一日の紀元節の佳日をトして、旋盤のみは試運轉する意氣込みだったが、上述の理由のため豫期に反し、可成の日時を要したのである。外部的には在滿軍部方面からも、工場の實態調査があり、一部製品の引合もあつたが、如何ともなす能はず、一方政府當局においては、漸く滿洲工具界の重要性を認識し、經濟部鳥谷機械工業科長ならびに王技佐の奉天出張を期して工具組合結成を計畫される氣運になつた。

かくて内地手當中の諸機械は、漸く三月三十一日附をもつて交附せられ、待望の輸入手續

を原田商事に依頼すると共に、技術者並びに經理事務係員は、事務所の一室に籠城し、漸次入荷する機械の整備に、煩瑣な業務遂行に附隨する一切の障害を突破して、眞摯敢闘した。

四月には全滿機械聯合組合の傘下に、全滿工具製造工業組合が五社を以て創設せられ、遽に前途に光明を認むるに至つた。全滿機械聯合會は、滿洲機械工業中央會の麾下にある部内別組合の形態をとり、工具製造業者も、切削工具、鑪、チツブド・バイト砥石の四種別とし、我社は切削工具製造専門メーカーとして指定さるるに至つた。

而して素材配給、製品配給、價格統制等の件は、政府の意圖する規正に従ひ、中央會において統制機構の編成をなし、以て滿洲工具業界の自給自足の庶幾の一端を荷ふ事となつた。全滿において集録し、國內メーカーの製造能力と對日期待量とを檢討し、兩者の擔當品種量を決定し、國內メーカーに對しては能力と重要物資特殊鋼の量的割當を決定して、之が工具組合に素材配給をなし、各社能力に比準する生産過程をとつた。斯くルートの製品は、政府の承認せる指定業者を通じて、需要家へ配給する生産配給要綱が樹立せられたのである。

さて之が組合の結成に對し政府及中央會業者の機構運営上の諸懸案の協議折衝は、頻々として情勢の變革を生じ、區々に轉變して、合理的に進捗せず、就中素材配給問題も、當初の

要綱通り、統制ルートに全面的に配給する事は難行にして、本年度（昭和十七年度）より實施する豫定も、漫然として時日を要する情況になつた。

然し乍ら、その根幹たる大綱においては、近々全面的統制の合理運行化を約束づけられ、現在は他言を要せず自然時間が解決する問題にして、當工場が不斷の努力の酬いられる日の近きことを確信してゐる。

我が工場設備も過渡期の域を脱しつゝ、第一階段が整備せられたるも、尙今後幾多の改善と充實を計り、現況に拍車をかけ益々多角形の暗礁を克服し、以て充分なる發展に期待せねばならない。

約一ヶ年間事務所内においては、苦難を友とし、外部との接觸をほとんど斷ち、建設の焦燥と壓迫に忍従し、將來の成果に結ぶ歡喜と克服の凱歌と、國家理念の進行を翹望し、今も尙、營々と精神力のルールを走る。

問題は亦ある。

製鐵工場前面の社宅用地には、十六年七月着工し、六棟十二戸の社宅建設に取りかゝり、十月には完成する豫定のところ、夏季輸送機關の停止等、豫期せざる蹉跌を生じ、年末一部

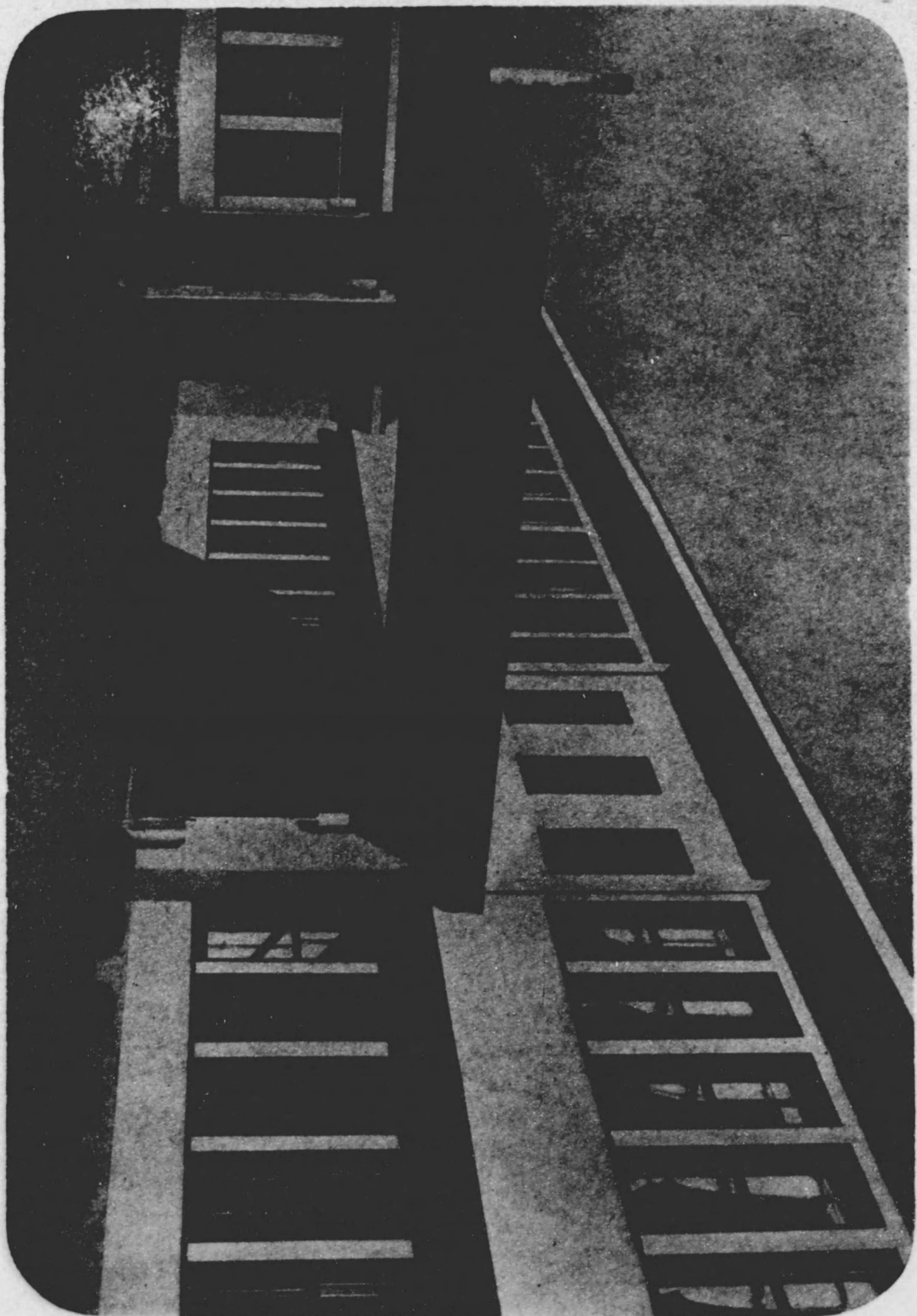
附帶設備を除き完成するに及んだ。尙六月頃より、滿人工員の獲得及び機械の調査、試作品や使用工具の製作にかゝり、徐々工場形態を保持して來たのである。

製品種目としては、ドリル、カッター、タツプ及びこれに關連する漸次製作の經過を辿り將來滿洲における此種業界の先驅者として、名實共に恥じざる実績を計上致すべく、今後の活躍は期して俟つ可きである。

戰時情勢下、業界の前途愈々多事多端の秋、よく窮迫を克服し、政府當局の企圖する全體主義計畫經濟の規正に従ひ、一步一步躍進的に其の使命達成に、或はまた運營の強化に邁進し、漸くその緒につくに至つた。

我等、此の建設の苦難の碑いしを座右に銘し、良き産業戰士として、自己を捨て、國家の急にあたり時世の急務を正しく認識し、深遠なる産業報國の理念の實現に、最善の努力を拂ふべく庶幾してゐる次第である。

(出口重雄記)



東北特殊鋼株式會社事務所の一部

第八章 東北特殊鋼株式會社五年史

一、緒言として

大東亞戰下、軍機械化整備は一段と喫緊性を加へ、之が必須資材たる高級特殊鋼並に精密工具の質的向上と量的増大とは、高度國防國家の至上命令として其の絶對的確保を要請せられるに至つたが、生擴の最前線部隊として國家寄托の重きに戒心しつつ陣頭指揮に當られる原田社長の抱懷される經營理念の一端を披瀝し、併せて社業の現況を紹介申上げたい。

二、設立動機と趣旨

今やキリンの商標を以て、輝やかしい未來性を確約されてゐる當社は、業界矚目的となつてゐるが、其の設立趣旨は左の如き國家的見地・大乘的意義に立脚してゐるもので、かく

てこそ創業以來僅々五ヶ年にして今日の社礎を築き上げたものであつて、社長の識見に敬服してゐるものである。

一、高級高速度鋼に工場能力を集中し歐米品を驅逐する。

當社の創立は昭和十二年四月であるが、當時國際情勢はまことに多事多難、まさに一觸即發の間にあつた。従つて各國とも之が對策に腐心し、我國產業界ことに之が原動力をなす鐵鋼業は歐米依存性を脱却する必要に迫られてゐた。當時好むと好まざるとに關せず、世界の經濟壘壁は愈々高まり、輸入制限・防遏・禁止と不可避の路を辿らざるを得なくなつて居たにも拘はらず、切削材料たる高級高速度鋼は、技術的に歐米品に一籌を輸せる關係上その増大せる需要と相俟つて、益々歐米依存性を強化せざるを得ない情況にあり、邦家のため洵に寒心に堪へなかつた。わが原田社長は此の間に處し、徒らに拱手傍觀一日の儉安は千日の悔を貽すべきあるを思ひ、利潤を度外視し、經營に關する幾多悲觀材料を熟知しつゝも、敢て獨往の道を進み茅篔を拓かんと企圖されたものである。產業界の好況を以てすれば當時ほど好遇はなかつたのであるが、易を以て利に就くを避け、利なく難き道に就かんとしたのである。

當社の設立趣旨の根本動機は、しかく至純を以て時艱に赴かんとせるにあつた。

二、本多博士・村上博士を始め金研・東北帝大工學部の錚々たる諸權威の積極的御指導を受けんとせること。

原田社長はエドガーアレン製鋼會社の日本及滿洲國總代理店として、多年高級特殊鋼を取扱つて來られた關係上、前記趣旨の下に之が國産化を企圖され、本邦金屬學界の最高權威東北帝國大學前總長（當時總長）本多光太郎博士ならびに同大學金屬材料研究所長村上武次郎博士等の賛同を得て直接御指導を仰ぐこととなつた。そこでこれが便宜のため金研所在地である仙台市に工場建設を意圖し昭和十二年四月二十日を以て當社を創立されたのである。

金研は、金研刀K S磁石鋼・超不變鋼・高硬度合金・特殊輕合金・磁性合金・砂鐵精鍊法・耐酸合金・新K S磁石鋼・不銹不變鋼・耐酸強韌合金・マグネシウム合金・高抵抗高導磁率合金・マグネシウムの製鍊法・金屬の防銹法・熱天秤・熱膨脹自記裝置等々枚舉に遑ない新研究を發表して世界學界を驚倒せしめつゝある鐵鋼界のメッカであるが、當社はまた金研と密接な關聯を以て立ち高級高速度鋼その他の研究・生産に於て積極的結合をなしつゝある。

三、東北開發の國策に呼應せること。

當時國鐵貨物のフル状態は高運賃を益々將來せんとする傾向濃厚なるとき、原料資材の補給・生産品輸送に有利なる阪神・京濱近郊を去つて、仙臺に工場をトした所以のものは、ただ單に金研、東北帝大工學部の有機的聯契のみを以てではない。貞山公伊達政宗に至つて經濟プロツクを完成し、自給自足を爲すと共に猛烈な排他的封建思想の確立を見た東北は、明治維新のとき薩長土肥に抗して文化圏外に置かれ地域的、氣候的關係と相俟つて遅々としてゐたのであるが、東北振興・東北開發は當時焦眉の問題として國策に採り上げられるに至つてゐた。半官半民たる東北興業株式會社並に東北振興電力株式會社は設立せられてゐたが、民間の協力なくしては終に克くその美を濟し得ない。こゝに觀るところあり幾多の不利不便を克服し、困難を豫想しながらも國策に即應して仙臺に工場を求めるとに至られた。

四、工業的處女地としての好觀材料

東北の地は工業的に見るとき全くの處女地であり、吹雪を衝いて逞しく立ち上る東北魂と強靱な肉體的條件とを兼ね揃へ、加ふるに純真朴直、謙虛に身を制し、誤れる勞働意識に阻害されることなく、新しい經營理念を樹立することに好適の地であることに想倒され、理想達成のため原田社長は地を仙臺に蒐められたのであつた。

かくの如く當社の設立は内外の情勢に即應し、一片耿々の新しき工業精神を以て、邦家の難局に處せんとして企圖され生誕を見たのである。

三、發展過程

昭和十二年四月二十日、本多前東北帝大總長・村上金研所長の賛同ならびに積極的御指導を得て創立したのであるが、當時は英國エドガーアレ製鋼會社より、インゴット或はピレットを輸入して之が加工を行ひ、更に姉妹會社であつた東北金屬工業株式會社（現在住友系）より鋼塊の供給を受くる計畫を以て、鍛造及熱處理設備に重點を置いた。乃ち昭和十二年二月十五日發起人總會に定められたる定款によれば

第二條 當會社ハ左ノ業務ヲ營ムヲ以テ目的トス

- 一、各種特殊鋼高級金屬ノ製作加工並ニ販賣
- 二、完成バイト工具類ノ製作並ニ販賣
- 三、火造り加工並ニ機械工作ノ請負
- 四、前三項ノ目的ヲ達成スル爲メ他ノ事業ニ出資シ又ハ他人ト共同經營スルコトヲ得

然るに日ならずして日支事變の勃發を見、更に擴大化されるに及び鋼塊の輸入は不可能となり、傍々東北金屬工業會社は住友系の經營に移つた、め茲に製鋼一貫作業の必要に迫られるに至り、製鋼工場の建設を行ひ、高周波誘導式電気爐數基を増設すべく、商工省に電気製鐵事業法による許可を申請した。昭和十三年十月二十一日附商工省指令十三、鑛第一三九九號を以て製鐵事業法による許可を得て、十二月より一貫操業を開始し、爾來優秀なる軍需用高級高速度鋼並に航空用高級特殊鋼の生産に邁進して來たのである。

かくて當社の責務いよゝゝ重大なるを痛感し、日夜生産に挺身いたしたのであるが、時局の進展は日一日と深化し、軍の作戰機動範圍も遂次擴大せられるに至り、これに要する此種軍需資材増産の急務なるべきに想到し、第二期擴充計畫を進めつゝある折柄、昭和十四年七月一日、軍に於かれては當社經營上の理念並に技術的價値を認められて、〇〇工場に指定されるに至つた。

同年七月二日畏くも、朝香大將宮殿下の御臺臨を仰ぎ、優渥なる御誼旨を賜はり社史に不滅の光耀を録することを得たことは只々感激に堪えないところであり、社長以下全従業員は火の如き烈々たる團塊となつて、御思召に副ひ奉らんことを御誓ひ申した次第である。

昭和十四年九月、當社は軍〇〇工場として時局の要請に即應すべく資本金増加の認可ならびに商工省製鐵事業法による増設認可を得たので、仙臺市長町八幡前の地をトし、仙臺工場建設に着手したのであるが、國際情勢の緊迫化は工事資材の入手難となり、廣袤五萬坪の地域に克く所期の計畫を樹立し得るや否や多少の懸念なきを得なかつた。然るに軍當局並に中央關係諸官省の御好意による資材の優先的配給、地方官民諸氏の絶大なる御支援により、工事關係者、従業員一同は志氣旺盛、戮力事に當つたので造工日を趁ふて進み、工場精神文化の中樞をなす青年學校先づ成り、ついで金岡八幡宮の造營、續いて昭和十六年三月各工場の竣工を見、火入式試運轉を行ひ、六月七日竣工式を行つて本格的操業の段階に入り、爾來順調なる業績を示しつゝ今日に及んでゐる。

生産設備の現況に就いては防諜上記述の自由を持たないが、砂鐵より製鋼への一貫作業を確立し、東北地方に無盡藏に埋藏する砂鐵を製鍊することになつてゐる。かくて外國依存のスクラップは原則として使用しない方針を堅持し、此の他工業用原料鐵も我國經濟圏内に於てこれを求め國策に呼應しつゝ邁進してゐる。

四、經營理念

原田社長の經營理念の一端を以下摘要する。

「良い製品は磨かれた魂の保持者によつてのみ生産され得る——製品は人格の表現であり、その權化でもあると言ひ得るのである。磨かれた魂とは醇化せられたる日本人の性格の體得、換言すれば日本精神を完全に把握せしむるのであつて、職場そのものが人格鍊成の道場であり、人格鍊成の道場と考へたい。従つて企業そのものは從來の如く、經營者と従業員とが單なる金銭的に結合されたり、賃銀契約によつて機械的に連鎖されるやうなものではなく私益追求の觀念を捨て、人格的に精神的に融合する教育的な統一的な協同體的社會建設をなすべきであつて、かゝる經營理念のうちに於てのみ、創造的な勤勞道が確立されると信ずるのである。

我々の祖先は働くことを「仕事する」「奉公する」と謂ひ、己が勤勞力を自己のものとのみ考へず、より上のもの、より高いものに奉仕する——而してそれは上御一人に歸一する處の日本的仕事道を、日本民族の血として體得したのであるが、この仕事に對する崇高な觀念

を、我社構成員の末端にまで滲透せしめ、醇乎たる日本人の魂の產業人を鍊成することを經營の根本義と考へ、これを遂行することが國家より當會社を寄託されたる私の一大責務と信じてゐる。かくて磨かれたる魂が相寄り、一大家族として親和しつゝ、自己を創造し、勤勞力を職域に奉公することによつて、人機は一體となり、卓抜精密な製品が可能事となると思ふ。従つて工場建築に先だつて、從來の經營眼を以てすれば不生産的なる青年學校及び寄宿舎の工を起し、次代を擔ふ青年の修養道場たらしめ、ついで由縁深き構内の培壘に信仰の中心體として、且又、精神の結集體として金岡八幡宮を奉祀し、神ながら神さびます聖域に日夕禮拜の誠を謁し、敬虔神に祈る心を以て職場に立たしめてゐるのである。

かゝる觀點に立つ當社の經營は、第一に生産行程の順調な流れによる能率化、第二に従業員の情操涵養及び健康増進、第三に技術的真摯なる研究を當初の三實踐目標とし、敷地五萬坪の東方寄り約四分の一の地域を事務的機關及び研究室試驗室に充て、南北を貫通する中央運搬道路を基準として防壁上完璧を期し、其の西部一帯を工場地帯とし、更に其の南西部に一大綜合運動場を建設したのである。又構内には可及的に樹木を移植して綠化を圖り、優先的に綠地廣場を設計して勞を醫さしめ、勤勞力の維持培養に力め國民體位の一翼に資せんと

したのである。

聞く處に由れば、獨逸の強大なる軍機械化を完成せしめた原動力は、(一)精銳なる科學と(二)優秀なる技術と(三)其の充實したる工業力にあるのであるが、當社の研究室は研究技術陣容の強化と斯界諸權威の御指導と相俟つて、高級特殊鋼並に精密切削工具に關する高度の研究を爲し、眞に魂を打ち込んだ鋼並に工具によつて世界の水準以上に到達せんと努力を續けてゐる次第である。

要するに當社の經營理念は「良き製品は良き人間によつて作られる」といふ信條を根本義となし、職場を即道場たらしめ、作業の中に魂を鍊成して行くことにあるのであつて、此の點仙臺の地は人情豊かに素朴剛健であり、私の經營理念が當會社に於て日一日と實現せられつゝあるやに感ぜられる事は欣快に堪へない。

當社は軍の〇〇工場であり、國家目的に副つて活用されつゝあるのであつて、換言すれば既に私の工場でなく國家の工場を私が寄托されてゐるのであつて、我々は軍人の心を以て己が勤勞力を國家に奉仕し、只管、滅死奉公の至誠を以て職域に挺身しなければならぬと存じてゐる次第である」

と、述べられ、これが實現に當られてゐる。

五、當社の製

當社仙臺工場に於ては、製鋼一貫作業をなし、長町工場に於ては自工場製素材を以て高級精密工具の生産に邁進しつゝあるが、高級高速度鋼にはキリン・ハガネ、工具にはキリン印と、何れもキリンの商標を以て世に問ふてゐる。

キリンは麒麟で、牡を麒と言ひ、牝を麟と稱し、白牙を恚らせて火焰を負ひ、日月と共に翔け、聖人の出づるに先だつて生れると翹望された支那古代の想像的神獸である。當社は物心總動員の今日こそ、凡ゆる艱苦に打ち克ち、キリンのやうな溢れる雄心と鬱勃たる氣魄を以て、國內供給はもちろんだ大東亞共榮圈に進出する意圖の下に、風を衝いて雲に乗ずる逞しいキリンの壯姿をもつて躍進の理想を掲げ以て商標としたのである。

イ、仙臺工場製品

高級高速度鋼キリン・ハガネは、各種鋼材の強力、又は高速度切削に適するやうに特別に精製された原料を使用し、高周波電氣爐で熔製したものであるから、組織が緻密で質が均等

である。従つて切削力が極めて優秀で實質的にも外國品を凌駕する優良國産品であると、ひそかに誇としてゐる。

本鋼は用途により左の五種類に區別される。

- キリン超高速度鋼第一號（商工省規格第四種）
- キリン超高速度鋼第二號（商工省規格第三種）
- キリン超高速度鋼第三號（商工省規格第二種）
- キリン超高速度鋼第四號（商工省規格第一種）
- キリン超高速度鋼レイ號

以上の高級超高速度鋼キリン・ハガネの外、各種高級特殊鋼即ち特殊工具鋼第一種・第二種自動車鋼十六種、シリクローム鋼、高クロームゲージ鋼等のほか、相當種類の鋼材を製造してゐるが、それらの詳細に就きては省略する。

二、長町工場製品

長町工場に於ては、キリン印高級精密工具に全能力を集中し、自工場製材質すなはち世界的水準にあるキリン超高速度鋼を材質として、既に江湖に問ふた各種のキリン印工具の聲價に

ついては今更喋々するの要はないのであるが、更に一層新銳の諸設備を擴充し、日に夜を繼いで研究に三昧する技術陣の完璧と、諸權威の御指導の下に工具界の先驅をきり、新規軸を以て世に問はんとする念願に燃えてゐる。苦心半歳にして先進會社を凌駕して完成し、軍の賞讃を得たるBK 64ドリル、BK 16ドリルを初め、高性能の螺錐、リーマー、バイト、タツプ等々の性能は他にこれを譲る。而して今や技術的に一飛躍し、グリーン、サンダーランド、フェローズ等の高級工具製作に歩武を進めてゐることを一言附言するに止める。

六、飛躍に具へて

高度國防體制の確立は、邦家當面の大課題であり、軍〇〇工場としての當社の使命は、この國家目的に敢然たる進發をなすにあるのであつて、製鋼原料を我國經濟圏内に確保することは勿論、砂鐵を原料とする製鋼一貫作業に對し凡ゆる角度より技術的検討を加へて、茲に製鋼原料並に技術の外國依存性を脱脚して國內資源による世界的優秀鋼を生産し、精機部門にあつては、未開の分野を開拓して高性能の精密工具製作に挺身せんとしつゝある。

この爲には當社顧問前東北帝大總長本多博士・村上金研所長を初め斯界諸權威の御指導と

研究部門における人的並に設備の充實と相俟つて遺憾なきを期し、生産有機體としての職制を一新し、以て、事業一家職域奉公の誠を竭して日本の新産業道を結實せしめ「よき製品は良き人より」の經營理念の下、商標キリンの如き逞しき雄姿を以て新しき大飛躍に具へんと庶幾致してゐる次第である。

(石垣豊造記)



(上) 滿洲亞鉛鍍株式會社亞鉛鍍鐵板工場の一部

(下) 同 亞鉛引鐵線工場の一部

第九章 滿洲亞鉛鍍株式會社史

鞍山の一瞥 鞍山の歴史は製鐵事業の歴史を以て始まる。現在の鞍山鐵鑛床が世に現はれたのは比較的近來のことで、明治四十二年八月滿鐵調査班によつて發見せられ、大正六年製鐵所建設、次いで昭和八年六月獨立して昭和製鐵所が生れたのであるが、それから早くも拾年。相次いで増産計畫により、日滿兩國の鐵鋼國策と、國內基礎産業の確立を目指して一大飛躍をなし、昭和製鐵所を取巻く一群の重工業を中心として、今や黒煙濛々、閃々たる鐵火の交錯と共に、鐵都大鞍山市を出現するに至つた。

營社の創立 滿洲事變の翌昭和七年、滿洲國が建國せられてから、資源の開發と、各種産業の勃興は、日と共に急速の發展をなして來たが、原田商事株式會社々長原田猪八郎氏は偶々昭和製鐵所の鐵鋼一貫作業を聞知せられ、滿洲國において使用せられる資材、特に鐵鋼類が、從來尠からざる關稅と運賃を要する内地、もしくは海外品の輸入に専ら依存したのに對し、國內自給自足に依るべきを急務とせられ、いち早くも、時の社長伍堂卓雄氏、常務富

永能雄氏と折衝を重ね、同社生産の薄鋼板及び線材の一手拂下げを受け、亜鉛鍍鐵板及び線材製品の製造販賣を企圖せられたところ、兩氏も多大の興味と好意を以て賛意を表せられ、極めて順調に創立の運びを見るに至つた。斯くて當社は大連鐵同志會員を糾合し、昭和八年五月二日資本金壹百萬圓を以て會社を創立し、本社を鞍山に置き、原田猪八郎氏が取締役社長に就任せられた。

工場建設 工場敷地に就いては、原田社長の懇望もあり、昭和製鋼所においても同社の傍系的事業として、一貫作業的緊密の關係を認められ、構内北端の一部を貸與せられたので、同八年八月こゝ草原の眞只中に、所謂草分工場として、社礎の第一石を投ずることになつたが、當時事變後日尙淺く、附近匪賊の出沒に脅さるゝことも幾度であつたらうか。然し幾干もなくして隣接大工場の續出となり、重工業の集中を見るに至つたのは、正に原田社長の豫斷の的中であつた。

斯くて第一期工事として伸線製釘、第一亜鉛鍍板工場の竣工を見たのは翌九年三月であつて、次いで國內需要の増大と各種産業の開發に刺激せられ、第二期工事として、昭和十二年末亜鉛引鐵線工場の新設、亜鉛鍍板工場、伸線工場の増設を完成し、更に第三期計畫として、

亜鉛引線工場、亜鉛鍍板工場の擴充を計り、今日に及んでゐる次第である。

工場敷地四萬一千四百五十平方米、建坪一萬二千八百平方米にして、年間生産能力は、亜鉛鍍鐵板において、亜鉛引鐵線において、洋釘において、幾何級數的に増大するに至つた。

作業開始 第一期工事竣工と共に、昭和九年四月より製釘作業を開始したるも、その主用原料たる線材は、未だ昭和製鋼所においても建設進行中に屬し、止むなく内地原料に依るの外なかつたが、輸入の圓滑を缺きたると、又採算の上より、自然經營も容易でなく、謂はば當社の苦惱時代であつた。

越えて同十年九月、待望久しき薄鋼板が昭和製鋼所より供給せらるゝに及び、當社も茲に始めて亜鉛鍍板の産出を見るに至つたが、當初より順調に、しかも優良の製品を擧ぐる事が出來たのは、建設・技術に對する神戸富永鋼業株式會社の指導に依る點が尠くなかつた。續いて第二期、第三期の増設と共に、昭和十三年度に至り最大生産量を擧ぐるに至つた。

一方昭和製鋼所における線材の生産も、十二年に至り愈々開始せられたので、當社に於ても之に伴ひ、製鋼作業の擴充と、新に亜鉛引鐵線の生産を始め、茲に漸く之等の需要も大半國內原料によるの機運に立至り、當社も企業當初の三種目を一先づ實現することが出來た。

現況迄

滿洲產業界に一轉期を劃したのは、申す迄もなく、昭和十二年七月七日蘆溝橋に端を發したる支那事變であつて、凡ゆる鐵鋼關係の需要を旺盛ならしめた。即ち事變完遂のためには、國內に於ける所要物資も、從來の如く大量を對日期待に仰ぐことが出来なくなつたのは當然の成行であり、自然資源の開発と生産の増大を招來する結果となつたが、同時に鐵鋼材の價格騰貴の傾向は産業の育成發達にも暗影を投ずるに至つたので、政府は康徳五年四月（昭和十三年）鐵鋼類統制法を發令し、配給を統制して消費の合理的調整と、價格の調節を行ふことになつた。當社關係としては原料線材において、次いで翌年十二月製品として茲に全く日滿商事株式會社を通じて、政府の統制下に置かるゝに至つた。

而しながら、昭和製鋼所の線材と、一部輸入量を以てしては、之等製品の國內需要は、漸くその一部を充すに過ぎない状態であり、今後當分此の狀態を逆るものと思はれる。

斯る情勢下に突如當社に一大打撃を與へたものは、昭和十五年度において日滿を襲つた對外關係の急變であつて、滿鐵の資金計畫を根本的に動搖せしめ、資金調達を不圓滑にしたことであつた。爲に作業に絶對必要である非鐵金屬——就中亞鉛の輸入難となり、主要營業たる亞鉛鍍板の操業短縮に至るの已むを得ざるに至り、引續き未だに苦難を蒙つてゐる次第である。

幸ひ國內における非鐵金屬の開発も、漸く進捗を見つゝあり、來る七月には當社所要の之等原料も供給せられる豫定にして、其の上は當社の亞鉛鍍板も復舊し、全能力操業に至るものと期待せらる。

今後へ 大東亞戰爭勃發に伴つて、北方鎮護の重任を擔つてゐる滿洲國は、云ふ迄もなく共榮圈確立の據點であつて、及ばず乍ら國防と建設の一端に携る當社に於ても、特に公共的生産機關としての性格を思ひ、従業員一同只管奉公の一念に徹し、打つて一丸、新しい事態に對應すべく不退轉の決意と氣魄をもつて、産業報國に邁進する覺悟である。

（附記）滿洲國が建國せられてより、本年は第拾週年に相當し、日滿の關係愈々緊密ならんとする時、恰も原田商事株式會社に於ては創業四十周年を迎へらる。正に二重の喜びとして慶祝に堪えず、茲に當社の創立を回顧しつゝ、生みの親原田商事株式會社の御發展を念願して止まぬ次第である。（昭和十七年三月末日記）

（園田 嚴 喜記）

第十章 原田冷凍機株式會社史

由來、熱の加減に關する仕事は、航空部門に關連するあらゆる仕事より、遙かに大規模の果しのない將來性のあるもので、科學するものは、寸時も此の支配・研究乃至は處置を忘れてはならない。過去十數年前、早くも此點に着眼した當時の吾が原田組は、セラネルモータース・コンボレーション・フリジデヤの滿洲總代理權を獲得して、大滿洲に新部門を開拓し、着々其實を擧げ、驚異の發展を遂げて來たのである。然る處、社長の御趣旨としての本願は、一刻も早く、之を獨立して本筋のものとし、最も有意義な大滿洲文化に貢献し得る一本立の會社に切り離したいといふ事であつた。昭和十二年六月一日、吾社の創立記念日遂に其時機が到來し、資本金二十萬圓の原田冷凍機株式會社が生れ出たのである。

社長 原田 猪八郎
 常務取締役 原田 惠 伍

取締役 大 浦 德 身
 取締役支配人 永 田 巳 代 治
 監査役 小 川 邦 雄
 同 出 口 重 雄

右の顔振れで、愈々本筋の活躍にはいる事となつて、其當時、内地の代理店でも餘り取扱つた事のなかつたロータリーキャビネットD型を、相當まとまつた數量輸入し、全滿洲への普及に勉め、一般に贅澤品と看做され勝であつた、電氣冷蔵庫を一躍必要品たらしめた事は、此仕事の經過中、見逃す事の出来ない一大貢獻であると思ふ。此熱を取り去る仕事の真隨は、取扱ふ商品としての全金額の嵩よりも、重要な食料問題に及ぼす効果が非常に偉大なもので、此爲には世界の距離が非常に縮められると同時に、四季の變化を克服し得るものである。即ち此装置の完備は、世界の果ての國々に産する食糧品を容易に需給出來得るものである。概して食糧品は貯藏方法の如何によつて、量的數字を左右するもので、此の保存方法が不完備の場合は、全量の三十パーセント以上を腐蝕し去るものである。今次南方進出に際し、各輸送船の内部装置中、冷蔵装置が必要不可欠のものとして、第一條件に入れられ

てゐる所以のものは、極めて明白に首肯でき得る。更に他方面を此機をトして開拓し、醫學の域に一步を進め得た事も之亦實に欣快の至りである。非常時局下、營利問題を超越して、一種の權威と云はうか、或種のブラウドに價する品位を保持し大貢獻を爲しつゝ進みうる事は、實に貴いものと云つても、決して過言ではないと思ふ。血清の培養及貯藏然り、長期乾燥貯藏、無菌乾燥装置、高貴藥品の理想的完全貯藏然り等々に、特別の存在を認められてゐるのも其爲である。

株式會社創立直後滿洲も爲替管理が強化され、然も製造禁止と云つてよい程の立場に餘儀なくされた爲に、經營上非常に苦境に達着したのだが、たま／＼當初より保留状態に置かれていた内地製品取扱方を實現し得た事で糊塗する事が出来、本日までの業績は、第一回一割、第二回第三回各一割二歩、第四回一割五分、以後一割二歩の好配當を持續し得、自己資本に就ても、面目充分の域に達し得て、將來、或る程度の計畫々策に當り充分の餘裕をもつてゐる次第である。此の仕事の將來に關しては、食糧品、天産物の大口需要は勿論、軍部病院等の特別装置、恒濕恒溫装置、乾燥装置、醫學装置を根源として進む場合、其の需要は依然としていつ果つべくもなく、現在物資條件を辿つては、到底其の十分の一をも満足に應じき

れない状態で、何といつても、此の製品獲得確立が第一要務であると思ふ。此の事に關しては、製品の性質と、外界のあらゆる條件よりして、矢張り内地に立派なる製造部門を持つ必要があると思ふ。

何れにしても、我々としては此の有意義なる仕事を天職として、粉骨碎心の洵を盡くす事が光榮ある我等の任務と思ひ挺身してゐる次第である。

(永田巳代治記)

第三篇 附 錄

第一章 原田家再興の念願

原田商事四十年史は、取りも直さず社長原田猪八郎その人の生長發展史である。原田商事の全性格を貫くものは、氏の強靱な意志そのものの表現である。原田商事四十年史と原田家とは何の連鎖もないかの如くであるが、原田社長あつての原田商事であることに想到するとき、氏の心肉を生んだ原田家と、原田商事とは切つても切れない血の連繫を持つてゐると考へられる。こゝに附録として、『原田家再興の念願』の一篇を採録する所以である。

世の多くの子がさうであるやうに、母堂は氏の信仰の對象であつた。殊に氏が僅か十三歳のとき、歿落した原田家の重荷を一身に背負ひつゝ黙々として福岡縣遠賀郡役所に勤められてゐた父君がその死水をさへとることができないほど文字通り溢焉として逝去されてからは、母堂の心痛は當時僅に十三歳の氏にも痛々しいほどであつた。暗い燈火の下で、母堂はよく原田家の由緒と傳統を語り、「強くそして正しく育つて、きつとこの原田家を再興するんで

すよ。お父さんのお心を正しく承け継いで立派な人間になるんだよ」と諭される母堂の顔は原田家の血の匂ひさへ感ぜられるほど峻厳なものがあつた。「五十年後のこの一瞬でも、ちつと目を瞑ると在りし日の母の面影が浮ぶ」とは氏の今でも述懐される處である。

「原田家を再興しなければならぬ」

氏はこの言葉に全生涯を貫いて來られた。母の子に與へる力ほど世の凡ゆるものに優つて偉大であり千鈞の響を持つものはない。氏の人世史は苦難に始まつて苦難の現在を持つ洵に苦難の連続史であつたが、それを突破し突き抜ける力は、母堂が今なほ自分と共にあるといふ強い信念と、脈々として進み流れ來つた原田魂に外ならなかつたのである。

氏の故郷は、福岡縣糸島郡一貴山村字武である。西筑の一閑村ではあるが、そこは氏の魂の搖籃地であり、母胎であり、歴代原田家先住の眠る菩提所である。氏の生れた當時、原田家は七百年の家格を持ち、年経りてはゐたが家屋敷は三四百年の歴史を物語り、土地の人は代官屋敷と稱してゐた。代官には宿代官と領地代官との別があるが、氏の家格はその領地代官であつて、明治維新の變革に因り家計は富裕ではなかつたであらうが、その門閥としての光と家格は持つてゐた。

糸島郡誌によれば祖父原田多仲太を評して

「原田氏は豊前中津藩の代官として數世の間武に在住す。多仲太は資性穎悟殊に數學的天才を有せり。職務の傍ら算數を研究し精妙の域に達し獨創發見する所多し。近郷風を聞いて就いて學ぶもの多く、著書數卷その研究を録せるものありしも惜い哉今は散逸して見るを得ず。孫に猪八郎あり。」と述べられてゐる。

福岡の持つ日本の郷土史家木下鑽太郎氏は、先考直之助氏の五十年忌に方り、原田家の史的研究を披露されたが、氏の研究と、前記糸島郡誌第五節糸島史を参照綜合して其の一部を録すれば、「朱雀天皇の天慶三年五月三日大藏春實を對島守に任じ、錦旗を賜ひ藤原純友を討たしむ」とある。春實は純友を博多に討ちて軍功あり、十一月十日功を以て征西大將軍に任ぜられ、菊桐紋章および天國短刀を賜はり、筑前・豊前・肥前・壹岐・對島を管領し、御笠郡椽城に在つて、九州における兵馬の權を掌握し大宰小貳となつた。後、椽城の麓にある原田に城を築いて居住し、原田を氏とした。その後裔原田種資に至り、堀河天皇の嘉承元年十一月七日出雲國流人前對島守源義親の侵略を討つて勳功を立て、大宰大監筑前權守に任ぜられたと見えてゐる。

種資より種納、種成、種雄を経て種直に至つたのであるが、種直は時代の敗者平家の請託を入れて終始平氏のために孤軍奮闘し、當時の強権者源氏に對して飽くまで節を屈せずして闘ひ抜き、遂には源頼朝が總追捕使となるに及んで捕へられ、鎌倉扇谷に幽囚されること十有三年に及んだ。木下氏は原田魂の烈々たるを茲に見ると稱揚されたが、編者もまた、「原田の負けじ魂」をここに看過し得ないのである。

然らば何が故に、保身救命を考へずして、平氏とその行を共にしたであらうか。一言すれば平重盛の意氣に感じ男子の善諾を重んじたところに歸する。平家物語の作者ならずとも、明哲賢穎の重盛は、驕る平家に祇園精舎の鐘の聲を聴き沙羅雙樹の花の移ろひ行くを觀じて、平家歿落後の悲しい經營にまで想到せずには居られなかつた。落ちゆく先は雲涯萬里の九州が彼の胸中に描かれ、その九州に功名何ぞ論ぜざる慨世の志士種直の風貌が大きく彼を支配した。重盛はその養女を娶らるべきを懇請し、種直又重盛の意中を掬してその請を入れた。この瞬間、既に種直は男と見込まれた意氣に死生を宇宙に置いたのである。彼のその後の活躍は、その扇谷に幽囚せられるまで只耿耿の義心にのみ行動した。

安徳天皇の壽永二年、天皇西海に遷幸し給ふや、二千餘騎を率ゐて守護し奉り、後に平氏

が、天皇を奉じて山鹿城主兵藤次秀遠の城に入るや、九州の豪族の多くが當時の權門源氏にくみして保身を計つたのであるが、種直のみは初心を譲へさず、天皇を護つて讃岐に渡り、屋島を以て行在所として守護し奉つたのである。しかし乍ら屋島・一の谷で戦ひ利あらず、菊地隆直・山鹿秀遠と共に戦艘五百餘艘を以て檀の浦で再度の決戦を圖つたのであるけれども、遂に敗れ幽囚の身となつた。後鳥羽天皇の建久八年、種直は免されて本國に歸つたのである。現在一貴山村龍國寺には重盛がまつてある。

後深草天皇の建長五年、種直の裔原田次郎大夫種次及び嫡子次郎大夫種頼は、心を合せて高祖城を築いた。

高祖城は怡土城の一部であり、糸島郡と早良郡の分岐に立つ要害の地である。蒙古襲來の今津灣は今宿村を隔てて指呼の間にある。

元寇の役に於ける原田家の忠誠に就いては、「改正原田譜」に左の記がある。

「後宇多帝弘安四年蒙古より高麗王をかたらひ、大將阿刺子、范文庫、忻都、洪茶丘等四人軍士十萬人を率ゐ、數千艘の兵船に取乘て、同七月築前國志賀能古島邊迄雲霞の如く寄來る。高祖の城よりは最程近ければ大宰小貳等に謀し合せ、原田種之父子海邊に馳向ひ所々に於て待受合戦せし所に、閏七月朔日大風頻

に吹て蒙古の賊多く溺死す。殘黨猶當國鷹島（今玄界と云。或作ニ蛇海ニ）に在しを、小貳三郎右衛門景時を大將にて菊地・原田、松浦の兵百餘艘の船に乗て鷹島に押寄て攻ければ蒙古高麗人不叶して討るゝ者多し九州の軍兵忽に異賊三萬人を生捕にして博多津に歸り、同九日那珂川の邊にて是を斬殺す。……原田種之は種直より八代の孫にて子息を種房といふ。父子共に此度異賊を防ぎ國家に勳功を立武勇の名をぞ顯しける。鎌倉の將軍惟康親王賞を行はせられ御教書を與へられ所知を恩賜ありて、嫡子種房をば大宰大監に任ぜらる」

と記載し、また、

今度種之父子の手に討取首四百餘を怡土郡に持歸り居城のあたりに埋て一寺を建立し亡賊の跡を弔はしむ高麗寺是也。

とも見えてゐる。

更に後醍醐天皇の元弘三年、新田義貞義兵を起して北條氏を討つや、赤誠の至情燃ゆるところの高祖城主原田孫次郎種遠は、大友貞宗、小貳貞經と合議し、探題北條英時を姪濱の館に攻めて之を割腹させ、北條氏の一族左近大夫貞義を筑前帆柱山に攻めて之を誅し、九州略々鎮定するや勤皇の大旗を掲げて上洛したのである。國內鬭争に於ては弱者の楯となり、大

義動くと見るや赤誠の微忠を披瀝して、常に天皇の醜の御楯となつて、敢て後孫のために長計を克くなさなかつた原田家の祖先に編者は衷心より敬慕の念を懷くものである。原田社長が、「この原田家を再興する事が、私に對する祖先の、母の至上命令であることを常に念願とし生活の規範となし來つたことは、若し私に誇り得ることがあるならば、此の一事のみではないだらうかと考へてゐる」といはれるのも宜なる哉である。

しからば、かくも名望を誇つた原田家が何故に崩壊したのであらうか。我々はまたそこに原田魂の躍如たるものを見、血の湧き上るのを感じるのである。

原田家の歿落は一に懸つて雄藩島津氏への恩顧にであり道義にであつた。先に原田種信は筑前秋月氏と共に誼を通じ、島津と共にその生死を誓つた血盟關係にあつた。

天正十四年秀吉は、黒田勘解由孝高、安國寺宮木入道を先發とし、毛利、吉川、小早川の諸將は山陽道の兵を發し來り、赤間關、大里、小倉の兵は風を臨んで皆之に歸順した。忽ちにして先遣小早川隆景の軍は高祖城を攻略なすべしとの飛報は既に達したのであるが、信種のみは倨然として之に服さなかつた。これは原田、龍造寺、秋月を以て、秀吉いかに雄強なりとも一兵だに九州に入れずとの連名を以て島津氏に公約した道義を貫ぬき通すために外な

らなかつた。

だが、破竹の進軍を續くる豊臣勢には如何ともする能はず遂に敗れ、高祖城は落去の後天正十四年十二月切り崩され、今はその城趾に老木の蕪々たるを見るのみである。こゝに武士としての原田家は土着の豪族となり、佩刀を鍔にかへ乍らも、高き家格を持ち、豊前中津藩の代官として明治の大變改期に遭遇したのである。

編者は餘りにも原田家の家系に就き語り過ぎたかも知れぬ。しかし編者は原田家興亡の跡を辿るうちに、祖先の中にある原田社長その人、氏の中にある祖先を顧みて、その相一致する血の統一性に感慨なきを得ないのである。

源平二氏の相尅に際しては、時の敗者平氏の終焉までを闘ひ抜き、旭日の如き豊氏の前にも、一片の義のあるところ頑として伏せず、遂にその所領をすら歿收されるに至つた原田家祖先のこの氣慨、木下氏のいはれる「原田魂」は、不知不識の間に肉體となり血液となつて氏の身心を形成してゐる。傳統の強さがこゝにある。特別攻撃隊のあの盡忠も、皇紀二千六百年の水漬く屍、草むす烈々の神州の氣が傳統として身内の凡ゆる細胞を形成してゐたものであらう。この故に氏は

「私はふるさとをこよなく愛し、祖先からの血の流れの上に、しつかと故郷と結びつかねばならぬと思つてゐる。祖先を敬慕し故郷に堪へ難い愛著を感じるところに日本の國體は明徴せられる。私は私の子や孫が原田家の靈の宿る——宿命の故郷糸島を知らずに成人していくのをいとほしく思ふ。そして私は私の母が寝物語りに原田家を語つたやうに、いつの機會か家史を按じて、ふるさと、共にあらしめるやう努力したい。祖先墳墓の地にしつかと足をふまへ、祖先の靈と共にある喜びを満身に感ずる人間であつて始めて聖代の國たみとしての眞個たる機能を發揮できるものであると信ずる。」

と語られてゐる。

前述のやうに、武人としての原田家は高祖城と共に大義に殉じたが、この熾烈な精神は、領地代官として土地を宰領しつゝ、世襲的に脈々として流れて西筑に一家格を持つてゐた。世の政治的な動きは、豊家より徳川三百年の治政下に移行したが、隱士的豪族である原田家には、その影響は少く、平穩な歲月は星と霜とのみにあつたであらう。當時の原田家の記録は徴するに乏しいが、爛熟期に達した封建制度は大きいうねりを以て邊境の地にも押し寄せて來た。世襲制度は否定され、因襲と舊時代的權勢は根本より瓦解し、原田家の持つ地盤は一舉にして崩壊した。裸一貫になつた。浮び上るものは浮び上り、沈むものは沈んだ。これ

を想へば現在の強力な計畫經濟下における合併統合は何等かこつに價ひしない。
それはとも角、生命素を根こそぎにゆすぶられ、時代の嵐に、遂に數世紀住みなれた故郷を後にして、親父直之助氏は、氏と母堂を連れ、ほど遠からぬ福岡に居住するやうになつた。時に齡十一。

福岡で借家住ひするやうになつて、氏はほんとうの人生に直面させられた。郷里糸島に居る頃は、何といつても家格の上から別格扱ひであつたが、福岡に移住すると共に世間の中に裸で投げ出されたからである。年少の氏には世間の有爲轉變はそれほど身に滲まなかつたが、父君と母堂とは家格の中に身を處して來ただけに、傷心の數々に鞭うたるる思ひをされたことであらうと思はれる。一時生活のたつきを失つたやうに落膽された父君直之助氏も、妻子の身を思ふては座することも出來ず、傳手を求めて福岡縣遠賀郡役所に奉職され、不自由ながらも一條の希望は春到來を思はせたのも束の間、旅舎に妻子の名を呼びつゞけつゝ此の世を去られたのである。

時に氏は十三歳。其の日より、原田家再興の重責は氏の雙肩に負はされた。

天涯、まさに頼るとて頼るものなき親子鳥の境涯ではあつたが、母あるが爲に世は光に満

つる思ひであり、茅屋の起き臥しも楽しいものがあつた。母堂もまた同じ思ひであつたであらう。

思へば地方的名望の家に生れ、齡四旬を過ぎた母堂が、親戚縁者とても少い福岡の地で、内職の針仕事に精魂を傾けて、最愛の一子を中學に通はせた不屈の生活力。母の愛に抱かれること餘りに大きく、その内面的苦悶は幼かつた當時の氏にはよく了解し難いことであつたが、人生の苦難を嘗める毎に、氏をして、母堂の愛情がいかに深く、いかに崇高なものであつたかを涙せずして克く考へ得ないものがあつたであらう。油のぬけた髪、生活にうちひしがれ乍らも、尙子の愛育に不退轉の努力をつゞける母、世にこれほど崇高なものが又と有り得ようか。母の愛情のみこそは實に困窮の中にして愈々光輝を増すものである。

「母を樂にし、幸福にしてあげたい」中學に通ふ氏の生活信條はたゞこの一點にかけられてゐた。そしてそれは原田家再興の大念願に氏の魂を躍動せしめた。

かくて中學修猷館を出た氏には、上級學校に通ふよりも——もちろんその餘力としてはなかつたが——母堂の生活を樂にさせることで一杯であつた。勤めるやうになつたとき、「やれ〜。これでお前も一人前になつた。どうか立派に原田家を再興しておくれ。亡くな

つたお父さんも喜んで下さつてゐるであらう。ほんとうに良かった……」と、母堂は目を細め歡喜にうち顫へながら、氏の洋服姿を見護られた。あの時の母の目に宿る白い露を何と表現したら言ひあらはせるだらうか」とは、氏の悲痛な述懐である。

しかし天の試鍊はまだ續いた。氏の二十四歳の十二月、その母堂も遂に世を去られた。冷たくなりゆく母堂の遺骸に抱きつき動哭せずには居られなかつた。止めようとしても止めどなく泪は頬を傳ひ、天の與へる餘りにも苛酷すぎる鐵鎚を、心から呪はずには居られなかつた。母の死！ 母の死！ 空虚な日が續き、寂莫となげやりの四五日は、堪へようとしても堪へ得ない佗しい日であつた。今までは母堂を對象として生活にはりを持つて來た氏であつた。たとひ今後、成功したとしても誰が喜んでくれるだらうか。母堂あればこそ苦勞の仕甲斐があつた。どんな苦しみも我慢することができた。廣い世界に親一人子一人。その母堂をなくして誰が氏の成功を心から喜んでくれるといふのか。原田家をたとひ再興したとて、誰がそれを心から喜んでくれるといふのだ。世の中は眞つくらな袋小路の感じがして生きる希望さへ失はれ勝になり、一步誤れば厭世的な考に陥らんとする自分を顧みて慄然とする氏であつた。

しかし、これが亡くなつた母の遺志だらうか。轉輾反側、無爲に日を送り迎へることが生前、峻嚴な態度を以て訓戒を與へられた母の意志だらうか。憂鬱のどん底に沈み自暴自棄にさへなり兼ねない自分を地下の母は何と見られてゐるであらう。さう考へると氏は、母堂の位牌に合掌念座して、靜かに身心を整へ調息すると、燈明はかすかに揺らいで「お母さんは、いつもお前と共に居るよ。しつかりなさい。元氣を出して……」と語られるやうな氣がした。

(さうだ。母のなきがらは地下にあるが、母の心は自分の心の中に生き、母の精神は自分の精神の中にあつて、いつまでも加護して下さるんだ。これではならない。父の、そして母のいやそれのみではない祖先の靈はいつも自分と共にあるのだ。自分の肉體は自分のものではない。頑張らねばならぬ。しつかりせねばならぬ)

氏はさう考へてくると、言ひしれぬ迫力と、盛り上り満ち溢れてくる生命力に、ぢつとして居られないやうな感動を覚え、他人の隨使のまゝに録々として日を送る自分を顧み「どんな苦勞も突破して、獨立し、一日も早く原田家を再興しなければ、母に、祖先に、何と申譯けされよう！」

かくて、氏の獨立への希望は、此の時しつかと決心づけられ、原田魂を以て困難にぶち當れば、決して爲し難い業ではないのだといふ確信が、洪水のやうに胸に擴がつてゆき、二十五歳、遂に獨立が決行されるに至つたのである。

第二章 原田社長の公的活動

原田商事株式會社社長原田猪八郎氏は、旺盛な活動力と卓抜なる經營方策を以て、蔚然たる今日の原田商事の社礎を建設し、多くの工業會社を創設して自ら陣頭に指揮をとられつゝあることは本篇に於て述べたるところであるが、氏はまた愛國的熱情の進るところ、公的部面に盡瘁されることもまた尠くなかつた。茲には附録的にその二三を記載することにす。蓋し原田商事發展史と間接的ながら關聯するものがあると信ずるからである。

第一節 大連に於ける公的活動

氏の在連時代の公的活動は、遠く大連實業會に出發してゐるが、大正六年大連商工會議所の常議員となられて以來、京都移轉まで引續き其の任にあられたから、實業會當時より通算すれば前後十五六ヶ年間、時には會の急先鋒となり時には黒幕的地位にあつて盡瘁されると